
紫煙の門

こんこん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紫煙の門

【Nコード】

N3483E

【作者名】

こんこん

【あらすじ】

主人公、月夜海は八坂市に住む17歳の高校生である。海には昔から不思議な力が一つあった。それは他人とは違う飛びぬけた洞察力・・・そんな海はある日変わった女性を目にした。得体の知れないものを殺す女・・・その光景を目の当たりにしてしばらく魅入ったように眺めていた。そして彼女が何者かも知らないままに数日を過ごしていた。浅木真希、千草朱里、柏原京たち同級生と何事も無い学園生活を送っていたが、ある日、浅木真希がとある事件に巻き込まれた。そこから月夜海の今まで暮らしていた何気ない日常が一

変化するようになる。

1話

俺は漆黒の闇に立つ血まみれの女性を見た。

彼女は俺と対して年は変わらないだろう。

その姿は俺の目の奥に焼かれるかのように鮮明に残っていて、忘れようにも頭の中から離れなかった。

長く伸びた黒髪、見慣れない服、睨み付けただけで足がすくんでしまいそうな深い海の底のような青い目を持っていた。

それはたまたまだった。

俺は買い物を思い出し、いつものコンビニに向かう途中、普段はあまり通らない暗い路地裏を通った時だ。

彼女は息を切らしてそこに立っていた。

月明かりに照らされたその横顔はとても美しく見とれてしまった。

「あ……」

俺が彼女を見て立ち止まると、彼女はすぐに気がついた。

まずいと思ったのだろうか、俺を睨み付けるなりその場をすぐに立ち去った。

彼女は一体何をしていたのだろうか？

その疑問だけが残った。

俺は彼女のいた場所を見てみた。

「う・・・おえ・・・」

言葉を失った。

そこにあつたのは人間ではない見たこともないような得体の知れない物体が血まみれになって切り刻まれていた姿だった。

俺は意識を失いそうになっていた。

その得体の知れない物はいさっきまで生きていたのかびくびくとまだ動いていた。

さっきの彼女がやったのか？

その疑問だけが残った。

次の日

俺の目覚めは最悪だった。低血圧という理由もあるが昨日の出来事が気になって眠れなかったからだ。

目覚まし時計にたたき起こされること三回、ことごとくそのスイッチを切っては、二度寝防止のタイマーが作動した。

そして五回目、ようやくベットから重たい体を起こした。

「……眠い……」

独り言を言いながら洗面所へと移動する。

そして顔を洗い、頭の寝癖を直すために頭から水をかぶった。

「うー……」

ようやく脳の中が少しずつ動き始めた。

頭をごしごしとタオルで拭きながら、さっきの部屋へ戻る。

昨日の出来事が気になったのでまずテレビを付けてみた。

しかし番組をいくら変えても近所で殺人事件があったという報道はなかった。

「おかしい……」

それでは昨日見た物はなんだったんだ？

まさかあれは宇宙人で国家機密ということで処理されたか？

確かに……人ではないものだった。

俺はいろんな説を勝手に考えながら、学校に行く準備を整えていた。

俺の名前は月夜海。年は十七歳で性別は男

ここから歩いて数分の所にある五門高校に通う高校生だ。

父親と二人暮らしだったが、その父親が三年前に行方不明になった。

母親は小さい頃に死別したと聞いている。

しかし俺の家にはそんな母親の写真が一枚もなかったから、それも本当かどうか分からない。

父親は放任主義者で俺を置いてふらふら出かけることが多かった。一週間位顔を合わせなかったこともあった。

だから、小学生の頃は行事と言う行事に顔を出すことも無かった。

しかし帰ってくれば、仕事が入るまでの間は必ず一緒にいてくれた。

「お前には・・・父親らしいことをしてあげられなくていつもすまないと思っている」

それが口癖だった。

そして中学二年生の時に突然姿を消した。最初はいつものことだろうと思っていたが、待てども待てども帰ってこなかった。

遂に警察にまで連絡して捜索願を出してもらった。

しかし未だに見つからない。

あの頃の俺には突然のことでは何が起こったのか分からなかったが、生きていくことができないわけではなかった。

幸い父親は俺が知らない事業で得たお金をかなり溜め込んでいた。しかし僕はそのお金のことを後で知った。

なぜなら腹黒い遠い親戚とやらが僕を言葉巧みに騙してそのお金をほとんど持っていったからだ。

まるでそんなものはないかのように。

そして俺に残ったお金は、かろうじて大学まで進学できるかというほどだった。

それでも生活はできた。

月三万のアパートと二万の食費で何とかやっていけていた。

まあ、バイトをしなくては貯金を切り崩さなくてはならない状況だが。

俺はお金にそれほど執着心はなかったので生きていけるならそれでいいと思っていた。

だから親戚に騙されたことを後で知っても腹は立たなかった。

お人よしと言われればそれまでかもしれない、しかしそんなものでいがみ合つのが嫌なだけだ。

一人で生きていくのは、周りから見ればこの年にして辛いと思うかもしれないが、そんなことはない。

生きていけるといえることが大事なんだ。

そんな環境に置かれている自分はまだ幸せなんだ。

「さて・・・今日も暑くなりそうだな」

僕はドアに鍵を掛けると、アパートを後にした。歩くこと数分、昨夜見た地獄絵図のような惨劇の舞台の前を横切った。

「・・・」

とりあえず立ち止まる。そしておそろおそろ昨夜の場所に近づいた。

「あれ？」

しかしそこには何も無かった。

血の跡も肉片も、何も落ちていない普通の路地裏だ。

「悪い夢でも見たかな？」

そのまま気にせず学校に向かった。

2話

キンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り響いた。

まずい、昨夜の出来事に気を取られて遅刻してしまう。

俺は走って校門を潜り抜けた。

そしてそのまま教室まで駆けていった。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

息切れしながら自分の席までよろよろと歩いた。

「はい！月夜が来たところで出欠始めるよ」

担任の女教師は冷めた目で僕を見ると次々に名前を呼んでいった。

良かった、間に合った。

「月夜くん・・・珍しいね、遅刻ぎりぎりなんて」

俺の隣の席に座っているクラスナンバーワンの優等生、浅木真希が話しかけてきた。

髪の毛はロングで、品の有る顔立ち、スタイルは抜群だった。

品があるのは当然で、彼女の実家はこの市内で二本の指に入るお金持ちだった。

礼儀作法もいろいろ学んだのだろう。

俺と真希は一年の時からクラスが同じで、話すことも日常的に何回かあった。

そこで分かったのだが、彼女は大人しそうに見えるが、意外にも押しの強いタイプだということだ。

「そう？あまり意識したこと無いけど・・・昨日は少し寝不足でね・・・」

「そうなんだ」

真希はくすくすつと笑った。

「あかさ・・・月夜くん。この間の約束覚えてる？」

約束？何だ？

俺は必死で思い出そうとした。しかしその姿を見て真希は俺が覚えていないことを察した。

「ひどーい。忘れてたでしょ・・・」

「いや・・・」

「その顔見れば分かるって」

やばい。その通りだ。

しかしそんな最悪な状況を救ったのは女教師の一言だった。

「そこ！騒ぐな。いちやつくならどっかに行け！馬鹿！」

とても教師とは思えない発言だ。

流石に真希も恥ずかしさのあまりに赤面になった。

「そんなつもりじゃ……」

俺がそこまで言いかけると、

「はんっ！男の言い訳は聞きたくない！」

ばっさりだ。

何かあったのか女教師、新城冬香、二十四歳独身、彼氏いない暦
二年……

「なんか言ったか？」

「いえ……」

やばい。今の口に出していたのか？俺。

とりあえずその場は落ち着き、一時限目に入入した。

女教師冬香は、そのまま専門の科目である数学を教えるために残っていた。

「・・・んで、ここどこを代入して、この式になるわけで」

カツカツとチヨークで書かれる音が響き渡った。

「あのさ・・・さっきの続きなんだけど」

真希にひそひそ話しかけてみた。

「ふーん。月夜くんって薄情者だね。私との約束覚えてないなんて・・・」

明らかに怒っていらっしやる。

しかし記憶に無いのは確かだ。そこはしっかり確かめておかないと気になって仕方がない。

「忘れたのは謝るよ・・・でも何の約束したか本当に覚えていないんだ。頼む、教えてくれないか？」

素直に自分の非を認めて謝った。

すると真希はそれならしょうがないといった感じで教えてくれた。

「私の家で、勉強会やるうって言ってたでしょ？」

勉強会？そんな約束したかな？

「次の日曜の午後にやるって、三日前に話したわ」

三日前？

「いつ話したっけ？」

「三日前のお昼だってば・・・まあ、月夜くん半分寝てたみたいだけど・・・」

俺は思わず叫んだ。

「そんなの覚えてるわけ無いだろ！」

でかい声がクラス中に響き渡る。当然、周りは

しーーーーーん

「あ・・・」

女教師冬香を見る。

やっぱり、予想通りだ。

怒っていらっしやる。

「ふふ・・・ふふふふ・・・」

「はは・・・はははは・・・」

俺も合わせて笑ってみた。

「いい度胸だ！」

次の瞬間黒板消しが飛んできた。

まずい！

そう思って俺はかわした。しかしかわした先には弾丸のようにチヨークが飛んでいた。

しかも数本。

まさか黒板消しが囷とは夢にも思わなかった。

そして俺はチヨークの嵐をまともに顔に受けることになった。

「ぐは！」

倒れ落ちる俺とそれを見て青ざめるクラスメイト。

「この色ボケの軟弱者が！」

吐き捨てるような一言。

本当にこの人は教師なのか？いや、その前に女なのか？

気の毒にとばかりに真希は眺めていた。

いやいや……この原因の大半はお前なんだぞ。

そう叫びたい気持ちでいっぱいだった。

「さて・・・授業はここまでだ。明日は今日の課題を提出するよう
に。」

出さなかった奴は、どうなるか・・・分かってるよね」

笑顔で話す女教師冬香、みんなひきつっているぞ。

3話

俺は授業の大半を聞き逃していた。それもそのはずだ、記憶が半分飛んでいたのだから。

「大丈夫か？海・・・」

一番仲の良い友達、柏葉京が心配して俺の側に来てくれた。

「浅木と何かあったのか？あんなでかい声出して・・・
そりゃ、あの無敵教師に怒られんのも無理ないだろ」

「ああ・・・って言うか。あいつは何者なんだ？普通の女じゃないぞ」

「そりゃそうだろ。あいつは男の体育教師に昼飯を賭けた体力測定の勝負を挑んで、

全項目で完膚なきまでに叩きのめして、五人前のラーメンを食べた女だぞ・・・」

「いや・・・ゴリラだ」

その話を聞くだけでも尋常じゃない。

「なんで数学の教師なんだ？」

「それがな。体育だと人を殺しかねないから、数学の方がいろいろ考えられて自分を抑えられるという理由らしい・・・」

体力馬鹿なのか？それともよほどのサディストだ。

「聞かなきゃ良かった・・・俺、絶対あいつに睨まれてるもん」

「くくく・・・そうかもな。あいつ、今日は特にご機嫌斜めだしな」

「そうそう・・・何でなんだ？」

「町を歩いていたら奴に聞いたんだけど、あいつ告白して振られたらしいんだ」

「え？」

「あいつさー見た目と違って、体育会系よりも美少年系が好きでな。どうも最近まで二十歳位の女みたいな男にぞっこんだったらしいんだよ・・・」

想像もできない。

「それで・・・町の喫茶店で自分から告白したらしいが・・・」

「見事玉砕!」

「その通り!冬香さんは友達にしか思えないって断られていたらしいんだ」

その話を聞きながら何かが視界に飛び込んだ。

「これは・・・まずい・・・」

「笑っちゃうよなー・・・あんなゴリラみたいな女が年下好きなん

なぜ？

寧ろ筋肉ムキムキのマツチヨ系だろって感じだよ。
どうしたらそんな相手と釣り合うのか見てみたいね」

それ以上話すと、京、君の命に係わる問題だぞ。

「大体、付き合っつて男に尽くすのか？

それよりも一緒に筋トレやりましたよって言った方がいいんじゃない？」

空気が震えてきた。

いよいよ友人が天に召されるときが来たか。

「それで・・・二人で筋肉自慢でもするのかな？」

「ははははは・・・それ最高だな。そうそう夜景の見える綺麗なホテルで二人見つめ合い

筋肉自慢を・・・って・・・え？」

京の顔が引きつるのが分かった。

京の背後から聞こえる声は聞き覚えのある声なのだから。

「ほーう・・・京。お前は、その若さで三途の川が渡りたいらしいな」

「え？」

気がついたときには京は空中を舞っていた。

入ってあんなに飛ぶんだ・・・

そして後に残ったのは無残な屍だ。女教師冬香はそのまま何事もなかったかのように立ち去った。

「痛たたた・・・」

屍、いや、友人は生きていた。よろよると起き上がると再び席についた。

「海！近くにいるなら教えてよな！」

「どっやって?」

「目で合図するとか、いろいろあるだろ?」

「無理だよ。お前話すのに夢中で気がついてなかったもん」

「あー・・・俺絶対あの人のブラックリストに載ったよ。いや・・・閻魔帳だ」

まだ悪態をつくか友人よ。

「話戻すけど、浅木となんかあったのか?」

そうだ、そのことだ。

「いや・・・俺と勉強会の約束していたらしいんだが、あいつ俺が寝ている間にその話したらしいんだ・・・だから訳が

分からんっていう話だよ！」

「ほー・・・クラス一の優等生、そして容姿端麗、家はお金持ち、
って好条件・・・」

お前まさか断つたの？」

「いや・・・まだ何も・・・」

すると京はちくしょーといった表情で、

「何でお前が誘われるんだよ！成績だって俺と対して変わらない劣
等生たる？」

それが学年十番以内に入っている浅木と勉強して、あいつの何に
なるんだ？」

「俺にも分からないよ・・・それに勝手に約束されたことだからな」

「それでも羨ましい・・・」

俺には何て言っているのか分からなかったので適当に流した。

「そうか？」

俺には実感も湧かず、なんで自分が誘われたのかすら理解してい
なかった。

そして休み時間も終わりを告げ二時限目に突入した。

4話

放課後

夕日が教室に差し込み周りの色を朱色に染めていた。

さて・・・バイトにでも行こうか。

そう思っつて荷物をまとめていると、幼馴染の千草朱里が別のクラスから姿を現した。

「よっ！」

「なんだよ」

ぶっきらぼうに話しかけると、

「あんだ、今日の晩御飯はどうするの？」

いきなり夕飯の話がされた。

「バイト先で食べようかと・・・」

それを聞くとつまらなそうな顔をした。

「なんだ・・・また作つてやるうかと思つたのに」

幼馴染である千草朱里は、保育園からの付き合いだ。

髪は短く、目はきりつとしていた。

俺と対して身長が変わらず、剣道を心から愛する侍のような女で、そんな男勝りな性格が災いしたのか、

何人もの男から告白されるものの付き合った男が今まで存在しなかった。

大人しくしていれば可愛いのに、それも本人にはとってはどうでもいいことのようにだ。

そしてそんな男勝りなあいつにも特技があった。それは家事全般だ。

家が厳しかったらしく、家事、武道の両立をしつかりとさせていた。

だから、勉強は俺より少しいいぐらいで、下から数えた方が早かった。

本人曰く、女は勉強なんて出来なくてもいいのよ、最低限の常識と礼節を重んじることを忘れなければ世の中は渡っていける。

いいのか、それで！

「悪いな・・・お前に頼りっぱなしってのもどうかと思うしな」

「そう？遠慮しないでよー海とは古い付き合いだしさ」

「だからってお前が俺んち入り浸ってたら、お母さんたち心配するだろ」

「ははははっ・・・何言ってるの？お母さんの方があんたの事心配して、行ってやんなさいって話してるぐらいなんだから」

そうなのか？

「そりゃどうも・・・でも今日は無しだ。俺もバイトしないと食っていけないからな」

そこまで話すと納得したのか、朱里は諦めて部活に出かけた。

俺のバイトは肉体系だ。

工事現場の仕事が多く、知り合いの土木作業員に紹介してもらったものだ。

これは父親がいなくなった三年前から続けていた。

少ない時間だがっぱり稼げる好条件はそうない。だから、俺のような学生向きだ。

しかし現場は毎日あるわけではない。依頼が入ると助っ人のような形でそこに参加する。

それでも月に三万は稼げていた。

これで小遣い、プラス光熱費、携帯代、昼食費に回せた。そしてこの中の小遣いは五千円にも満たない。

現場のバイトは週に一日から二日程度だったので、本業にも差し支えなかった。

学校の先生もそこは黙認してくれていた。

今日もいつものように四時間のバイトを終えると、ふらふらしながら帰り道を急いだ。

ただ歩くのは暇だったので、携帯を開いてみた。

すると留守電に一件と書かれていた。

「誰だ？」

そう思いながら聞いてみた。

「私だよ！朱里・・・その・・・バイトがんばれよ、ばーか」

おいおい・・・応援してるのか、怒っているのか分からんぞ。

「はぁ・・・」

ため息をつきながら重い体を引きずって帰宅した。

5話

一日後

今日は日曜日だ。そして約束の日。

浅木真希の家に行くための準備を俺はしていた。

浅木とはそんなに仲良いというわけではなかったのですが、そんなあいつにいきなり家に来いと言われるのは正に予想外だった。

「教科書・・・参考書・・・それから筆記用具と・・・そんなもんか」

財布と携帯をズボンのポケットに突っ込みそのまま家を出た。

浅木宅に着いたのは昼前だった。

大きな門が目の前に聳え立ち、その先に見えたのは普通の家の三倍ほどあるでかい家。

庭には犬とガーデニングスペース、車庫に車三台。

どっからどう見ても金持ちだ。

チャイムを鳴らし浅木真希は迎えに出てくれた。

「さすが時間通りね」

白いワンピースに包まれた可憐な女性は俺を家へと招き入れた。

いい臭いもする……って俺はおやじか！

そしてそのまま真希の部屋まで案内された。

女の部屋に入るのは久しぶりだ。朱里の部屋は男みたいな殺風景な部屋だったからな。

ドアを開けるとそこにはいかにも女の子という部屋が目の前に広がっていた。

ベッドにぬいぐるみ、白いレースのカーテン、シンプルな机にクローゼット、お約束だ。

そしてソファアークに薄型テレビ……パソコン、ん？冷蔵庫に……電子ピアノってここはジャパネット　　なのか？

というか何置あるんだよ！

一気に冷めてしまった。

「落ち着かないかもしれないけど……どうぞ」

そつだよ、一般市民が見たらここはアラブかどっかの大金持ちの家だよ。

「はは……広いね」

乾いた笑いしか出てこない。

「私、もっと狭くてもいいのにお父さんがどんどん物を増やしたいからって……」

これってやっぱり普通じゃないでしょ」

「ふーん」

根はしっかりしていると思った。

とりあえず真ん中のテーブルがあるところに座布団を敷いてもらいそこに座った。

真希は飲み物を持ってくるといってばたばた階段を下りていった。

改めて思った。

何で自分がここにいるのだろうか？と、しばらくすると真希は戻ってきて俺の目の前に座った。

「お待たせ、じゃあ……始めようか。まず数学教えて！」

「え？」

俺がですか？

聞き間違いじゃないのかな？

「俺が教えてもらうんじゃないか？」

「うん、私が教えてもらうの」

「何で？」

そこまで言くと、真希はにやりと笑った。

「私知ってるんだー・・・月夜くんの秘密」

「何だよ、それ・・・」

俺にはさっぱりだったが、真希は小悪魔のよつにじりじりと体を近づいた。

何をするんだ？まさか・・・

どくん・・・どくん・・・

俺は硬直して身構えてしまった。

どくん・・・どくん・・・

そしてじつと俺の顔を見ると、

「月夜くんって本当は勉強できるでしょ」

「えっ？」

一瞬の空白。

「この前やった全国模擬試験覚えてる？」

二言目で現実に戻された。

何を期待していたんだ？俺。そして慌てて後ずさりすると冷静を装った。

「ああ、あれね。でも俺、受けたことになっていないよ」

「そうそう、月夜くんたちさ、お金賭けてたでしょ。自分たちの模擬試験の順位に」

「よく知ってるな」

あまり知られていないことだったので驚いた。

「それである時五人呼び出されて、試験を無効にされたんだよね」

「だってさ・・・金賭けて試験やるなんて言語道断だって怒られて、カンニング疑惑まででちゃったからさ・・・軽い気持ちだったんだけどね」

「それは月夜くんが悪いでしょ」

「それで、俺の成績と何の関係が？」

「あの時の試験用紙がゴミに捨ててあるのをたまたま掃除当番の私が見つけたの・・・それで・・・」

「勝手に採点したの？」

こくと頷いた。

「何でまた・・・」

「だって綺麗な字で書かれていたから、つい誰のдарうって思ったの。そしたら月夜くんのだったって訳・・・」

「ふーん。また物好きなことしたもんだ」

「でもね・・・月夜くん、全教科はそこになかったけど、数学は満点だったのよ」

思わず固まってしまった。

「はは・・・凄いな。偶然だよ」

真希は急に態度の変わった俺を怪しく思ったのか、さらに追求した。

「それだけじゃないよ。毎回のテスト・・・月夜くん、なんで少しずつ点数を刻むように上げてるの？」

一年の頃からずっとだよ、そんな自在に点数を操れるのはおかしいんじゃない？」

まずい・・・このままでは俺の周りの人間までもが見る目が変わってしまう。

6話

確かにやりすぎた。

俺は昔から一つだけ特技があった。

それは鋭い洞察力だった。

それは勉強にしろスポーツにしろ何でも自在だった。

一度見たものは頭の中に残り、そこから分析、応用を瞬時で行えた。

しかも常人の数倍という速さでだ。

勉強なんかも授業を一度聞いて、教科書を見てしまえば勉強する必要もなかった。

スポーツもそうだ。ルールさえ覚えれば、あらゆるものにすぐ対応できた。

例えば野球なら投手の投げるフォームから全てを分析してどこに投げるのかは予測できた。

そしてどのように打てばどう飛ぶのかも見えるように分かった。

ただ、唯一の弱点がある。それはいくら鋭い洞察力があっても体がそれについていけないのだ。

だからメジャー級の玉を打てる筋力もないし、一流選手のような持久力も俊敏性もまるで欠けていた。

あるのは分かるという事実だけ。分かるだけでは意味が無いそれに伴う体が無くては。

だから俺は極力目立たなく生活してきた。

けどこの女、浅木真希に悟られているようでは目立たないようにもへったくりもない。

ほんの軽い気持ちで行った行為が仇となった。

普通の人ならこんな便利な能力があつたらそのまま使うだろう。

そして良い大学、良い会社に勤めて人生ばら色だ。しかし俺にはそれはできない。

なぜなら、父親との固い約束があるからだ。

父親は言った。

『お前のその能力は人の目に触れるようなものではない。いいか・
・決して目立つんじゃない。
そうすればお前の身に大きな災いが降りかかることも無いのだから
ら……』

災いのことを詳しくは話さなかった。だが、俺は父親の言葉には嘘がないことだけは理解できた。

そして俺は、自我が目覚めてきた小学生高学年の頃から、目立たないようにすることを決めた。

俺は勝手に推測していた。

きっとこの能力を利用したがる人間がたくさんいるのではないかと、だから目立たないように生活しろということなのだ。

中学生の生活では何も無かった。そして周りに悟られること無く、俺は馬鹿な部類の人間だと思われていた。

しかしそれで良かった。

付き合う人間は裏も表もなくて付き合い易かったからだ。

周りは馬鹿な奴らと冷めた眼で見ているかもしれないが俺はそれで満足だった。

そして高校生活、近所だと言う理由で勝手に決めたものだが俺に良く合っている高校だった。校風が自由で、バイトも大丈夫。

そこが大事だった。

生活するには金が必要だったからだ。

バイトしなくては貯金をかなり切り崩さなくてはならない。だが、それだけではできなかった。

学費、アパート代だけでいっぱいだからだ。

そして友人たちとの賭け事も何度か行っていた。俺からすれば良い小遣い稼ぎだった。

カードだろうが麻雀だろうが学生程度には負けない自身があった。

だって全員の癖と持ち札は全て記憶できるのだから。

だから今回の模擬試験の誘いにも何となく乗った。

しかし賭け額が大きいのと一人秀才の奴がその賭けに入りたかったのがそもそも間違っていた。

そこで俺は本気を出す羽目になってしまったからだ。

秀才くんはいつも総合得点四百と少し・・・なら俺は四百二十点を狙えば確実だった。

それに模試はマークシート方式だったので誰でも答えは埋められる。

たまたま今回だけ成績が良かったという嘘もつくことができる
と甘く考えていた。

「それで・・・俺はどんな奴だと？」

真希に聞いた。

「そうねー・・・影の天才くん？まるで目立たないように振舞ってるけどね、女の子そういう所に魅かれるもんなのよ」

「へー……」

まるで他人事だ。

「でもどうして？こんなに頭良いなら隠す必要ないじゃない」

確かに普通ならそうだ。しかし俺にはそれができない理由がある。

本来なら父親との約束など無視して良いが、あのやさしい父親が必死に俺に守らせようとした、たった一つの約束だ。

生きていないかもしれないが、これを守ることで唯一の繋がりを
持てる気がするので裏切るわけにはいかない。

「俺は……その……」

返答に困っていると、真希は俺の言葉を遮った。

「分かった……じゃあ、月夜くん取引！」

何を急に言い出すんだ。

「何だ、急に？」

「だって隠したがっているんだもん。なら、それを利用しちゃおう
かなーって」

「こいつ……悪魔か？しかし俺の能力がここで公になるのもまず
い。」

「何をすればいいの？」

何を言われるのか分からず、内心びくびくしていたが意外な答えが。

「週に一度私に勉強教えること」

「は？」

「期限は……そうだねーうん、卒業までかな？」

何だと！長い、長すぎる……卒業までといったらあと一年十ヶ月近くあるじゃないか。

どうすればいいんだ。

しかし父親が話していた自分の身に降りかかる災い、というのだけは避けたい。

だとしたら答えは一つしかないよな。

「分かったよ。でも俺の都合に合わせてくれよ、バイトとかあるからな……」

渋々その契約を承諾した。

「やったー」

満面の笑みを浮かべる真希、純心無垢なその表情は可愛い。

「じゃあさ……ここから教えて」

早速とばかりに数学の超難問を俺の目の前に差し出す。

どうみても高校の問題ではない。

「私もね……いろいろ考えて先を見てるんだ」

おいおい……俺はまだ先なんて見てない。

それでもすらすらと解ける数学の問題。俺って……何なんだ？

再び自分の能力を思い知らされた。

7話

夕方になり、一通り勉強会を終えることが出来た。

しかしその大半は雑談だ。

好きな歌手やら学校の話、休みの過ごし方などどうでもいい話ばかりだった。

真希は頭が良い。だから俺が教えなくても自主勉強で足りるはずだ。

何で俺なんかを選んだろう？

こうして真希の家を後にすることになった。

「浅木・・・あの・・・さっきのことなんだけど周りには話さないでくれる？」

「分かってるって。これは取引って言ったでしょ？」

いきなり月夜くんがこんなに勉強できるって言ったら周りの見る目が変わっちゃうもんね。

でも、どうして隠したがるの？」

二度目の質問だ。しかし隠す必要もないと思いき直に話した。

「・・・まあ、親父との約束みたいなものかな？」

満足に一緒にいられなかった親父が唯一俺に約束を求めたものなんだ」

「どんな？」

「決して目立ってはならないっていうこと。」

俺にも何のことだか分からないけど、こつという力は人に利用されやすいってことじゃないのかな？」

「ふーん」

「だからみんなには内緒な」

「わかってるわよ。じゃあ、また明日学校でね」

「おう」

そして俺は家へと帰った。

三日後

俺はいつものように登校した。あの日以来遅刻はしていない。

あの時俺が見たものは勘違いだったのだと思うようになってきた。

昼食の時間になり、購買にパンを買いに行こうとした。

「おい、海！」

朱里が不意に後ろから声を掛けてきた。

「何？」

振り向いて朱里の方を見た。

するとあいつは何やらもじもじしていた。

そして少し間を置くと話を切り出した。

「あのさ・・・今日、暇？」

何だそんなことか。今日はバイトもなければ、真希との勉強の約束もなかった。

「暇と言えば、暇だけど・・・」

それを聞くと朱里は素直に喜んだ。

「じゃあさ、あんたの家に行っていいい？」

大胆発言だ。しかし朱里はちよくちよく俺の家に来ていたから特に驚かなかった。

「何だよ急に？」

「いやー・・・試したい料理があつてさ、とりあえず海に食べてもらえばその味も分かると思つてね・・・」

「なんだよ・・・俺は試しかよ！」

「まーまー・・・硬いこと言わないでさ。あんたと私の仲だ」

全く、こんなときだけ幼馴染を強調するなんて都合のいい。

しかし朱里が料理が上手いのは知っている、なら、一食分のお金が浮くと思えば良いだけの話だ。

「分かったよ。勝手にしろよ」

俺の承諾が得られると朱里は妙に張り切った。

「よし、なら帰り一緒に帰ろう」

「お前、部活はいいの？」

「今日は休み。あ・・・あとさ近くのスーパー寄って行くから自転車の運転よろしくー」

「はいはい・・・」

そこまで言うと朱里は走って自分のクラスに戻っていった。

「いつつもあいつのペースに乗せられっぱなしだな」

そして頭をかきながら購買へと急いだ。

午後もあつという間に過ぎ、いや、大半は寝ていたのだが放課後になった。

「おい、海。今日どっか寄ってかない？」

京が誘ってきた。京も俺も部活というものをしていなかったの
放課後は基本的にフリーだ。

いつもなら京とぶらぶら寄り道して帰るのだが、先約があったの
で断った。

「今日は・・・いいや」

「なんだ、バイトか？」

「まあ、そんなとこだな」

それだけ言うと京はそのまま去っていった。

8話

その後すぐにすれ違いで女教師冬香がやってきた。

「月夜まだいたのか？」

「いちや悪いんですか？」

「そう言うな。この前のテストの結果だが相変わらず進歩しないね・・・」

「生徒から自信奪うような発言ですね」

「しょうがないだろ・・・そもそもお前この先どうなりたいとかやりたいこととか、何かある訳？」

そう言われると何も無い。

「いえ・・・特に・・・」

「ただ漠然と生きているだけだと、この先つらいぞ。勉強も一緒だ。やりたいことをするための一つの手段なんだから目標を持たなくちゃな」

珍しくまともなことを言っている。

「先生でも、意外とまともなこと言うんですね」

「意外は余計だ。私だってお前らより年上だからその経験を生かし

てだなー……」

「先生俺たちと七つしか変わらないでしょ。その中での経験ってそんなに関係あるんですかね？」

「お前は本当に嫌な奴だな」

そう言っつてこめかみをぐりぐりとげんこつでいじられた。

「ともかくだ……生きていくつてことは、そう簡単じゃないんだ。お前の人生、いろいろ悩んで考えな」

そして冬香は教室から出て行つた。

生きていくのがつらいのは俺だつて分かっているつもりだ。

何を今更……それが今の俺の考えだつた。

それから間もなくして朱里が顔を見せた。「悪い悪い……待たせた？」

「いや……別に」

「じゃあ、行こう！」

俺たちは商店街を歩いた。

朱里が作りたいたいという料理は分からないが材料が次々と買われて

いく。

「後・・・酒屋ね」

酒屋？料理酒でも買うのかな？

そう思って付いていった。するとビールを数本買っていた。

まあ、深くは聞かない・・・

「さて、全部揃ったから行こう！」

朱里は嬉しそうだった。

俺は数週間振りに朱里を部屋に入れることになる。

以前もご飯を作りに来てくれた。それも押しかけでだ。

こういつ風に材料を一緒に買ってから作るというのは初めてだった。

何だかどきどきしてきた。

「まあ・・・上がれよ」

声が少し上ずっていた。

「何言ってるの？いつも勝手に上がってるじゃない」

朱里はずかずかと俺のアパートに入ると、台所に向かった。

武道家ならもつと作法を大事にしる！

「飯にはまだ早くないか？」

現在時刻は五時半。いつも夕飯を食べるのは七時過ぎだった。

「下ごしらえに時間が掛かるの・・・あなたは黙ってテレビでも見てたら」

俺はぐつたら亭主か？そんな客人にやらせっぱなしって訳にもいかない。

「俺だつて手伝うよ、何をすればいい？」

朱里は手を洗って引き出しから包丁を取り出した。

俺の家のどこに何かがあるかは熟知していたので、朝飯前の行為だった。

「じゃあ、海老の殻剥きお願い。それとねぎ切つといて・・・」

「はいはい・・・」

「はい、は一回！」

俺は子どもかよ！

そして二人の料理が始まった。

見た感じ中華だな。そういえば今まで朱里はあまり作らなかったな。

和食中心の家だと言うこともあるんだろう。

俺に食べさせるのはいつも和食だった。

そうこうしているうちに次々と料理が出来上がっていった。

「はい、次これね・・・」

一体何品作る気なんだ。少なくとも五品は出来上がっている。

「おい、後何を作る気だ？」

「えっと・・・杏仁豆腐かな？」

「作りすぎだ！それに食べる前に日が変わっちゃまうぞ」

時刻はもう八時になろうとしている。二時間もぶっ通しでお料理教室開催、そりゃ飽きてもくる。

「いいから食おう・・・これで十分だ」

朱里は満漢全席でもやるうっていう魂胆だったのか？今はとりあえず腹が減って死にそうだった。

そしてさっさといただきますをすると、二人で夕飯を食べ始めた。

俺の食事用テーブルは小さかった。流石に全品は乗らなかったの

で、台所に何品かは待機していた。

9話

「どれ・・・」

エビチリを一口食べてみる。

うん、辛さと味の濃さが丁度いい。かかっているソースのとりみはまさに絶妙だ。

から揚げは脂っこくなくて、鳥の臭みも無い・・・下味からつけないでこうはいかない。

回鍋肉も野菜の炒め方が抜群だ。野菜と肉の調和が・・・って俺は美食倶楽部の主かよ！

「ねえ、どっつ？」

朱里は俺の感想を聞いたかった。

「おいしいよ」

「本当？本当？」

「ああ・・・」

「やったー・・・初めて作るものばかりだから自信なかったんだけどね」

初めてにしては上出来すぎる。

「朱里は料理に関しては応用力がきくからな。初めてのようない感じがしないな」

「そんなに褒められると照れるだろ・・・はい、ビール！」

自然に渡されるビール。あの時買ったやつか。

「っておい！何で俺に酒を？」

「え？あんた飲まなかったっけ？」

「日常的に飲むかよ！たまにだ」

「そう・・・」

朱里、俺はまだ晩酌するほど酒に頼った人生を送ってはいないぞ。

「あのさ・・・聞いたかったんだけど、海は進路どうするの？進路相談したでしょ？」

嫌なことを思い出させる。俺はさっきそのことで説教されたばかりだ。

「いや・・・その・・・俺はまだ決めてないんだ」

「そうなの？」

「ああ・・・そういつお前はどっにするの？」

素朴な疑問だった。朱里は将来をどう見ているのだろう。

すると朱里は躊躇うことなく答えた。

「私は・・・私なりの使命を果たすってことかな？」

その目は真つ直ぐと前を見ていた。

「それってどういう意味？」

「まあ・・・素直に言つと精一杯生きるってこと。」

進学は特に考えていないけど剣の道で進める方法を考えてるわ」

朱里の実家のことを考えれば納得だ。

そこでまともな答えに何も考えていない自分が一人だけぽつんとしている。

「へー・・・お前もいろいろ考えてるんだな。」

俺も先生に言われたように何か見つけなくては駄目かな・・・」

「海・・・」

「まあ、俺にだっていろんな可能性があるだろうさ」

沈んだ空気を変えたかったので、再び料理をがつついて食べた。

「じゃあ・・・これで帰るね」

朱里が後始末をして帰ろうとしたが、一人では危ないと思いつてやった。

「悪いね・・・」

「食事の用意までしてもらって、ただで帰せるかよ」

二人で並んで夜道を歩いた。

月明かりが照らしている今夜は、いつもの暗い道のりも足早に走らなくて済んだ。

「海のそういう優しいところ・・・私、好きだよ」

どくん・・・

一瞬心臓が聞こえるぐらい激しく脈打った。

「ん・・・そっつ」

平然を装ってはいるものの朱里のその言葉は俺の心に響いていた。

「まあ・・・お前とも付き合い長いからな」

「あの子、言いにくいことだけどお父さんって・・・その・・・」

「気にするな、まだ連絡はない。でも俺は信じたいんだ・・・
思い出の少ない父親だけど暖かさは伝わっているんだ・・・それを忘れるのは無理だからな。
きつとどこかで生きています」

「海がそう思っているならいいんだ。私もあなたのお父さんのこと信じているから」

「そういや、朱里は親父と会ったのは数回だけだもんな。印象に残っているか？」

「ええ、とてもね。あなたのお父さんは独特の雰囲気を持っていたから今でもよく覚えているよ」

そうか・・・でも確かに親父は人とは違う何かを感じさせた。

そして俺がこんな馬鹿げた能力を持ったのはきつと親父の遺伝だ。

親父も何かの能力者なんだろう、そう思うのが自然だ。

「ここがいいよ・・・」

明るい大通りに出て、すぐ目の前にバス停があった。

朱里の家まではここからバスで二つの停留所を越えればすぐだった。

「今日はありがとな・・・じゃあ」

「いつでも私のご飯食べたいときは言えよな。すぐに飛んで行って

やるから」

朱里は素直な気持ちを表したかのように満面の笑みで俺に話した。

「ああ・・・」

俺も正直嬉しかった。

両親がいなくても卑屈に生きなかったのは、周りの人間のおかげだと感じていたから。

少しだけ高鳴る気持ちを抑えつつ、そのまま自分の家へと引き返した。

10話

七月上旬

夏休みも目の前に迫り、俺はどのように休みを過ごすのか考えていた。

バイトははずせない・・・それと後は京たちとの付き合いだな。

京とは中学からの数少ない友人だから、誘いには乗りたかった。

奴の性格なら海に行こうと言い出すだろうと予想はしていた。

「おーい。海！夏休みどこ行く？」

ほら来た。

「俺さあ、やっぱり夏は海だと思っただよね。」

風物詩っていつか、無くてはならない存在のようじゃない？」

「そうか？」

「お前の名前も海じゃん、だから海つながりってことで・・・行くよな？」

分かりやすい性格だ。

だからこそ憎めない奴でもある。

「行くのは行くが・・・他には誰が？」

毎年のことながら野郎ばかりで海に行くのだと思っていたが今年
は違った。

「そこは任せとけ！浅木真希と千草朱里が来るぞ！」

何だと？

俺は自分の耳を疑った。

「おい！どういうことだよ！」

「今、言つたる？あの二人誘つたんだよ」

「え・・・だって朱里は合宿とかあるし、浅木は夏期講習があるだ
ろ」

「甘いな！海くん！彼女らも丁度一日空いている日があつたのだよ」

か・・・よりによってあの二人が来るのかよ。

別に付き合つてもいないからどうつて言つことも無いが、心の中
が一人で空回りしていた。

「まあ・・・あいつらが良いつて言つなら考えても・・・」

俺は半分諦めていた。そしてもう半分はこの話が流れないかを期
待してもいた。

「そつだ、この前の試験どうだった？」

「話題を変えてきた。」

「あれかぁ……相変わらず赤点ストレスだ」

今回の試験は、今までのように一点ずつ上げるなどという馬鹿な真似を止めた。

「何だ、お前いいなー……俺二つ赤点。だからこれから追試だ」

友人、もっと勉強しろ。

そんな他愛も無い話をしていると、突然クラスを揺るがすような話題が飛び込んだ。

「おい！屋上で喧嘩が始まったらしいぞ」

「え？誰が？」

「三年の蓮先輩だよ！」

「それってやばくない？あの人の相手は？」

「空手部の猛者、工藤！」

「すっげー好カードじゃん、見に行こう」

クラスはいきなり盛り上がった。

話を聞くだけで三年の蓮先輩が喧嘩を始めたことだけは理解できた。

「蓮先輩か・・・」

俺は彼とは何度か顔を合わせたことがあった。彼に付きまとう噂は良くないものばかりだった。

恐喝、喧嘩、飲酒、喫煙、青春時代の悪行の代名詞がずらりと並んでいる存在だった。

そんな彼が俺と目を合わせたのは夕方の屋上だった。

彼はあそこを自分の居場所に使っていた。

町が見渡せる景色の良い特等席、そして風は海の臭いを運んでくれた。

俺もたまたま屋上に出た時に彼がそこにいた。

立木蓮、十八歳、身長百八十センチの長身に引き締まった細身の体。

目は鋭く威圧的で、髪は茶色に染まった短髪、教師に見つかるのも覚悟で煙草を常に吸っていた。

「あ・・・」

目が合う俺は一瞬だけ硬直した。この学校の噂の的の彼がそこにいたから。

「・・・」

彼は無言だった。

俺もそこで帰るわけにもいかない、そのまま進むしかなかった。

景色が見えるところまで移動し、蓮と隣り合わせになった。

うー・・・気まずい。

お互いに沈黙が続く。

立木蓮はもくもくと煙を立てながら煙草をくわえていた。

「お前さ・・・二年の・・・月夜・・・海だっけ？」

意表をつくかのように蓮が話しかけた。

俺はそれだけで少しパニックだ。

「ええ・・・何で知ってるんですか？」

蓮は煙草を大きく吸い込むと、ふうつと煙を吐き出した。

「たまたま見かけたんだ・・・お前が体育の授業やってるのをな・・・」

「え？」

「バスケの試合・・・金賭けてやってたやつだよ。その時にお前勝ったチームの司令塔やってただろ？」

「そうだ俺たちは授業中のバスケの試合で賭けをしていた。」

「一人五百円のお金を集めて、四チーム作り勝ったチームが総取りという単純なものを。」

「金が掛かると俺も本気を出さざるを得ない。」

「一人ひとりの癖を見抜き、パスコース、玉の軌道を全て読みきった。」

「結果はもちろん俺のチームの優勝だった。」

「しかしそれを見抜かれたなんて浅木以上の観察力だ。」

「お前が全ての指示を出していた・・・しかも完璧に相手の手を読みきってた・・・」

「そして蓮は、夕日に顔を赤く染めながら俺の指示の出し方を的確に淡々と語った。」

「何で分かったんです？」

「人のオーラさ・・・お前は独特なんだよ。隠そうと思っていても知れないが目立つんだ。まあ・・・人の事言えないが・・・」

「それって・・・蓮先輩は普通じゃないってことですか？」

「くくく・・・お前何が基準で普通って考えてるんだ？
常識をはずさない人間が普通なのか？俺のようないかにも不良っ
てのはやはり普通じゃないか？」

蓮が何を言いたいのか分からなかった。

「俺は自分に素直に生きている奴のほうがよく普通だと思うが
な・・・」

本能で生きろということなのだろう。しかしそんなことしたら社
会の秩序は崩れる。

人間が他の獣と違うのは理性があるからだ。それを破ってしまっ
たら獣と変わりはない。

「ま・・・今のことは忘れてくれ。お前が面白そうな奴だからから
かってみただけだ」

蓮は咄嗟にそう話したが俺はそうは思わなかった。

さっきの話は本音で語っている。

彼は掴みどころの無い雲のような存在だった。だから俺もどこと
無く魅かれていた。

そつだ人間は自分に無いものを求めるんだ。

11話

そして今は屋上で揉め事だ。

俺も知らない仲ではあったので京と駆けつけた。

そこには俺の予想通りの光景が広がっていた。

「はぁ・・・はぁ・・・」

空手部期待のエース工藤は鼻血を流していた。

ギャラリーは数十人、幸いまだ先生は駆けつけていない。

「お前・・・まだやるのか？」

蓮は人形みたいな冷たい目で相手を睨む。

工藤はまだ心が折れてはいなかった。

自分には幼い頃から続けてきた武道がある、相手は素人だ、そういう考えが強く残っていた。

しかし現状は違う、武道とかそういう問題ではない。蓮は人の身体能力そのものを凌駕していた。

例えば、相手が鋭く刺すように放った突きを皮膚をかすらせてかわらしていた。

蓮の動きを見るだけでも相手の一回の攻撃に対して反撃が軽く三回はできる計算だった。

「くそっ！」

休むことの無い連続攻撃を繰り返してみるものの、どれ一つとして蓮の体には触れることはできなかった。

そして蓮は屈しない相手にイラついたのか、自ら向かっていった。

工藤の放った大振りの回し蹴りを流れる水の如くしなやかにかわすと、懐に潜り込んだ。

まずいと肌で感じた工藤は、咄嗟に両腕で体の前を覆い急所だけは避けようと身構えた。

しかしそんなもの何の役にも立たなかった。

防御ごと吹き飛ばされたからだ。

蓮の放った蹴りはしなる鞭のように鋭く速かった。

軌道が全く読めず工藤は何をされたか分からない状態で遙か数メートル先に飛ばされ

後頭部をコンクリートに強く打ち付け転がった。

そして脳内を激しく揺さぶられ、気を失いかけていた。

あんな攻撃をまともに受けた両腕は良くてひびが入ったか、恐ら

く骨折だろっ。

「あ……う……」

工藤の頭の中は朦朧として揺れる空を眺めていた。そこへゆっくりと蓮が近づいてきた。

「どこの馬鹿がお前を俺の下によこしたか知らんがな……」

眺めていた蓮は右足をゆっくりと上げた。

工藤は何をされるか理解できず迫る恐怖に耐えるしかなかった。

そして蓮の右足は工藤に向かって躊躇無く落とされた。

ゴギン……

「ぐあああああああ」

屋上に広がる工藤の叫び声。

試合中にもこんな叫び声を上げたことのない男が、今は子どものように右足首を押さえてもだえ苦しんでいた。

蓮はうつすらと笑みを浮かべながら工藤の右足首を完全に粉碎していた。

「俺に係わるな！」

蓮はそのまま静かになった観客たちを押しつけて教室へと戻っていった。

「おい・・・何があつたんだ？」

京が周りの人間に聞いていた。

「三年の木崎さんが蓮さんの行動が目に残るってことでな・・・」

「つまり用心棒を雇ったのか？」

「そうらしい、しかし工藤も悲惨だね。全国大会期待の星がこうもあつさりと壊されてしまったからな。」

あれじゃ、今度の大会出場も無理だな・・・」

「つーか、あの蓮って男は何者なんだ？」

京は蓮のことをまるで知らなかった。それは俺も同じだった。あの時顔を合わせたただだから。

「あの人にはいつもやばい噂が付き纏っている。」

学校が終わればやばいバイトしてるって言うし、いざこざで再起不能のされた人間も何人かいるらしい。

だから冬香も目を光らせているらしいぞ」

「そりゃそうだな・・・あんな人に暴れられたら、教師で止められるのはあの人しかない」

京は笑っていた。

「まあ・・・あの人に憧れる人間はたくさんいるけど、あの人には近づかないのが身のためだと思うわ」

その人の言うことはその通りだと思った。

あの人はやばい空気を振りまきすぎている、並みの人間がその中に係わったら、それこそ死すら覚悟しなくてはならない。

「まあ、俺たちとは無縁の世界だな、海」

「そうかもな・・・」

言い切る自信は無かった。

この立木蓮という男が俺に近い存在ならきつとこの先も係わることがあるのだから。

12話

夏休みは明日から始まる。

今日は終業式で今はクラスでホームルームが行われていた。

女教師冬香は熱弁していた。

「いいか！休みだからって浮かれるんじゃないよ！

大体、若い奴らは夏だという理由をつけてはしゃいでいちゃついで・・・だったら冬もはしゃげよ！

夏だからって勝手に決めるな！」

相変わらず熱いお言葉だ。

「それから勉強も忘れるんじゃないよ。

青春時代は大いに遊んで結構、でもやるべきこともやっておけよ。そして女子！この夏休みでもしもこの学校の男子に泣かされるようなことがあったら私のところに来なさい。

そいつらはまとめて・・・あたしがぶっ殺してあげるから」

おいおい・・・男子の背筋が一気に凍りついたぞ。

「先生・・・先生の夏休みは何か予定無いんですか？」

勇気あるクラスメイトが質問、いいぞ、面白い。

「あ？なんでお前らに答える必要があるんだよ！」

冬香は俺たちを鋭い目で睨んだ。なるほどこれは何も無いな。

しかし予想外の言葉が飛び込んだ。

「ちつつち・・・甘いねー君たち。私何も無いとも思っ
たのかい?」

今までのことを考えれば当然だ。

「私には夏を共に過ごそうと約束した仲の人がいるのさ!」

「それってどこの物好きだ?」

ひそひそと俺は隣の真希に話しかけた。

「何でも・・・新しい男の人が見つかったんだって。年は二十歳位
でイケメンらしいよ」

この年下好きが。

「じゃあ先生もいよいよ結婚ですか?」

「嘘・・・生涯独身だと思っていたのに」

「先生に憧れていたのに」

「いいぞー!」

「よっ、この男殺し!」

それはいろんな意味で間違いでない。

なぜかクラスは冬香を盛り上げるように様々な声援が飛び交った。

「お前らー・・・止めるよ。照れるだろ。まだ別に付き合っつて訳じゃないんだ。」

一緒に過ごそうつて言われただけだから・・・」

急に女の顔になった。気味が悪い。

「それでーどんな人なんですか？」

「かつこいいの？」

「ねえ、ねえ、先生教えてよ」

「お前らなー・・・」

冬香は照れくさくなっていた。そんな幸せの絶頂の時、恐れを知らない悪魔の一言が炸裂した。

「先生、その人って俺の友達の従兄弟ですよ！」

「え？」

「ちなみに・・・婚約者います」

しーーーーーん

固まった。あの最強の戦士冬香がたった一言のヒヤダルコ並みの呪文で瞬間冷凍されてしまった。

周囲は一気に盛り下がりにみんなの引く音が聞こえてきそうだった。

「あ……あ……あ……」

冬香は酸素を失った金魚のように口をぱくぱくさせていた。

せつかくの夏休み素敵な男といろんなことをしたかったのだろう。

誇大妄想も激しく膨らみ絶頂の時を迎えようとしていたのにそんな夢がもろくも崩れ落ちた。

目の前は真つ暗だ。

「センセ……」

闇に包まれた教室の中で生きる屍に恐る恐る話しかける生徒。

冬香は完全に止まった脳をフル回転させた。

そして気が付く、いや、火が付いた。

「あの野郎おおおおおおおお」

火山大爆発、正に龍の逆鱗に触れた感じだ。

冬香は勢いで教壇を拳で真つ二つにした。

13話

「全く・・・最後まで騒がしかったな」

「ああ・・・言えてる」

終業式が終わり、京と昼ご飯を近くのラーメン屋で済ませて歩いていた。

「お前・・・三日後の約束覚えてるよな？」

あのことが。

「ああ・・・知ってるよ。しかしお前も物好きだな、あの二人誘うなんてさ」

「何言ってるんだ？お前はどうか知らんがな、あの二人は学年のミスコンで常に上位なんだぞ？」

そんな二人を独占できるなんて知ったらクラスの男子・・・いや学年の男子が黙っちゃいない」

そんなものなのか。俺はあまりにも身近にい過ぎてそんなの分かっていなかった。

「こんな機会は俺にはもう無いかも知れないから・・・」

京は黙っていれば見た目もいい男なのに、何故か異性に好かれな

きつとよくしゃべる性格が災いしたのだろう。

二人でしばらく話しながら歩いていると、会いたくない男に出会った。

「よう・・・海、それに京だっけか？」

話しかけてきたのは間切悠斗、俺らの同級生だった。

こいつとは腐れ縁で小さい頃の付き合いだったが、家が金持ちだったので何かと鼻につく行動をする奴だった。

見た目は美少年を絵に描いたような感じだが、中身は欲でまみれていて友達を無くすタイプだった。

昔はそんなことは無かった。しかし金というものの力が分かった頃から人が変わった。

「相変わらず貧しい外食だ。そこの学生専門の安値のラーメン屋で食事とはねえ・・・」

のっけからこの嫌味だ。

「うるせーな。あそこのラーメンはスープが絶品なんだよ！」

「そっだ、このさらさらヘアー」

京、それは悪口になっていない。

「それで、何なんだよ、悠斗」

「そうそう・・・お前らさ、三日後に海に行くんだろ？俺も行くかどうか思ってたさ」

いきなり会ってその話か。

「誰もお前誘ってないぞ？」

「さあどうかな？浅木真希が良いって言ってくれたけど？」

何だと、あいつ・・・余計なことを。

「ま・・・俺は俺で現地に向かうから、お前らは仲良く電車で来るがいいさ・・・それじゃあな」

それだけ言うと悠斗は去って行った。

「何なんだあいつ？」

「あいつか・・・小さい頃からの腐れ縁ではあるが直で言うと嫌な奴だよ」

「それは見るからに分かるが、お前何かあったのか？普段温厚なお前がそこまで言うなんてな・・・」

そうだ、あいつとは何かがあった。思い出したくも無い出来事が。

「俺が中学の頃・・・クラスの女子の財布が無くなったんだ。

ごく丁寧なことに使用済みの体操着と一緒に・・・そして、その時に俺が盗んだことになった」

「それって……」

「俺はやっていなかったが、知らない間に鞆にその財布と体操着が入れられていたんだ」

「まさか……あいつがやったのか？」

「恐らくな。全ての状況を考えた上で奴しか俺の鞆に入れられる奴は存在しなかったんだ。」

「それで……俺は……」

「激情して殴りにでも行つたか？」

「ああ、だが奴の周りには常に取り巻きがたくさんいた……なす術も無くあつけなく返り討ちだよ。」

「俺はクラスの奴らからも先生からも変態の泥棒扱いだ……」

「女子は当然しかとするし、男子も俺をあからさまに避けたよ」

「まじかよ！きついなー」

「だからさ、俺の中学時代はあいつのせいで最悪なんだよ。それ以来は顔を合わすこともなかったんだが……」

「まさか高校まで同じとはな。それにあいつの女癖の悪さも定評だな。」

「自分の欲しいと思った奴は金や力どんな手でも使って手に入れるって言うんだ……」

「京はそれを聞くなりげんなりした。」

「今度も何かのトラブルにならなきゃいいがな」

「全くだ・・・浅木の奴も何であいつを誘ったんだよ」

俺まで気持ちが悪くなり込んで仕方なかった。

しかしそれでも時間は過ぎていく、すぐに三日後になっていった。

14話

俺ら四人は駅で待ち合わせていた。

一番乗りはわかりやすく浅木真希だ。二番目は朱里、三番目は俺・
・そして一人来ない。

「京の野郎・・・」

誘った張本人が姿を現さない。

大方寝ているのだろうと思って電話をかけてみた。すると、向こうから走ってくる人が見えた。

「あれ、柏葉くんじゃない？」

「そう・・・だな」

携帯を閉じながら眺めると、異様な光景に気が付く。

京はものすごい荷物を背負ってやってきた。

「なんだ・・・あれ」

荷物が歩いていると言っても過言ではなかった。

「いやー悪い悪い・・・つい気合入ってさ、荷物詰めるのに時間掛かったよ」

「お前・・・それ、気合入りすぎにもほどがあるだろう」

この荷物お化けは果たして電車に乗ることが出来るのだろうか？

とりあえず四人集まったことなので、切符を買いホームまで歩いた。

「なあ・・・浅木。お前悠斗誘ったのか？」

俺はそのことが気になっていた。

それに対して真希は答えに困っていた。

「その・・・私から誘ったわけじゃないんだけど、彼が私たちが海に行くって話をどこから聞いてて、強引にね・・・」

もじもじしながら話していた。

「やっぱりか・・・」

浅木の性格上、悠斗を誘ったりはしないはずだ。そこで理解した。

あいつは今回のこの話をどこからか仕入れて強引に二人を狙っているのだと。

「あいつがいても大丈夫か？」

京は心配してひそひそ話して聞いてきた。

「まあ・・・ほっとけばいいだろ。行き過ぎるようなら・・・」

ちらつと朱里を見た。

「最強の守護神がいるから、大丈夫」

「お前がそう言うならいいけどな・・・」

そして電車に乗り込んだ。

電車で二駅、およそ十分、そんなもので海に着いてしまう。

この八坂市は海と山に囲まれている自然豊かな場所だった。

幼い頃はよく海と山に連れて行ってもらった。それも小学校低学年までだが・・・

「さあさあ・・・いろいろ持ってきたから食べてー!」

京はあのばかでかい荷物の中からいろいろ取り出すと、女性陣にお菓子を進めた。

さすが、こついうところは気が利く。

それから俺たちはお菓子を食べながら、三十分の旅を楽しんだ。

「おい・・・見えてきたぞ」

電車の窓には一面に青い景色が広がった。

空も、海も全て青かった。

潮の臭いのする風が俺たちの体に心地よく吹き抜けた。

「楽しみだな」

「そうね」

女性陣も盛り上がってきた。

俺も久しぶりの海だ、ここは楽しんだほうが良さそうだ。

そして海辺へと足を運んだ。

「あつっー……」

砂は焼けるような暑さだった。

今日の気温は三十度を越え、湿度も高かった。絶好の遊泳日だ。

「さて……着替えは……」

とりあえず更衣室らしきものを探し、京と二人で入った。

朱里たちも女子の更衣室に入っけいき、俺たちが準備できてから十分後に出てきた。

やっぱり女は時間が掛かるんだな。

そう思いながら何の気なしに二人を見たが、心臓が一気に高鳴った。

どくん・・・

「え？」

そこはまるでリアルなグラビアの世界だ。自分たちが現実には見
ていない世界が広がっていた。

こんなことって・・・

朱里はビキニの水着を完璧に着こなしていた。

スタイルがいいのもそうだが、剣道をやっているだけあって全体
が引き締まっていた。

足もこんなに細くて長いんだこいつ・・・

真希はワンピースの水着を着ていたが、その体は細く、白く、し
なやかな感じだった。

そしてなによりも胸が・・・胸がこんなにでかいのか！

文科系と体育会系、体は関係ないな。

俺は京の方をちらっと見た。すると予想通りに放心状態だった。

俺ら・・・本当に女に免疫がないな。

半分意識が飛びそうになった。そして、俺の感想を聞くと朱里は手を離して

「分かればよろしい！」

ふんぞり返って威張った。こいつ・・・偉そうに。

「相変わらず悲惨だな、お前・・・」

京も気の毒そうに見ていた。

「でも二人いいよ！最高！」

京は素直に二人を褒めていた。

本当にこいつはこつという所での根回しは上手い。

「さすが！柏葉はよく分かってるよねー誰かさんと違ってさ」

「そうそう、月夜くんとは反応が全然違うよね」

真希までも朱里の意見に同調している。

くそ、これでは俺一人が悪者じゃないか。

「じゃあ、泳ぎに行こう！」

15話

そして荷物を持って場所を確保するために移動した。

今日は暑いということもあり、出ている人間も相当の数で、近年稀に見るぐらいの混雑だった。

人の波を掻き分けながら進むと、ようやくわずかに開いているスペースを確保することが出来た。

「ここでいいか？」

確認を取ってみたが誰も文句は言わなかった。っていうか何で俺が仕切っている？

それから荷物をその場に置くと、海に出て行った。

ありきたりではあるが、ビーチボールを投げあつたり浮き輪で浮かんだりしていた。

気温が気温なだけに水が冷たくて気持ちよかった。

そしてみんな楽しんでいた。

俺は生まれ持った例の能力のせいなのか、どこか冷めた部分があつて本気で楽しむことがなかなか無かった。

しかしこうやって何も考えずに馬鹿みたいに騒いでいると、楽しくて気持ちが悪直になれた。

時間が経つのは早く、いつの間にか昼になっていた。

「腹減ったー・・・」

京がぼやきながら海から出てきた。

「もう昼か・・・そう言えば悠斗のやつ来ないな」

来なくてもいいのだが、とりあえず言ってみた。

「来なくてもいいんじゃない？」

「うんうん・・・」

朱里も京も同意だった。

「そうだな・・・じゃあ、飯でも食べよう」

みんなで海から上がって食事の準備をすることにした。

「さて・・・」

今日の食事は言うまでも無く海の家などではない。

朱里と真希が、でかいバスケットの中から次々と豪華な品々を取り出した。

「おおー」

俺と京は思わず声を上げた。

朱里は洋食中心の料理で、マリネのサラダやらサンドイッチ、タンドリーチキン、自家製ピザまであった。

一方真希は和食中心で、おひたし、漬物、おにぎり、卵焼き、しよつが焼きなどを作ってきた。

そして全てが揃ったところで昼食を食べることにした。

それぞれの料理を一口ずつ口にする。

「ん・・・」

朱里の料理の美味さは知っていたが、真希もわりとやる・・・味の付け方、下ごしらえもきちんとしている。これは一日やそこらの技術じゃ出せないものだ。

「どう？月夜くん？」

真希は俺の反応を伺っていた。

隠すこともなかったので正直な気持ちを述べた。

「美味しいよ。とってもね」

それを聞くと真希は心から純粹に喜んだ。

「本当、嬉しいー」

そこまで言われると、食べたこちらとしても嬉しい。

「ほんと・・・美味しいよなー、二人ともどこかで料理やってたの？」

京が興味本位で聞いた。

「私は小さい頃からやってたよ。家がそういう家だから・・・」

朱里がやっていたのは見てきたから分かっていた。

しかしお嬢様である浅木真希はどうだったのだろうか？彼女の答えが気になった。

「私は・・・つい三ヶ月前からかな？料理も覚えたいと思って・・・」

「驚愕の事実だ。」

あの味を出すのに三ヶ月前からやり始めた者ができることなのか？

朱里も当然ショックを受けていた。

十年近く料理に係わってきたのに、たかだか三ヶ月前に料理を始めた子と大差がないのだから。

「本当に？」

「うん・・・その・・・見よう見真似で作り始めたのがきっかけなんだけどね」

それでもこの出来はすごいぞ。

「そう……」

朱里は暗い表情になった。

「まあ……二人とも美味しいからいいじゃん」

京が場を和やかにする。

「そうだな！」

俺も急いでフォローに回った。

そしてそのまま昼食を食べていると、俺の目の前に不意に手が伸びておかずを取った。

誰だ？そう思ってその手の主を見ると、見たくない奴がそこにいた。

16話

「うん・・・美味しいじゃん」

何食わぬ顔をした悠斗がそこにいた。

「悠斗！」

「来たのか？」

悠斗は俺たちの反応を何とも思わなかった。

「ああ・・・そう言ったじゃない」

来るなよ・・・全く。

「海の家なんかでご飯食べているならどうかと思ったけど・・・
この食事なら俺も仲間に入れてもらおうかな」

許可も無く勝手に俺たちの場所に入り込んできた。相変わらずうずうしい奴だ。

「なあ・・・浅木、飲み物頂戴」

いきなり飲み物を要求する所からこいつの神経を疑う。

「あ・・・はい、どうぞ」

真希は少々戸惑いながらも水筒に入れていた冷やした麦茶を差し

出した。

「サンキュー」

そしてそれをがぶがぶと飲み干すと、そこにある料理に手を伸ばして食べた。

こいつには遠慮ってものがないのか？

俺は少し冷めた目で見ていた。

「なあ・・・お前ら午後どうするの？」

悠斗は食べながら話しかけた。

「え？特に何も・・・泳いだりするけど」

京が普通に答えた。すると悠斗は、あからさまに馬鹿にした態度に出た。

「はぁー・・・やっぱりそんなものか。ねえ、そんなことつまらな
いと思わない？」

「え？」

「当たり前のように海で泳ぐってこと」

「海に来たらそうするだろうが普通はよ！」

京も頭に来たのか荒々しく答えた。いいぞ、友人。

「せつかくだからさ、マリッジェットやらない？」

「あ？」

「海のジェットスキーみたいなやつ。やるつよ！こんな所いてもつまらないしね」

悠斗の発言がどんどんエスカレートしていく。

「何でだよ、私は嫌だよ」

朱里がきつぱりと断ったが悠斗はまるで聞いちゃいない。

「は？こんなごみごみしている所の方が危ないから、沖に出たほうが安全だよ」

お前がいて安全なはずがないだろ！

俺は心の中で叫んだ。

「いや・・・その・・・」

真希は答えに困っていた。

しょうがない、ここはきつぱりと俺が・・・そう思ったがアクシデント発生。

「あ・・・」

海パンが・・・すっぱり切れている。

どうして？さっきまで何もなかったのに。

見事に尻の部分が切れていた。このまま立ち上がれば尻が丸見えになってしまう。

「どうしたの？海？」

にやにやしながら悠斗が話した。

この野郎・・・さりげなく俺の海パン切りやがったな。

このままでは俺はここを動けないじゃないか。

「海・・・大丈夫か？」

京が心配をしてはくれるものの海パンのことには気がつかなかった。

「じゃあ、行こうか・・・おや？海、君はどうするの？一緒に来てもいいんだよ？ついてこないの？」

悠斗は相変わらずにやにやしていた。

俺が真っ先に立ち上がれたらこいつを殴っているだろう。

しかし今はそれができない。

悠斗は強引に真希の手を引っ張った。

「あ……あの……月夜くん？」

戸惑ってこっちを見ていたが俺は今、何も出来ない。

ましてや海パンが割けているなど口にもしたくなかった。

そして朱里に必死に目で合図を出した。

『俺は動けない。あいつを……頼む！』

通じたのか、朱里はこっちを向いて頷くと立ち上がった。

「待てよ！私も行くから……」

それを聞くと悠斗はさらに喜んだ。

「気が変わったのか？いいねー素直で。ははは！じゃあね、お二人さん」

気持ちの悪い笑顔を俺らに振りまいて、三人は姿を消した。

17話

「おい・・・いいのか？二人をあのまま行かせて」

置いてけぼりを食らった京は俺を責めた。

「くそー・・・あの野郎。用意周到に俺の海パンまで切るとは・・・」

「は？どついつと？」

京は状況を理解できなくて俺に聞いた。

俺は素直に今の状況を説明して朱里に真希のボディガードを頼んだことも話した。

「ひでーなー・・・どこまで卑劣な奴なんだ。あいつは・・・」

京も同情してくれた。

「それよりも・・・二人が心配だ。俺の海パン何とかしないとここから動けない」

「そうだな・・・分かった。俺が新しいの買ってきてやる！」

京はすぐにその場を離れると、そこら辺の定価数倍で販売しているぼったくりのような店で海パンを買ってきてくれた。

助かった。

とりあえず、これで身動きが取れる。

俺は着替えをすぐに済ませた。あいつがここを離れて二十分、何も無ければいいのだが。

朱里の剣術は日本一かもしれないが、もしも悠斗のあのついでにボディーガードとやり合うことがどうなるか予想がつかない。

俺はそんな不安を胸に抱きながら後を追いかけた。

「海……あいつどこにいったんだ？」

京が俺の後をついてきながら話しかけた。

「あいつらの足跡を追えばすぐ分かる」

「そんなことできんのかよ？」

「たぶん……な……」

何人もの人間の足跡がついているこの砂浜で探すのは不可能に近いが、俺にはそれができた。

悠斗の身長、体重、そして重心のかけ方の全てが頭に入っていた。

ついでに朱里と真希のデータも完璧だった。

だとすると……足跡の分析も簡単だ。

無数の足跡の中から悠斗のだけを選別して頭に残像を残す。

これでいい……

悠斗の足跡を一つ見れば、そこからあいつだけの足跡を追うことができる。

「こつちだ……」

京は半信半疑で俺の後を黙ってついて来た。

そして数分後。岩場の影で俺たちは見つけた。

そこには無残に倒れる大男の姿があった。

「これは……」

「心配して……損した」

俺はほっとしながらも、その状況で何があったのか理解できた。

朱里が悠斗の取り巻きを全滅させていた。

「何があつたんだ？」

とりあえず状況を知りたかった。

「あいつ……初めから私たちを連れ込んでやらしいことするつもりだったんだよ！」

こいつらを使って力づくでね！」

何だと！

「でも・・・強引に連れて行こうとしたから、条件反射だね」

「見事返り討ちか・・・」

「そのようで・・・」

悠斗の取り巻きは全部で四人、どれもこれもプロレスラーのような体型をしていたが、

朱里曰く、武道に体格は関係ない！

力の流れを掴むことが大事なんだと・・・それを証明してみせたかのように一撃で倒されている巨漢たち。

しかし剣を持たなくても素手で倒せるなんて・・・朱里は強すぎる。

悠斗だけは無傷でその場をただおろおろと見守っていた。

「お・・・お前らこんなことして・・・ただで済むと思っているのか？」

「何だと？」

俺は流石に頭にきていた。

「俺の父親に頼めば・・・お前らの人生なんて、紙くず同然に消え去るんだぞ？」

「ここらの企業は全て親父との係わりで持っているようなもんだ。就職などろくに出来なくすることも、やくざに追い込んでもらうことだってできるんだぞ！」

「こいつ・・・自分の父親の力を誇示してそれに乗っかるうとしてやがる。何て卑怯な奴なんだ。」

しかしそれを聞いた朱里は強気の態度で前へ出た。

「やってみれば・・・私の家は代々の武道家だから、そこらの企業と関係もないし、どちらかといったら、こわーいお兄さんたちのいる事務所との付き合いがあるわ。それにねそんな変な輩が近づいたところで屈すると思う？」

朱里は怯む様子など見せなかった。それとは対照的に悠斗の表情はひきつった。

「私も・・・あなたが親の力を誇示すると言っのなら使わせてもらうわ。」

私の父は浅木グループの社長よ？」

悠斗は目を大きく見開いた。

「何だって？それじゃあ、俺の父親の会社との・・・」

「そう、係わり合いの深い関係者の一人よ。それも重要な取引相手としてのね。」

私の父に今回の話をしたらあなたのお父さんは何て思うのかしら？」

ますます青くなる悠斗、いい気味だ。

こうなったら俺も続いて……って思ったが、俺の身内の話など何の自慢にもならない。

親戚もろくにいなかったし、父親も良いところの坊ちゃんだった訳でもなく孤独な存在だったからな……

「分かった……今回の事は……無しにしよう」

悠斗は譲歩に出てきた。しかしそんなの許せなかった。

それは朱里も感じていた。

「あんたね……これだけの事しておきながらその態度はなんなの？」

「じゃあ……どうしろと？金か？」

「最低……あんたね。悪いと思ったたらすることは決まってるでしょ？」

なるほど……

俺にはぴんときたが、悠斗にはさっぱり分からなかった。

「何をだ？」

「謝罪よ！頭を下げて謝るのは当然のことでしょ！」

それを聞くと、悠斗は信じられないといった様子だった。

おそらく今まで人に謝ったことなど無いのだろう。

何もかも思い通りにいつていた人生だったが今回ばかりは相手が悪かった。

悠斗は屈辱的とも思える形で謝罪を余儀なくされていた。

「く……その……」

プライドが邪魔をしているのか、歯切れが悪くいつまで経っても謝罪の言葉が出てこない。

「早くしなさいよ!」

朱里はいらいらしたのか、まくし立てた。

そして悠斗も観念したのかついに頭を下げた。

「すまなかった……」

それを見た真希と朱里が納得したどうかは分からなかったが、その場は悠斗のその謝罪で落ち着いた。

悠斗は耐え難い屈辱を与えられたのは事実だった。

逃げ帰るように立ち去る時に朱里や俺の顔を見たときの表情は憎悪に満ちていた。

そう、いつか借りを返すぞー!といった感じで。

18話

「とんでもない一日だったわ・・・」

朱里はそう言いながら帰り道を歩いた。

「悪かったよ・・・」

俺はどういつて言いか分からずとりあえず謝った。

「何であんたが謝るの？」

「いや・・・その・・・今回の計画を立てたのは俺たちの訳だし、それが漏れてしまったのも俺らの責任かなーって思って・・・」

「海が謝ることなんてないわ。あいつが悪いんだから・・・」

朱里は俺をかばってくれた。その様子を見ていた真希はどこか浮かない表情だった。

「朱里さんって本当に月夜くんのこと何でも知ってるのね」

真希が何を思ってかそんなことを口にした。

朱里はとても動揺していた。

「いや・・・こいつとは腐れ縁な訳だしね。」

嫌でもその・・・こういう風になっちゃっつていつの？」

「ふーーーーーん」

朱里を見る真希の目は冷たかった。

「朱里さん・・・月夜くんのこと好き？」

そしていきなりの爆弾発言。

「え？」

「はあ？」

何を言っているんだこの子は・・・

俺の心臓はありえない速さで動いていた。

「いや・・・二人見ていて親密っていうか、それ以上かなーって」

「そ、そんなこと無いわよ！」

朱里は柄にも無く真っ赤になっていた。

俺ももちろん動揺は隠せなかった。

「ただ付き合いが長いだけだ！」

俺も咄嗟に熱く否定していた。

「そうなんだ・・・」

真希は疑いの目で俺たちの事を見ていた。

しかし朱里も俺も否定したことで、どこか安心したのだろう、表情を次第に戻してぼそぼそと呟いた。

「なら・・・私にも・・・」

その言葉はとても小さくて聞き取れなかった。

「でも・・・俺が見た限りでもこの二人が付き合っているってことはないぞ」

京も話しに加わってきた。そして助け舟を出してくれるような口ぶりだ。

なかなか空気が読める奴で良かった。

「だってさ・・・海の奴、朱里がしょっちゅう家に飯作りに来ているのに何にもしないんだぜ。」

「何とも思っていない証拠だよ！」

この野郎・・・前言撤回だ。

そのことを聞いた真希はショックを受けた。

「月夜くんの家に・・・ご飯を？」

これではまた疑われてしまう。

「その・・・俺って両親いないから、昔から仲の良かったこいつの

両親が作ってやれっことで来てくれてるんだよ。
分かりやすく言えば近所づきあいつてこと?」

「年頃の一人暮らしの男の家にご飯を作りに行くのが近所づきあいの?」

再び冷めた目で見る真希。その目はいい加減に止めてくれ、俺がまるで駄目人間のように見えてくる。

「俺も悪いとは思っているんだが、せつかくのこいつの両親の好意に甘えているだけなんだ。深い意味は無い!」

何か話せば話すほど言い訳のように聞こえてくる。

「私だってそんなしょっちゅう行っている訳じゃないの。月に二、三度くらいよ」

「そっだよ! 朱里がこいつの家行くのは大体そんなもんで、まあ・
泊まった事は一度ぐらいだよな?」

お前黙れ!

全然俺のフォローになっていない。

「泊まるって・・・その・・・
朱里さんが月夜くんの家で・・・その・・・
一緒に布団に入って・・・シャワーを浴びて・・・」

真希はいよいよパニックになってきたようだ。頭の中で整理できなくなっていた。

普通に考えたら布団に入る前にシャワーだろ。いかんいかん・・・何を考えてるんだ。

「だから！何度も言うようだけど、こいつとは何も無いんだってば！いい？泊まったのだってこいつが風邪を引いて寝込んだ時に看病に行っただけなの、

深い意味は無いの！私の親も、もちろん知っているわ」

朱里は半分切れ気味で話していた。そこまで強く否定しなくても・・・

「でも・・・親公認の仲ってことじゃ？」

「あのね・・・私にだって選ぶ権利ってものがあるの。親は関係ないわ」

「月夜くんはどう思う？」

いきなりそこで俺に振るのかよ。

俺は答えに困った。正直どのように参加していいか分からなかった。

「その・・・朱里は親に言われてやっているだけであって、そんな深い付き合いとか考えない方が・・・」

何を言っているのか分からないほど考えがまとまらなかった。

頭と口が別々に働いている感じだった。

真希は俺たちの話を聞いていくうちに俺を取り巻く環境というものが見えてきた。

話したことがあまりなかっただけに、俺という人物の過去の情報が少ないのだらう。

しかしそれも話す内に明確になっていき、以前よりも親近感を感じるようになった。

だからこそ、いきなり話を切り替えた。

19話

「じゃあさ、私が今度ご飯に作りに行っても問題ないってことですよ？」

「え？」

またまた爆弾発言。

「だって私だって月夜くんにご飯作ってあげたいもん。それに一人だといろいろ大変なんですよ？」

真希はさらっとそんなことを言った。俺を勉強会に誘ったことといい、その強引な手口は変わらない。

「月夜くんは・・・嫌？」

朱里は下から俺の事を切なそうに潤んだ瞳で見つめた。

どくん・・・

こんな状況で断れるはずも無い。

「まあ・・・嫌ってことはない」

それを聞くなり真希はにこつと笑い、

「じゃあ、今度は月夜くんの家で勉強会ね」

さっきの潤んだ瞳は何だったんだよ。

この悪魔め・・・演技だったのか！

朱里の俺を見る目もどこか突き刺さるような感じで痛かった。

「でも・・・俺一人の一存で決められないからな。両親にもちゃんと話しておいてくれよ。」

後で知らなかったーで悪者になるのも嫌だから

「うん、分かってるよ。」

でもね、大丈夫だと思うよー家のお母さんもお父さんも月夜くんのこと、結構気に入っているみたいだしー」

そうですか・・・

「朱里さん、そういうことで私もお邪魔しますね」

「そ・・・そんな・・・別に、私に断らなくても・・・」

朱里も突然の事で焦っていたのか、頭の中の整理がつかなかった。

「いいなー・・・じゃあ、俺も俺もー料理作りに行くー・・・」

京がふざけてじゃれてきた。

「お前は何にも作れないだろーが！」

「そんなつれないこと言うなよ。俺も二人の料理食べたいもん……」

「なら、浅木や朱里と一緒に来ればいいだろ。いいだろ？二人とも」

そう聞くと二人はどうも切りの良い返事をしなかった。

「まあ……海がiiiiって言うなら」

「うん……私も……別に構わないよ」

これならどちらにも公平だし、怪しまれることもないだろう。

しかし京にも俺同様に最低限の負担はしてもらわなくてはならない。
い。

「京……お前、材料費ぐらい払えよ」

「え？」

そこで京が固まる。

「そんな……おごりじゃないの？」

信じられない言葉だ。

「当たり前だろ！作るだけ作ってもらって、その上無料ってそんな馬鹿な話があるかよ！

全く……お前って……」

どこまでずつずつしいんだ。

まあ、普段から金が無い奴だというのは知っていたがここまでとは……

「いいよ……別にお金なんて払わなくてもさ」

「そうよ……そんなに掛からないしね」

二人は京をかばってくれた。

しかし世の中はそんなに甘くは無い。

「甘やかさない！これは最低限の常識だ。

それが守れないなら、わざわざ作りに来ても欲しくない……」
きっぱりと言った。それを聞いた二人も少し暗い顔になった。

すると、京も自分が悪いことに気がついたのか、

「じゃあ俺は金がある時でっことで」

あっさり引き下がった。

「そつだな、当然だ……」

そこで全員が納得した。というか、俺が納得させた形だ。

でもこればかりは自分の信条なので譲れない。

俺は人の恩恵をただ同然で受け取れるほど、図太い神経を持ち合わせていない。

「でも、遠慮しないで来てよ！」

朱里は空気を変えるかのように明るく京を誘った。

「ああ！またお前らの料理、俺にも食べさせてくれよな」

京も特に気にすることなく爽やかに答えていた。

「それじゃあ、そういうことで・・・」

「そうね」

「ああ！」

「また！」

そう言つと全員がそれぞれの家へと帰っていった。

悠斗にめっちゃくちゃにされた形で終わった今日だったが、楽しい一日には変わりなかった。

夕日が眩しい。

明日からまたバイトの日々が始まると思うと少し憂鬱だが仕方がない。

しかしそんな長い夏休みが俺にとって、人生を揺るがす大きなも

のになるとは今は予想もつかなかった。

20話

夏休み七日目

あの海での一件から数日後俺は浅木の家と呼ばれていた。

勉強会の約束だった。

あの日からかれこれ五度目か・・・

すっかり浅木の家への行き方にも慣れてしまった。

インターホンを鳴らすと、名前も聞かずに分かっていたかのように真希がドアを開けた。

「いつも時間通りだね」

「ああ・・・」

「それでさ、今日なんだけど、一緒にデートしない？」

「え？勉強は？」

「たまには息抜きも必要でしょ？」

「つい、この前海に行ったじゃないか」

「あれはさー・・・みんな一緒だったでしょ。」

私は月夜くと二人で出掛けたいんだよ、ねえ、嫌？嫌？」

いきなりそんなこと可愛く言われても、嫌だなんて返せるはずもなく、

「分かりました・・・浅木はいつも思うが顔に似合わず強引だな・・・」

「そう？じゃあ、悪女って呼んで」

「呼んで欲しいのか？」

「嘘、嘘・・・へへ・・・」

軽いボケをかました後に俺たちは街に繰り出した。

俺たちはバスに乗って三十分、八坂市の中心街にたどり着いた。

「人が多いな・・・」

「そりゃね・・・休みだしね。ねえねえ、私さ本屋さんに行きたいな」

真希は行きたい場所を遠慮なく指定してきた。

「本屋？ああ・・・いいよ」

俺は真希の話を受け入れるとそのまま近くにある本屋の中へと入

った。

ガー……

自動ドアが開くと中は冷房がきいていて涼しかった。

「ふー……気持ちいいな……」

独り言を呟きながら店内を歩いた。

ここは街の中でも一番大きい本屋だった。

CDやDVDなども取り扱っており、品揃えが豊富だった。

真希はどんな本を読むのだろうか？

そこに興味はあった。

きっと参考書か、恋愛小説、ミステリーとかといった類だろう。

俺はそのように勝手に考えていた。

すると真希は一直線に漫画コーナーへ。

意外だ。

そして新刊の並ぶ本の中から迷いもなく、ある一冊の本を手にとった。

『悪魔少女、呪い殺し十三巻』

おいおい……よりによってホラー漫画。しかも分かりやすいタイトル……って十三巻も出てるのかよ！

ホラーで十三巻ってどんだけ同じ環境でホラーが続くんだよ。そんなの読者が飽きるだろ？

「それって……」

俺は少し引き気味だった。しかしその関係無しに真希はいつものような笑顔で俺に話しかけた。

「私さ！ホラー漫画大好きなんだ。この漫画の作者の蛇泥極悪先生も凄い靈感の持ち主なんだって。」

だから結構リアルに描かれてるんだよ。それでねー私が特に気に入っているのは『暗闇で料理をするたえこさん』ってやつなんだ」

ペンネームも最悪だが、その内容も見なくても分かる様な感じだ。

「今度、月夜くんにも貸してあげるから見てみてね」

俺の範囲外の漫画だよ。しかし冷たくあしらう訳にもいかない。

「……はは……」

乾いた笑いしか出てこない。

「さてと、後はCDを買っていきつと」

真希はそのままCDコーナーにも向かった。

俺は嫌な予感がしたが、まさか聴く曲までおかしいはずがないと言いつ聞かせながら、後について行った。

向かう先は最新邦楽、洋楽コーナーでもなければ、クラシックコーナーでもない。

よりによって・・・その他の分類コーナーで探していたのは、

『日本の長唄』

どんな趣味だ！

「やっぱり日本人の心はこの長唄に・・・」

もう止めてくれ・・・俺の真希のイメージがどんどん崩れる。

俺はすっかりまいった。

しかし真希はペースを崩すことなく自らの買い物を済ませていった。

それはある意味尊敬に値する。

俺にはレジに向かってこれらの商品を堂々と出せるほど人間ができていない。

凄すぎるぞ浅木真希。

21話

「じゃあ、次はご飯でも食べに行こうか？」

時計を見ると午後六時を過ぎていた。

「いいのか？お母さんたち心配しないのか？家でご飯食べた方が・
」

俺は気遣って真希に声を掛けたが、まるで逆の答えが返ってきた。

「いいの！月夜くんは今日は私とデートするって言っただでしょ。

なら夕食ぐらい一緒に食べてもおかしくないでしょ！」

そんな強気に迫られても・・・まあ、真希が言いっただけなら。

そう思いながら俺たちは適当に食事できるところを探した。

学生の身分だったので、食べれるものと言ったらファーストフードか、喫茶店が相場だ。

しかし真希は有り得ない店を選んでいった。

「おい・・・ここは？」

「え？フランス料理の店だけど？」

あっさりと答えやがった。

「そんな高いところ行けるか！庶民をなめるな！」

俺は心から叫んだ。しかし真希はけろっとした様子で、

「大丈夫・・・ここは私が払うから。」

私ね、夢だったの・・・月夜君のような人とこんなお店で二人つきりで食事するのがさ・・・」

何を言ってるんだ？俺は頭の中が整理できなくなっていた。それと同時になぜか胸も高鳴っていた。

「小さい頃、よく大人になったら何してみたいか思ったでしょ。それがこれなんだ」

真希は真つ直ぐな目で俺を見ていた。

そこまで言われたら俺には断ることはできない。

「分かったよ・・・なら、入ろう。でもお前だけが払うつてのは無しだ。俺も払う」

「え？」

「そうじゃなきゃ、ここは止めた。」

俺だって男だ・・・女に奢ってもらってまで高い食事をするってことに気が進まないんだよ」

これが俺の信念なんだ。何度も言つが曲げることは出来ない。

「この前も思っただけど、月夜くんって頑固親父みたいだね・・・」

むう・・・痛いことを・・・

「分かったよ。月夜くんのそういうところ嫌いじゃないよ」

「照れるようなことをさらっと言っなよ」

俺は相変わらずペースを崩されっぱなしだ。

とりあえず話もまとまり高級そうな目の前のレストランへ足を踏み入れた。

そこは別世界だった。

豪華なシャンデリア、静かに流れるクラシック、そして高そうなテーブルに規則正しく並んでいる真っ白なテーブルクロス。

どこにも乱れが無い。床はふかふかしていて変な感じがした。

「正装じゃなきゃまずいんじゃないか？」

ひそひそと真希に話した。しかし真希はそんなことお構い無しだった。

「大丈夫よ!!」

「いらっしやいませ・・・お二人ですか？」

ウェイターの男がこちらに気が付き話しかけた。

「すみません。この格好でも入れますか？」

「え？」

真希はワンピースだから大丈夫かもしれないが、俺はジーパンにTシャツ一枚だ。

ウェイターの男は俺のほうをちらちらと見ている。そりゃあそうだろ・・・俺の格好はラフすぎる。

「大丈夫ですよ。さ・・・こちらに」

やや間があつたが、男は俺たちを店内に案内してくれた。

店の中にはいかにも金持ちそうな夫婦やら、品の良さそうな老人が何組か静かに食事をしていた。

それを見ただけでも俺は場違いだと思った。しかし真希は正反対でわくわくしているようだった。

「どうぞ・・・」

案内され椅子を引かれると、俺たちは席についた。

「只今メニューをお持ちいたします」

そう言つと男は奥へと下がった。

「は・・・やっぱりこういつとくるは苦手だ・・・」

思わず口にした。

「まーまーそう言わないで。今日は私に尽くして!」

「あんなー・・・」

半ば呆れ気味だったが、真希が喜んでいるのならいいか。

それから俺たちは慣れないフランス料理のフルコースって奴をたつぷり一時間以上掛けて食べた。

「さて・・・そろそろ行くか?」

「うん・・・」

がつがつ食べる食事ではないので満腹までには至らなかったが、コース料理も全て出たので退散することにした。

そしていよいよ運命の会計。

22話

「お二人様で、六万円になります」

まじですか・・・

一瞬硬直する俺。

隣ではニコニコしている女神様。

急いで財布の中を確認・・・確認・・・確認・・・一万五千円也。
全然足りない。

「あ・・・の・・・」

言葉が上手く出てこない。あんな大きな口を叩いたのにお金が足りないなんて言えるか。

しかしそれを見越していたのか真希はカードで二人分の支払いを済ませていた。

「ありがとうございます。またのお越しをお待ちしています」

男は丁寧に俺たちを送り出してくれた。

「むー・・・」

帰り道俺はもじもじしていた。

「あの・・・」

俺が何かを言おうとする前に真希がそれを塞ぐかのように話し掛けた。

「月夜くん・・・いつも勉強を教えてもらっているお礼してなかったでしょ。」

今日はそのお礼の意味で食事に誘ったから、お金は払わなくていいからね」

「そんな・・・そんな訳にはいかな・・・」

反論しようとしたが真希は畳み掛けるように話した。

「ただで勉強を教えてもらって何も言っていないのは私の流儀に反するわ。いい、わかった？」

「は・・・はい」

俺は圧倒されてただ素直に返事をするしかなかった。

「月夜くんみたいでしょ。へへ・・・」

ぺろっと舌を出して見せて笑っていた。

「全く・・・」

真希には敵わないな。

「でも本当に楽しかったよ。私の夢が一つ叶ったんだからね」

「そうか？俺マナーのことなんて全然だったから迷惑掛けたんじゃないか？」

「いいの！完璧なマナーで食べられたらこっちが引くよ。二人つきりで食事できたのが嬉しいんだから」

そうですか・・・

「私ね、高校に入ってからあまり面白くないなって思っていたけど、

今は月夜くんに出会って、京くんや朱里さんたちと出掛けたりできてすごく面白いよ」

「そう？そう言ってもらえると俺も嬉しいよ」

雑談をしながら歩いていたので帰り道はあっという間の気がした。真希の家も次第に近づいてきた。

「ねえ、朱里さんとは幼馴染なんだよね」

「ああ・・・腐れ縁だ。」

親同士が知り合いつてこともあったから小学校行くのは一緒だったな・・・中学からは別々に行ってたけどな。

そうそう・・・あいつさ、今はすごい強そうに見えるけど、昔はすっごい泣き虫だったんだ」

「へー……」

「それに飯もよく作りに来てたけど、初めは実験台になってた感じだよ……」

俺が朱里の話をし始めると真希の表情は次第に曇っていった。

「月夜くん……朱里さんの話になるとすごく楽しそうだね」

え？どういうことだ？

「私ね、いつも朱里さんのこと羨ましいって思っていたんだ。」

だって月夜くんのこと何でも知ってし、仲良さそうだからさ……

「

浅木とだって仲いいじゃないか」

「違うの！私の仲と朱里さんの仲は全然違うの！」

真希は子供のように声を荒げた。

「だってまだ月夜くんと下の名前で呼び合っ仲じゃないもん……」

「それってそんなに大事なことか？」

「大事だよ！もー……女心がわかんないんだから」

「じゃあ、どうすればいいんだよ？」

俺はどうしていいのかわからなかった。すると真希は提案した。

「朱里さんと月夜くんしか知らないことがあるんなら、私と月夜くんしか知らないことがあってもいいでしょ？」

「それってどういう意味？」

何か回りくどい言い方だ。しかも話しながら歩いていたのでもう真希の家の前まで来てしまった。

「目……瞑って……」

「は？」

俺は真希が何がしたいのかわからなかったが言われるがままに目を瞑った。

次の瞬間、俺の唇にやわらかくて暖かいものがすっと触れた。

「え？」

俺の頭は真っ白になった。

これは……

思わず目を開けてしまった。そこには真希が赤い顔をして俺の方を見ていた。

そして駆け足で家の門の中に入ると、格子越しに

「二人の秘密だよ！」

そう言って家に入っていった。

そのまま俺はそこにしばらくの間、心在らずといった様子で立っていた。

そして確かめるかのように唇に指をあててみた。

確かに触れた・・・俺の唇に・・・

どくん・・・どくん・・・どくん・・・

「何なんだよ・・・」

胸が激しく高鳴り、自分の気持ちを思うように抑えることができなかつた。

23話

二度目の出会いはバイト帰りの公園だった。

ここまでくると彼女との出会いは必然なのだろうか？

俺は彼女のことなど忘れかけていたのに、あの時の状況を再び思い出すはめになってしまった。

夏休み九日目

昨日はずっと浅木のことを考えてしまった。

考えないようにしても自然と頭の中にあの時の光景が浮かんでしまっからだ。

何であんなことをしたんだろう？

これってやっぱり俺のことを好きなんだよな・・・じゃなきゃそんなことしないよな。

高ぶる気持ちのまま悶々と自問自答を繰り返しながら一日が過ぎてしまい、

そのまま夢見心地のまま寝てしまっていた。

そして朝起きるとメールが一件入っていることに気が付く。

まさか・・・浅木か？そう思い、慌てて起きてメールを開いたが、そこにはいかにも男らしい、用件しか入っていない内容が書かれてあった。

『海、今日急に大きな現場の仕事が入った。昼からバイトに来い！』
何だよ違ったか・・・それにのっけから命令口調なんて朝からげんなりする。

それが誰からのメールからは分かっていた。俺にとってはありがたいことだから。

まあ・・・いいか。

大きな仕事ならバイト代もきつと弾んでくれるはずだから。

この夏休みにいかに稼いでおくことが今の俺の目標なので、気にせずに喜んですぐにメールを返信した。

『分かりました。では、いつもの場所で拾って下さい』

メールを打ち終わり携帯を閉じると、早速朝ごはんの準備を整えた。

時刻は朝の九時を回ったところだ。そんなに遅い起床でもない、バイトまでまだ数時間ある。

俺は洗濯、掃除など一通り家の事を済ますと現場の服に着替えて十一時過ぎに家を出た。

アパートの階段を下りて門の前になると、眩しいほどの日差しが目の前に飛び込んだ。

同時にサウナのような熱が皮膚を刺激した。

「なんだよ・・・今日も暑いのか」

やる気を失くすような気温だ。

真夏日の現場の仕事は照り返しを考えると四十度ぐらいになっている。

下手すれば命を落としかねない状況だ。

俺は待ち合わせの場所によろよると重たい体を引きずって歩いた。

待ち合わせ場所は、自宅から数キロ離れた場所にあるコンビニだ。

駐車場が広くて時間を潰せるという理由からここが選ばれた。

いつもだと俺の他に三人の男がいるはずだ。

「おーい、海、こっちこっち」

早速その一人の男が手を振っていた。

「おはようございます、純さん」

この男は高橋純で、年は二十歳、髪は金髪、どこにでもいそうな

ちやらちやらしたお兄さんだ。

ぱっと見はそうだが、面倒見が良くて、頭もそこそこ切れる。

そして次々姿を現す同僚。

「おいーっす。海、純・・・」

「おはよう、海くん」

一人はごつい体つきの三十歳の男、江夏佑太、もう一人は細身の中年男、清川隆四十三歳。

「さて・・・後は重さんだけだね」

清川が周りを見回すが現場監督、兼運転手の大川重治の乗っている大きな車は見当たらなかった。

「じゃあ、コンビニで時間でも潰すか」

江夏の言葉に賛同して俺らはコンビニで涼むことにした。

24話

「お前ら飲み物たくさん買っておけよ。今の時期は熱中症で倒れる奴が腐るほどいる」

大きな声が店内に響き渡る。

「はい」

「なあ、海・・・お前どの子タイプ？」

純がグラビアアイドルの載っている雑誌を広げて俺に質問してきた。

「一番右の子かな？」

素直に答えた。

「え？嘘、まじー俺は絶対真ん中だよ！」

純が指差した女は目と鼻のバランスが微妙に見えた。

「別に好みなんだし」

「そうか？絶対真ん中だって、ねえ、隆さん」

清川にまで話を振った。そこまですることなのか？

「私は・・・右ですね」

また意見が分かれた。

「嘘でしょ？どう見ても真ん中ですって！」

そうやってもめていると、コンビニにいかつい男が入ってきた。

ぱつと見ヤクザに間違えてもおかしくないぐらいのオーラを放っていた。

そして俺らを見るなり江夏以上の大声で、

「おい、お前ら行くぞ！」

まるで熊のような咆哮だ。

俺らは急いで買い物を済ませると、早速その男の車に乗り込んだ。

そう、この男こそ現場監督の大川重治五十歳、独身、太く大きな体であだ名は熊さん。

そのまんまだ・・・しかしこの人は面倒見が良く、部下に慕われている。

俺も親父のちょっとした知り合いだったと言うことでずいぶん世話になっっている。

本来学生の俺なんか、こんな厳しい現場に入れてもらえるはずもない。

しかし金に困っているならと、重さんは俺をあっさりと受け入れてくれた。

しかも俺が働きやすい時間にバイトを入れてくれる辺りも良く考えてくれている。

職場の人たちもこの重さんがいるおかげで、大きな争いも無く、人間関係が上手く回っていた。

だから、俺にはこんな良い条件のバイトを断る理由はどこにも存在しない。

そして車に乗り込むなり重さんは俺に話しかけた。

「悪いな海。急なバイトで・・・
何せこの前雇った若造が全く使えない上に根性無しでな、ちょっと怒鳴ったら辞めやがった。

しかもメールで辞めますだ・・・意味が分からん。
最近の奴は礼儀つてもんを始めに教えなきゃ分かんないのかよ・・・」

ぶつぶつと文句を言いながらハンドルを握った。

「重さん、俺らだって十分若いですよ？」

純が後部座席から話しかけた。

「ははは・・・そっぴやそっぴやだったな。

だが、お前らは違うよ、いいか、礼儀ってのは外の人から教わるようじゃ駄目なんだ。

家で教わるもんなんだ。純の親父さんは大工の棟梁だから厳しかったろ？」

「そりゃもう……」

「海もな……昔から知ってるけど、あの人見習って礼儀正しかったからな」

俺の父親だけあの人か……重さんと親父の間には一体何があったんだ？

「そついや、今の時期はどこも花火大会ばかりですね」

純が話題を振った。

「そつだな。どこもかしこも花火、屋台、お祭り一色だ。俺も見たいが、あの人ごみが嫌だな……」

江夏はどうやら人ごみに入ると酔うらしい。がたいの割りに情けないことを言っている。

「そついや、花火といえばよ……三年前にあの……激しく空が光ったやつ……あれって隕石だったけか？」

そつ言えばそんなことがあった。

三年前のある日八坂市の夜空が何度も光を放ち、爆音を轟かせていた。

俺もその音には気がついたが、眠くてそれどころでなかったのは

覚えている。

「ああ・・・あれですか。あれは隕石じゃないですよ」

「どづいづことだ？」

「夜空が一瞬光って、爆発音のようなものが聞こえたんですよ。落雷の可能性が高くないですか？」

それもそうだ。

爆発音のした場所にはえぐれたような窪みしかなく、隕石の欠片は見つからなかった。

しかしその日に雨などは一切降らなかったのだけは覚えている。

「そうか・・・そうかもな」

重さんは、はははと笑うと、胸ポケットから煙草を取り出してくわえた。

「しかし・・・そんな意味不明の大きな出来事といや、十三年前の出来事も思い出すよな・・・」

十三年前の出来事？

重さんはそう言うと煙草に火をつけて、大きく吸い込んだ。

25話

俺たちは現場に着くと、すぐに準備に取り掛かった。

俺は専門的なことは一切できないので、物を運ぶ、言われた通りに動く、道具を揃える位のことしか出来なかった。

しかしこの簡単に見えるような動作も実は難しい。

体力と気配りが重要視される。

俺は手を抜くことなど出来なかった。すぐにばれてしまうからである。

それだけ現場の空気はぴりぴりしていた。

重さんは仕事中は私情一切抜きで本気で取り組むことがモットーだ。

だから気の抜けた野郎は邪魔だからどっかに行けというのが口癖なぐらいだ。

「ほら、そこ・・・さっさと動けよ！」

「はい！」

「穴が数センチずれてる、埋めてやり直ししろ！」

「はい！」

「海！あれ持って来い！」

「はい！」

あれと言われただけで、何を持っていかなければならぬかを把握しておかなければならぬのがこのルールでもあった。

聞き返すことは絶対許されない。

俺はすぐに重さんの欲しいものを取ってきた。

たぶんレンチとドライバーだ。

それを何も言わず受け取ると、黙々と作業を続けた。

本当にこの人を見ているとすごいと感じさせられる。

人の動きを見なくても大体全員の様子を把握しておいて、指示を同時に数箇所飛ばす。

何でそんなことまで分かるんだよ。そう思うものが多いが、全ての指摘が的を得ていて正しかった。

だからこそ、この大川土木は仕事の依頼が多い。

人数が少なくても他社の数倍の時間で仕上げることができ、一部の間もない職人技で出来上がるからだ。

まあそれも重さんが五人分の働きをしているからだ。

「おい、そろそろ休憩にするぞ！」

働き始めて三時間、重さんがみんなに声を掛けた。

みんなはそれぞれ手を動かすのを止めて、日陰に集まって腰を下ろした。

休憩時間は三十分。俺は買ってきたジュースで喉を潤した。

「ふー……」

久しぶりのバイトに体が追いついてないのも事実で、慣らすまでに時間が掛かりそうだと思っていた。

しかし充実感があった。体を動かすことと頭を働かせることは俺にとって無くてはならないものだからだ。

「おい、海……どうだ？久しぶりのバイトでへばってないか？」

純が声を掛けてきた。

「体が慣れるまでの辛抱ですかね？でも、いい感じになってきました」

「そうか……しっかしお前は本当に器用な奴だよな。」

あの気難しい親方の先を読んで物を出すからなーだから俺らもお前には一目置いてるんだぜ」

「そりゃどつとも」

「それはそうとよ、海・・・お前彼女で来たのか？」

突然何を言い出すんだこの男は！

26話

「いや・・・いないですよ」

それを聞くと、まるで同士だといつかのよう純のテンションは上がった。

「そっか・・・お互い寂しい身だな」

でもよ、お前はまだ学生なんだぜ、もっと自分から積極的にだなーアタックしていかなきゃなんないだろ」

アタックって・・・いつの人だよ。

「お前は顔もいいし、頭も切れる・・・この先生きることに不自由はしないだろう。だから・・・」

その先は言わなくても分かった。

「俺に女を紹介してくれ！」

純は彼女と別れたばかりだった。そんな時は決まって俺に女を紹介しろのしつこい攻撃がくる。

しかしそんな願いも丁重にお断りしていた。

バイト先の人物と自分の知り合いがくつついたり別れたりする姿を見たくなかったからだ。

「純さん・・・いつも言ってるでしょ。俺は紹介する女がないっ

て・・・」

「まーたーそんなこと言うし・・・お前は本当に冷たいよな。朱里ちゃんみたいな可愛い子側に置いてさ・・・」

「な・・・彼女は関係ないですよ！ただの幼馴染です」

俺は柄にもなく動揺してしまった。

「そーかー？どう見ても恋人同士だろ？」

冷めた目で俺を見た。

「純さん、まず始めに彼女に嫌われない方法を考えてくださいよ。別れたの一体何人目なんですか？」

「数えてねえよ、いちいち・・・」

「この男は・・・だから彼女が別れようと言っただろうが。」

「でもさ・・・俺って寂しがりやだから、誰かがいないと駄目なんだ・・・」

急にいい子ぶるな。

この純という男は女癖は悪いが、間切悠斗のようなどこか陰湿のような悪さはどこにもない。

それもそのはず、計算高いところはどこにもなく、本人が気付いていないぐらい能天気だからだ。

しかしそれが憎めないところでもあった。

「彼女は自分で探してください。それに年下の俺に毎回毎回頼むのも止めてください」

「海つてば、冷たいな！」

何とでも言ってくれ・・・俺にも無理なことはある。

「おい・・・俺も混ぜてくれよ」

江夏がジューズ片手に声を掛けてきた。

嫌ですなんて言うこともできないので黙っていた。

「ちょっとー聞いてくださいよ。海の奴、俺には女紹介しないって言うんですよー」

純はさっきの話を引きずってきた。

しかしそれを聞くなり江夏はふざけるなといった様子で一喝した。

「お前なーどうせ自分が悪いんだろ？」

流石、純のことを良く知っていらっしやる。

「やれやれ・・・若いっていいのはいいよな。

今という時間を過ごしているだけで楽しいんだから・・・」

「またまたー江夏さんだつてまだ若いじゃないですかー」

「うるせーなーこう見えてもな、」

十個以上も離れたお前らと話しているとジエネレーションギャツプってやつを感じるんだよ！」

江夏も江夏で悩んでいた。

「そういえば車の中での話しなんですけど、十三年前って八坂市に何か大きな事件ありましたか？」

俺には心当たりがなくて・・・」

俺は思い出したかのように、二人に聞いてみた。

「十三年前？あつたか？」

「うーん・・・昔すぎますね。俺何歳だ？」

二人は思い当たる節がなかったように振るまっていたが、江夏が何かを思い出した。

「あれじゃないか？空が真っ赤になつたつていう噂の・・・」

「ああ・・・あのUFO節が飛び交つた事件ですか？」

「そうそう・・・でも光の屈折やら、月の光の影響だとかでその後何もなかったんだよな」

「それで、あの時市内に撮影もたくさん来たらしいですね」

「ああ・・・ノストラダムスの大予言だの、世界の破滅を予期しているのだ、

未確認飛行物体のせいだったので大騒ぎになったな」

そんな出来事あったのか？俺には覚えがなかった。

「だけどそれ以降何にもなかったから、三ヶ月も持たない内に忘れられましたね」

「ああ・・・みんな火が付いて熱中するのは最初だけだからな。でも・・・あの赤い夜空は不気味だったな」

「ええ・・・」

やっぱり俺は覚えていない。まあ、その当時四歳だしな。

「それで・・・その後には何も変わったことは・・・」

「無かったな」

「全くね」

何だ・・・ただの自然現象か。

俺は意味深な言葉だと思っていたが、聞いてみればなんてことない出来事に拍子抜けした。

「おら！お前ら、休憩時間は終わりだ！」

重さんが休憩終了の合図をみんなに告げると、俺らも慌ててヘル

メットをかぶって立ち上がった。

27話

正直疲れた・・・

今日はみつちり八時間働いた。しかも体の慣れていない状況で。

夜八時半、俺はバイトの帰り道をふらふら歩いていった。

普段ならバイト帰りに寄り道をして時間を潰すのだが、今日はそんなことはできない。

体が、がたがただからだ・・・

これも数日続けば慣れるだろう。そう体に言い聞かせて晩御飯をコンビニで買った。

俺の帰り道には公園があった。

いつもは気にもしないのだが、何故か今日はここで一休みしたかった。

幸いコンビニで買った缶紅茶もある。

ここで夜風に当たりながら物思いにふけるのも風情があるかと勝手に思った。

そして誰もいないであろう公園に足を踏み入れた。

公園の中心にあるたった一つのライトが蛾を引き寄せながら辺り

を照らしていた。

一つしかないのでライト周辺意外は暗闇に等しかった。

俺はブランコにでも腰掛けようかと思い、暗闇の方へ向かった。

すると、

キイ・・・キイ・・・キイ・・・

金属のこすれる音が聞こえた。

誰かいるのか？

ライトが照らされていない暗闇の中では、そこに誰がいるのか瞬時に判断できなかった。

しかしここで引き返すのも変だ。俺はその音のする方へと近づいた。

すると、そこには忘れもしないあの女子がそこにいた。

「あ・・・」

俺の体は一瞬硬直した。

それは恐怖からというわけではない、あの時の鮮烈なイメージが脳裏を横切ったからだ。

ショート黒髪にあの青い目、まるで全てを見透かされているか
のようだった。

手には長い袋に入った竿のようなものを握り締めていた。

そしてその青い目がぎょろりと俺のほうを睨んだ。

その子は俺の事を覚えていないはずだ、そう思っていた。

しかし

「お前・・・あの時の・・・」

覚えていた。

そんな状況で俺は喜んでいいのか分からなかった。

「あの・・・その・・・君は・・・」

言葉が思いように出てこない。それに彼女は俺を見て逃げ出して
しまうのではないかとも思った。

しかしブランコをきい、きい揺らしながらそこに留まっていた。

「盗み見とは・・・感心しないな」

先制攻撃にきつい一言だ。

「俺は・・・見たくて見たわけじゃない！たまたま・・・あそこを

通っただけだ」

「ふーん」

彼女は俺の目をじっと見つめた。俺は恥ずかしさもあってか、思わず視線を逸らしてしまった。

「あの時は・・・状況が全く理解できなかったっていうか・・・何が何だかさっぱりで、頭混乱したよ・・・でも・・・普通じゃない状況だっていうのだけは分かった。

君は、あの時何をしていた？」

意を本題であるその話題に触れたかったので意を決して聞いてみた。

すると彼女はそっけない態度ではあったがぼそぼそと答えた。

「壊疽者・・・」

「壊疽者？」

「そう・・・救われない奴ら。

体が崩壊しているのにそれを止めることもできないし、精神までも崩壊してしまっている異常者よ。

そんな奴らは人と獣とも共存できない生き物になる・・・それが壊疽者」

「それを君が？」

「ああ・・・殺した。いや、本来あるべき姿に戻した。彼らの肉体

はただ塵へと帰るだけだ。

「跡形も残らない・・・」

その女の子は悪びれた様子もなく淡々と話していた。

「しかし・・・まさかこの人間に見つかるとは思わなかった・・・私もここに来てまだ日が浅いからな」

何を言っているのかさっぱり分からなかった。

「あのさ・・・そもそも君は、どこから来たの？どう見てもこの人じゃないでしょ」

すると彼女の表情は一変して険しい表情になった。

「言えない・・・それは言うてはいけない決まりだから」

「どういうことだ？決まりってのは何だ？」

「決まりって・・・誰かと一緒にここに来たってこと？」

「そう言うわけじゃない。私は縛られている側だからさ・・・」

「そう言うのと、ぎゅっと自分の右腕を握った。」

「え？」

ますます意味が分からなかった。

しかし彼女の言うことに嘘は無いということだけは感じ取れた。

「だから君には話せない」

そこまで言われればしつこく聞く気にもなれない。

俺もあっさりと引き下がることにしよう。

「そっか・・・」

俺はどこかこの女性に魅かれてしまっていた。

それは好きという感情とはまた違ったものだったが、自然に体が引き寄せられる感覚に逆らえなかった。

「名前は？」

彼女の青い目は俺の事を飲み込んでいく。

「尾上みゆ・・・」

彼女は未だに俺から視線を外そうとしなかった。

「じゃあ、君は？」

気を使ってくれたのだろうか、俺にも聞いてくれた。

「海・・・月夜海・・・」

名前を聞くと彼女の表情はふっと笑顔になった気がした。

「そう、また会えるかもね」

尾上みゆは立ち上がると俺に背を向けて歩き始めた。

「海……か」

俺の名を呟くとそのまま闇に姿を消した。

その場にただ一人取り残される。

尾上みゆ、彼女は人間なのか？

その疑問だけが残った。彼女には人独特の雰囲気、感情、体温のようなものが感じられなかった。

しかしいるだけで引き付けられるのは事実だった。

俺は心を深くえぐられたような感じで、しばらくその場に呆然と立っていた。

そして正気に戻ったのは数分後だった。

「尾上……みゆ」

その名を一度口にしてみた。

月は雲の隙間から顔を出し俺の事を照らしていた。

28話

夏休み十日目

今日は何も予定が無かった。バイトも真希の勉強会も京との約束も全く無かった。

外は、久しぶりの雨が地面の渴きを満たすかのように降り注いでいた。

起きた時刻は十時、さて・・・何をしようか・・・

俺はぼーっとする頭をかきながら洗面所に向かった。

顔を洗い流し、朝の支度を適当に済ませると、何の気なしにテレビを付けた。

「今日は何やってるんだっけ・・・」

リモコンを持ってかちかちとボタンを押す。

普段この時間にテレビは見ないので、見たこともない番組がやっていて。

何だこれ、つまらない。

これもつまらない。

チャンネルを次々と変えていくが、自分の目に留まるような番組

は無かった。

しょうがない、消してどこかに出かけようかと思ったその時、聞き覚えのある場所がテレビから聞こえた。

『八坂市、春日町三番地にある・・・』

ぴくり、とりモコンの手を止めた。

これはニュース番組だということに気がついた。

そして聞き覚えのある文章は次々とキャスターの口から飛び出してきた。

『浅木博隆さん宅で・・・』

どうということだ？

数台の警察車両に包囲された家が映る。門は黄色いテープで入れないように仕切られていた。

俺はこの家を知っている・・・

まさか・・・

俺のテレビを見る目は正気じゃなかった。

瞳孔が開いたままで、心臓は激しく脈を打ち続けていた。

そしてキャスターは淡々と続きを話す。

『殺人事件が起きました。被害者は浅木博隆さん、浅木恵子さん夫婦と……』

止めてくれ！

その続きを話すのだけは……

俺は拳を強く握り締めていた。そして真夏だというのに寒さに震える感覚に襲われた。

しかしそんな俺の叫びは届かない。

キャスターの表情は変わることなく淡々と話し続けた。

『娘、浅木真希さんです』

最悪だ……

俺の頭は空白になってしまった。周りが真っ白に見える。

何だ？これは本当に現実なのか？

正気に戻るまでに数分掛かった。

「う……嘘だろ……」

だって数日前まで普通に会って遊んでいたんだぞ。

俺にまた勉強教えてくれって、約束もしていたんだぞ……

それが・・・それが・・・何だつて急に・・・こんな形で・・・

頭がまとまらない、強く握り締めた拳でテーブルを叩くしかなかった。

「くそ！・・・くそ！・・・」

テレビでは現場の様子を話すりポーターが仕事をしていますって感じで生き生きと中継していた。

くそつたれ・・・

他人事だと思いやがつて・・・

『三人とも体をナイフのようなもので貫かれ即死と思われます・・・その凶器らしきものは未だ見当たらないようです。』

犯行現場には手がかりというものはほとんど残ってはおらず、捜査は難航しているようです』

俺は未だに信じられなかった。

あの浅木真希が死んだということ。

ふわふわと現実味の無い感覚だけが残っていて事実を受け止めることを拒否しているようだった。

『近隣の住民にも聞き込み等の協力をお願いして、犯人探しをこれから進めていくようです。そして・・・』

ぶつん。

俺は胸糞が悪くなりテレビを消した。そして頭を抱えてうなだれた。

何だよこれ？

本当のことなのか？

すると携帯が激しく鳴った。

プルルルル、プルルルル

空ろな目で着信の主を見てみる。

朱里だ・・・さてはこいつも事件の事をテレビで知ったのか？

俺はすぐに携帯を手を取った。

「もしもし・・・」

朱里が何て言葉を出すのかは予想できなかった。

「海・・・真希が・・・真希が・・・」

やはりか・・・

「俺も今テレビで見た・・・これは・・・本当のことなんだよな・・・

でも、何で浅木が殺されなきゃならないんだよ!」

朱里は悪くないのに怒鳴り散らす形になった。

「強盗殺人だつて・・・家の中も荒らされていて・・・その・・・」

朱里は取り乱すことはなかった。

「あいつは・・・別に悪いことした訳じゃないんだろ？」

それなのに・・・なんで・・・殺されなくちゃならないんだよ・・・あいつが何したつてんだよ!」

朱里は言葉を詰まらせたのか、しばらく無言だった。

しかし俺が落ち着くの見計らつて声を掛けた。

「海・・・この件のことで少し話したいことがあるんだけどいいかな・・・」

何のことだ？

まさか、朱里はこの件のことについて何かを知っているというのか？

「どづいつことだ？」

「あなたに・・・どうしても話さなくてはならないことよ」

朱里は決してふざけてなんかいなかった。

それは話されている俺も分かっていた。

そして真希が殺されたことに意味があったのならそれを知りたかった。

「分かった・・・なら、すぐに会おう」

「じゃあ、私たちの思い出の場所で・・・」

そう言うと朱里はすぐに携帯を切った。

なぜ、具体的に場所を指定しなかったのかは分からなかった。

しかし俺はすぐに着替えをして、朱里の言う思い出の場所を考えた。

思い出・・・思い出・・・

昔を思い出すことに専念する。

朱里とは幼稚園からの付き合いだった。

あいつは小さい頃は泣き虫で、いつも俺が慰めていた。

『泣かないでよ、あーちゃん』

その言葉がふっと思い出される。

そうだ、朱里が決まって泣かされた時に行く場所があった。

八坂市に流れる川、千神川の川原だ。

あそこでいつも朱里は泣いていた。

夕暮れを背中に浴びて潤んだ少女の瞳は幼心に悲しさを感じた。

俺は幾度となく朱里を励ましていた。あの川原で何度も何度も何度も……

準備が整うと俺はすぐに干神川を目指して雨の降る中、傘も差さずに飛び出した。

千神川は神の涙とも呼ばれているほど神聖な川だった。

言い伝えもいくつもあり、この川の水に浸かると病が治るとか、汚すと祟りにあうとかそんなものが現代にも残っていた。

しかしそれを信じてか、誰もこの川を汚す者はいなかった。

俺は目的の場所まで三十分と掛からなかった。

橋桁の下は雨があたらなかったの、そこで朱里を待つことにした。

俺の体は雨で濡れ、ぼたぼたと水が滴ってきた。

何を考えたらいいのか分からず、ただ朱里を待つことにした。

すると、数分して朱里が姿を現した。

朱里も濡れ鼠になっていた。俺と同じく急いでここへ向かったのだろう。

「海・・・真希が・・・死んじゃったね」

開口一番がこれか・・・しかし事実なんだ。俺はそれを受け止めるなければならぬ。

「ああ・・・」

朱里は涙一つ見せなかった。

別に薄情などとは思わない。俺も同じなのだから・・・

朱里にとつてはそんなに親しい間柄でもなかったわけだし、何よりも未だに実感が湧かないのが事実だった。

「それで、俺に話したいことって？」

俺は浅木真希の死について何かを知っているのなら聞きたかった。

それに朱里が何らかの係わりをもっていたとしても・・・

朱里は真剣な眼差しで俺を見つめていた。まるでお前にこの話を聞く覚悟があるのか、といった感じで。

しかし俺は視線をそらすことはなかった。

事実が・・・真実が知りたいのだから。

ただの興味本位での探索などではない、俺にできる限りのことはしておきたいという覚悟がそこにあった。

「信じられないかもしれないけど・・・話すよ。これはあなたにも係わりのあることだからね」

俺に？真希の死は俺にも関わりがあるというのか？

「簡潔に話すと・・・真希の家にはあるものがあつた。」

それはとてもとても貴重なものだった。それを今回の犯人は奪い去ったのよ」

「強盗殺人ってことか？」

「ええ・・・そうね」

「その貴重なものってのは何だよ？」

「門を開く鍵よ！」

「門の鍵？」

ここまでの話を聞いても俺はぴんとこなかった。

「この八坂市の名の由来は知ってる？」

「いや・・・」

「八坂市とは文字の通り八つの坂があるのよ。」

そしてその坂の一つ一つがあるものに見立てられた・・・昔話に出てくるある怪物にね」

俺は少し考えると八つという言葉で思いついた。

「八岐大蛇か・・・」

「そう・・・スサノオノミコトが草薙の剣で殺したと言われる伝説の生き物・・・」

しかしそれは実在したのよ。この場所だね」

「どういうことだ？」

「ここ八坂市には昔・・・ある門が開いたと言われるの。

それは異界とこの世界を繋ぐ門だったわ・・・

門が開くのと同時に八つの光が飛び散り、八坂市の山、大蛇山を八つに分断したらしいわ。

それが八岐大蛇の由来」

「つまり八坂で言うのは大蛇山に通じる八つの坂という由来なのか・・・」

「ええ・・・当時の村人はそんな不可解な出来事を恐れたらしい。

当然、その門が開くことを阻止しようとしたらしいわ。

そしてその門を塞ぐことが出来たのは特殊な金属でできていた草薙の剣・・・」

「草薙の剣はこの世界の物なのか？」

「それは分からない・・・人の手を転々としていた物らしいわ。

詳しいことは分からないけど、当時の人間が門を封じること成功したらしい、

そしてその門の鍵である草薙の剣は代々受け継がれたそうよ・・・

「その草薙の剣を受け継いだのが浅木真希だったことなのか？」

「そういうことになるわ・・・

しかしあれを門を開く鍵だと知るものは少ないわ・・・

きつと真希のお父さんもそんなこと知らないで手に入れたんだと

思っ」

朱里はそんなことを口にしたが、俺にはもっと不思議なことがあった。

「朱里、そういうお前は何者なんだよ？」

そんな話をいろいろ知っているお前も俺からすれば・・・その・・・」

幼馴染で見てきた千草朱里という人間は間違ってもおかしい奴ではなかった。

淡々と話される言葉の一つ一つがまるで当たり前のことかのようで俺は怖かった。

「はは・・・今まで隠してきたんだけどね。もう駄目だね・・・」

どっという意味だ？

「私の家は・・・代々護門徒を守る役目を神徒協会から与えられた守護人の名家なの。」

そして、その護門徒とはあの門を守る番人、あなたのお父さんがそうなの」

「な・・・何だと？」

「あなたはそれを引き継いでいる・・・だから・・・私はあなたの守護人よ」

訳が分からない・・・

俺の父親はその摩訶不思議な門を守る門番で、朱里の家は父さんを守る仕事をしていたのか？

父さんは何も言わなかったじゃないか。門に関することも朱里の家のことも・・・

父さんの仕事についてだって何も教えてくれなかった。

「そんなこと、急に言われても・・・俺には何がなんだか・・・」

「あなたも感じていたはずよ。小さい頃から自分は普通じゃないってね」

確かにそうだ。俺には不思議な能力がある。

しかしそれは公にすることで俺に災いが降り注ぐはずだ。

しかしそれが父さんの言っていたこととは違うシナリオになっている。

「それは認める・・・そもそも父さんは何をしていたんだ。

俺は何一つ父さんのことを知らないんだ・・・」

知りたかった。

父さんのやってきたことを、そして息子の俺は何を受け継いだんだろう。

しかし朱里は困りながら答えた。

「ごめん・・・私には詳しいことは言えないの・・・」

千草家に伝えられていることは護門徒を守るといふ使命と、この門のルーツだけが残っていたの。

護門徒に關係する能力や門の向こう側については全く知らないわ」

「でも、父さんが門を守っていたのは事実なんだよな」

「ええ……」

「じゃあ、何故失踪したんだ？っていうか死んだのか？」

俺はさらに朱里に詰め寄った。

「分からないの……あなたのお父さんは何も語ってくれなかった。ただ、息子を頼むとしか……」

何だよそれ！父さんは俺を何だと思ってるんだよ。

俺は歯がゆくて仕方がなかった。

「父さん何も言わなかったじゃあないか。それなのに勝手にいなくなりやがって……」

朱里は寂しそうに俺の事を見つめていた。

「海……急なことで信じれないかもしれないけど、これは全て事実よ。」

そしてこの八坂市に纏わる伝説は今何者かによって再び再現されようとしているの」

「門を開こうつての？」

「ええ……門の中には何があるのか知らないわ……」

しかし開いた反動で強大な力が、こちらの世界に流れ込むような恐ろしい出来事がある以上、決して開けてはいけない」

「昔は完全に開く前に閉じられたのか？」

「あの門が完全に開かれるまでに数時間を要するらしい……だから、その間に故人は門を閉じたらしいわ……しかし少し開いたことで飛び出した得体の知れないものは、この地域だけではなく、他方へも被害を与えたらしいわ」

そんな門が実際にあるのかよ。

現実感が全く無い……俺は門を守る番人だと言われてもどうしたらいいのかも分からない。

それよりも身近に存在する浅木真希が浮かばれないという思いだけは強く残っていた。

「ちくしょう……何だつて都合よくそんな草薙の剣なんて門を開け閉めする鍵が身近に存在するんだよ……」

こんなものなければ、真希だつて死ぬことなかったじゃないか、くそ、くそ！ついこの前まで……普通に話して！俺を笑顔で見送って、またねっていつてたんだぞ。あいつの生きてきた今までつて何だつたんだよ！」

コンクリートの壁を拳で思い切り叩いた。

手はじんじんと痛んでいたが、そんなことどうでもよかった。

「そうかもしれないわ。だけど……ここで落ち込んでいる時間はないの。」

その犯人を捜さなければ、私たちの世界は失われてしまうかもしれない。

れない。

海、あなたに急にこのことを受け止めるというのは難しいわ・・・でも受け止めて！

さもないと、この世界は終わってしまうかもしれない」

朱里は俺に歩み寄ってきた。その表情は真剣そのもので、事の重大さを感じさせた。

俺だつて茶化すつもりはない、朱里が言っていることは真実だと思っっている。

しかし今の俺の何ができるんだ。

そのことばかり考えてしまう。

「俺は・・・どうしたらいい・・・」

いきなりその門を守る指名だと言われても何をすればいいのかわからない。

それに俺にはそこまで大した能力は無いんだ・・・」

つい弱音を吐いてしまった。しかし朱里はそんな俺を許さない。

「だから何だつて言うのよ！あなたにしか出来ないことがきつとあるはずなの！」

いつもの強気の朱里だった。

俺は曲がった背筋をぴんと伸ばされた。

「真希だつて、このままじゃ決して浮かばれない。」

彼女を救う意味でもあなたが動かなくては……」

正論だ。

ここで何もしないのは見殺しのようなものだ。

俺には人と違う能力がある、ならそれを利用しないでどうするんだ。

今がその時だ。

俺は自分自身の能力を十分に使うときが来たんだ。

「そうだな……俺は自分にできることをする」

生気が抜けた表情から一変して、何としても犯人を捕まえてやるうと意欲が湧いてきた。

「そうだ腐っている時間は無いんだ。俺が出来ることをしなければ真希に悪い。」

俺の事を見抜き、憧れ、好きでいてくれた彼女に……

「じゃあ、今夜真希の家の前に来て」

朱里はそれだけ言うと雨の降る中、傘も差さずに去っていった。

「朱里の家だと？」

俺には意味が分からなかった。警察が大量にいるあの場所へなぜ

行くのか。

しかし今は朱里の言葉に従うしかない。

朱里は去り際に一言ぽつりと話した。

「ねえ・・・私変かな？」

俺の顔を見ることもなく背中越しに話した。それはどこか寂しさを感じさせた。

俺には分かっていた。朱里は辛いことがあってもそれを顔に出さない。

小さい頃泣き虫だった自分を変えたいと思い続けたせいかもしれないが、非情な訳ではないのだ。

それが分かっているから朱里の顔を見ることをしなかった。

きつと泣いているのだから。

「そんなことはない」

その言葉を聞くと安心したように朱里は姿を消した。

そして俺は朱里が立ち去ってから数分後にその場を後にした。

31話

夜になると雨は上がっていた。

月明かりが眩しいぐらいに夜道を照らしていて街灯の無い場所でも明るかった。

時刻は夜十時。

俺は夜道を黙々と歩いて、真希の家を目指した。

「本当に・・・殺されたんだよな」

未だに実感は湧かない。テレビという物体を通して知った出来事はリアルではないからだ。

真希の家に着くと数人の警官の姿が見えた。

やはりな・・・

事件が起こってまだ一日と経っていない。

なら警官が近辺を調べたり、警護しているのは当然だ。

朱里はここで一体何をしようとしているんだ？

そうこうしている内に朱里は姿を現した。

「朱里・・・こんなに警官がいる中で何をしようっていうんだ？」

「至ってシンプルなことよ……ここで犯人の手がかりを捜すの……」

「は？」

「それしか先に進む方法がないからね」

「おい……こんなに警官がいるのに俺たち素人が入ったら、怒られるだろう？」

周囲の状況を見る限り俺らが入り込む隙間はどこにもない。

「そんなの簡単よ……」

朱里は大したことないといった様子で、一人の警官に近寄った。

そして少し話しをすると、警官は頷き周囲の警備体制を解いてそこから立ち去った。

何が起こっている？

俺には目の前の光景が嘘みたいに思えた。

普通に考えても小娘の言うことを警官が素直に聞くはずが無い。

「これで大丈夫よ……」

そう言って家へと手招きした。

俺は腑に落ちない様子で朱里の後を追った。

「おい・・・朱里・・・」

俺は朱里に小走りで近づいて話しかけた。

「何をしたんだ？」

そんな問いに朱里はそっけなく答えた。

「千草家は代々この地に根付く守護人よ。

警察との関係も相当深いので・・・だから、今回の件は私たちにも知る権利があるから従ってくれるの」

なるほど、歴史上の癒着って訳か。

俺たちは玄関の前にたどり着いた。そして誰もいない家の中へと足を踏み入れた。

どくん・・・

「く・・・」

俺の四肢は何かに縛られたように身動きが取れなかった。

ここに残る不穏な空気に取り込まれてしまったのか、気分が悪くなり足元がふらついた。

「大丈夫？海……」

朱里は心配して俺のほうを見た。

「ああ……少し、この家に流れる雰囲気飲まれた」

人が三人も死んでいるんだ。普通のはずが無い。

俺は体を必死に動かすと、恐る恐る部屋の中へと進んでいった。

リビングに通じるドアをゆっくりと開ける。

まず目に飛び込んできたのは、乾いた血の跡があちこちに残っているフローリングの床だ。

死体は回収されていたが、現場はそのままの状態に残されていた。

部屋の中はめちゃくちゃだった。

争った形跡もあるが、強盗に見せるためにやったのだろうか、引き出しが全て開けられていた。

涙が出そうだった。

惨劇の状態が、俺には想像ではあったが頭の中に流れ込む。

「ここで……両親が殺されたのか」

「そつみたいね」

俺は部屋の隅々を細かく見回し、違和感が無いか探した。

テーブルに並ぶコーヒークップ、開けられた引き出し、散らかったチラシ類、食器、などなど……

全てを脳裏に焼き付けた。

犯人の足跡らしきものはどこにも残っていないかった。

そしてそのまま二階へと上がっていった。

ここは俺もよく知る真希の部屋だ。

ドアを開けると、やはり下と同じような荒らされた血にまみれた凄惨な光景だ。

「くそ……」

つくづく嫌な気分になる。

どう見てもここで真希が殺されている。

犯人はここまで真希を追い詰めて、殺したのか？

逃げようとする奴を……

部屋を見回すと、引き出しは全て開けられ衣類があちこちに散らかっていた。

その部屋以外の部屋を見たが、同じように引き出しは全て開けら

れていた。

明らかに強盗を思わせた犯行だ。

しかもすっかり通帳と現金が抜かれていた。

本来なら警察も普通の強盗と判断するだろう。

しかし俺たちがおかしいと思ったのは、草薙の剣だけが盗まれていることだった。

あれは一階の陶芸品や骨董品の中に飾られている一品だった。

他の物は一切手付かずなのにあれだけが無くなっていた。

陶芸品や骨董品の類は盗んで売ると足がつきやすい。

それによほどの目利きが出来なければ価値があるのかも分かりはしない。

迅速に行動しなくてはならない状況で、これだけを盗むというのはおかしいのだ・・・

それから俺たちは全ての部屋を回ってみた。

俺は回っていくたびに少しずつではあるが情報を得ることができた。

32話

「どう？海・・・何か分かった？」

「ああ・・・だいぶな」

僅かな隙も見逃すことなく全てを観察した。

洞察力が俺の最大の能力ならこれをフルに活用する。

「何が分かったの？」

朱里は詰め寄ってきた。

「まず・・・顔見知りの奴だな。下のリビングにあったコーヒーカー
ップ、四人分だった。」

そして足跡が一切無い。もし強盗の犯行なら逃げやすくするために靴は脱がないはずだ。

靴を脱いで入ったってことは、顔見知りしか有り得ない。そして・・・」

俺は二階の真希の部屋へと移動した。

「ここが気になる。他の部屋とは違って、余分に散らかされているんだ・・・」

もしも強盗に見せかけののなら引き出しを開けて現金やら通帳を奪えばいい。

なのにこの部屋だけは衣類までも散らかしている。

真希はまめに部屋を片付けると俺に話していたから、こんなに衣

類やら雑貨を訳もなく散らかすのはおかしいんだ」

「どづいこと?」

「犯人が何かを落としたのかもしれない。

例えば自分の服のボタンがもみ合っているうちに落ちたとか・・・

服の一部を破られたか、それとも・・・」

俺はソファの下や机の下を見てみた。

そしてベッドの下にそれは落ちていた。

「校章を落としたかだ・・・」

その校章は新しい血にまみれていた。

「明らかに真希のものではない・・・

真希が休みの夜遅くに制服のまま家にいるはずがないからだ。

だとすれば、こいつがこの家に来て真希を殺し返り血を浴びた校章をここで落としたんだ。

それに気がついたときに焦って真希の制服や服を散らかすことで隠そうとしたんだ・・・」

「その校章は・・・」

朱里が驚いた様子で校章を指差した。

「ああ・・・俺たちの学校だな」

そう、俺たちの学校の校章がそこにあった。

「男か女かは特定できるの？」

「いや・・・そこまでは無理だ。しかし相手に躊躇は感じられない。殺すことにためらいがなかったようだ・・・」

まるで初めから殺すことが目的だったように淡々と作業をこなしていったんだ」

「どうしてそういう風に思うの？」

「両親が倒れている距離が近すぎる・・・一人を襲えば、すぐにもう一人は気がつく。」

それが同時に二人を刺し殺しているという事はよほど手際がいい・・・」

それに首を確実に差していることから躊躇がない。

慣れない奴なら普通、腹を刺すものだ。首はためらってしまっ・・・」

俺は冷静に分析した。

「じゃあ、真希はなぜ二階で？」

「座っていた位置が幸いしたのかもしれない。」

あの四角いテーブルで犯人の向かい側に座っていたんだらう。

それに一度に三人を瞬殺するのは刃物では無理だ。

真希は刺された二人を見てすぐに逃げたんだらう・・・」

しかし、奴は・・・追い詰めて真希を・・・何度も刺して殺したんだ・・・」

あちこちに飛び散る血痕、這って歩いたような跡が全てを物語っていた。

俺は言葉を詰まらせながら話した。

「大丈夫？海……」

朱里も寂しい表情になっていた。

「だから、一刻も早くこの犯人を捕まえる。俺自身の能力を生かしてな……」

俺は誓った。真希を殺した奴を許さない。必ずこの手で裁いてやる……

「海、その洞察力があなたの能力なの？」

朱里は一連の俺の推理と観察力を見てそう聞いてきた。

俺も今更隠す必要は無いと思い、ああ、と答えた。

「凄いよ……警察だってまだそこまで分からないのに……」

朱里は俺の事を褒めてくれた。しかし俺は嬉しくなかった。

「こんなの……その門とやらを守るための力にはならないだろ？」

しかし朱里は俺をかばった。

「なるよ！だってこの犯人をすぐに捕まえられれば全て解決になるもの。世界は滅びないのよ。」

そんな自分を責めないで、もっと自分の可能性を信じてよ……」

朱里はいい奴だ。俺がくじけそうになっているのを見抜いている。

俺だってここでふて腐れている訳にはいかない。

自ら気持ちを奮い立たせ先を見ることに決めた。

「ああ、やれることは全てやる……」

そう言って惨劇の場所を後にした。

33話

翌日

昨日と同じように雨は激しく降り注いでいた。

まるで真希が無念の死を訴えて泣いているかのように……

俺は学校に呼び出された。いや、全員が呼び出された。

浅木真希が殺されたということで、緊急集会が開かれた。

昨日の今日で頭の中の整理はつかなかった。

しかし俺の周りが急速に変化しているのは事実なので、受け止めるしかなかった。

俺は今まで受身だった。

何一つ自分から進まない……

そんな自分を変えたかった。

学校に着くと体育館で全校生徒が集まっていた。

雨が体育館の屋根を打つ音が空しく響いていた。そしてすすりなく声があちこちから聞こえてきた。

校長が簡単な説明と今後の対応を話し、黙祷と大きな声で言うて

目を瞑らせた。

この中に犯人がいる・・・校章は生徒だけではない。先生も持っているんだ。

ちくしょう・・・誰なんだ？

真希は何も悪くない。なのに殺された。それも追い詰められて・・・

俺は他の生徒とは違う気持ちでこの集会に参加し、ただ一人拳を握り締めていた。

全校集会は二十分程度で終わり次は各クラスで説明が行われた。

冬香はプリントを全員に配ると注意事項を話した。

「そう言うことで・・・犯人が捕まるまでの間はなるべく一人で行動しない、

家には鍵を掛ける、暗い場所や路地を歩かない・・・当然夜遊びは禁止だ、分かったか？」

クラスは静まり返っていた。俺の席の隣の席には一輪の花を挿した花瓶が置いてあった。

その花が風にゆらゆらと揺れているのを俺はただ黙って眺めていた。

「それじゃ、解散！・・・あ、そうそう、部活も落ち着くまでは禁止だからな」

がたがたと椅子から立ち上がる音がする。

みんなはそれぞれ帰る支度を整えていた。すると京が俺のところ
に近づいてきた。

「海……」

京も何を話していいのか分からず、言葉を詰まらせた。

しかしそれは俺も同じだった。

「悪い……今はそっとしておいてくれ」

そう言うしかなかった。

京は無理にでも明るく振舞おうとするだろう。だが、俺はそんな
姿を見ているだけで辛くなる。

「まあ……そうだろうな」

京も俺の気持ちを分かってくれたみたいで、素直に立ち去って
くれた。

さて……俺は手がかりを何か探さなくては。犯人が今日学校に
出ているとは限らない。

しかし何でもいいから手がかりが欲しかった。

一人最後まで教室に残っていた。

時刻は一時を回っていた。

俺は昨日の真希の家での出来事を一つ一つ頭の中で整理してみた。

しかし犯人に結びつくものが何一つ思い浮かばない、せめて男か女が分ければ……

そんな風に頭を抱えていると背後から声がした。

「おい……海……」

低い男の声だった。

俺は声のする方を振り返ると、驚いた。

何故こいつがここに……

「話がある、付いて来い」

声の主は、あのいわく付きの立木蓮だった。

人気の無い教室で声を掛けられるとは思わなかったが、俺は黙って従うしかなかった。

そのまま蓮の後を付いていった。

どこに連れて行く気だ？まさか……俺のことを気に食わないとかで殴る気か？

いろんな思いを抱きながら歩いていると、蓮は視聴覚室の前で立ち止まった。

「ここでいいか・・・」

そう言つと俺を中へ入るように言った。

薄暗い部屋、中には誰もいない。

雨の音だけが聞こえていた。

何をされるのだろうか？そのことだけが頭の中を巡っていた。

すると蓮はぼそつと口を開いた。

「昨日の事件のことだが・・・」

突然その話を持ち出してくるとは思わなかったので、俺は一瞬身構えてしまった。

「犯人のめぼしはついたのか？」

いきなり何でそんなことを蓮が聞いてくるのかは分からなかった。

しかしここは適当にはぐらかしておいたほうがいいだろう。

「何を言ってるんですか？そんなの俺が知るはずもないです」

そう言つと蓮は険しい表情になった。

「俺が何も知らないとでも？」

ぞくつ・・・

蓮の目が一瞬赤くなったような気がした。

まるで俺は蛇に睨まれた蛙のように四肢の動きを封じられた。

「な・・・どういふことですか？」

俺は必死に抵抗しようと身構えた。

まさか、犯人はこいつなのか？

だとしたらどうして？真希とは面識もないはずだ・・・

34話

いろいろなことを考えていると、蓮は肩の力を抜いて、

「隠す必要はない。お前が護門徒の後継者であることは事前を知っている。」

だから今回の一件も耳に入っているし、何よりも犯人に心当たりがある……」

「え？」

俺の体の力までも抜けた。

「門のことは俺も知っている……それにあの家に鍵があったこともな。」

もし犯人があれを盗むことが目的だとしたら、一人だけ当てはまる人物がいる……」

蓮までもが俺の存在を知り、あの門の事について知っていた。

身近な人物にここまで知っている人間がいるとなると、これは仕組まれた出来事のように思えてくる。

自分の事はさておいて、まずは真希の家を襲った犯人についてだ。

「それで……誰なんです？」

問い詰めると蓮はまあ、落ち着けと言わんばかりに胸ポケットから煙草をもそもぞ取り出すと火をつけた。

大きく吸い込んでから、ふうつと吐き出すとゆっくりと話した。

「三条織斗という男だ・・・奴が絡んでいることは間違いない」

誰だ、聞いたこともない名前だ。

「奴は表立って行動はしない・・・そして駒のように操られている人間が必ず側にいるはずだ」

はつきりとそう言いきった。

俺にはどこにその根拠があるのか分からなかった。

「どうして、そう思うんです?」

「あいつは・・・昔から門を開けることに執着していたからな。そして裏八鬼を抜ける時仲間の一人を殺している・・・」

さつきから分からない言葉が並べられ、整理がつかなくなってきた。

「すみません・・・分かりやすく説明してもらってもいいですか?」

それを聞くと蓮はきよとんとした顔をした。

「お前・・・裏八鬼も知らないのか?」

「はぁ・・・そうですが・・・」

「そうか・・・悪かったな・・・いきなりこの話をしてもちんぷんかんぷんだな。」

なら順序だつて説明する」

そうしてもらいたい。俺は黙つて蓮の話を聞いていた。

「そもそもこの国には昔から門が存在した。

それは異界へと？がる門・・・この世に多大な影響を示すものだ」

そこまでは朱里の話で知っている。

「そして護門徒、これがその門を守る番人として神徒協会によって作られ世界各国へ散らばらされた・・・」

その門が完全に開かれないうに封じることがを使命として・・・」

「つてことは、門は世界各国に存在するんですか？」

「ああ・・・最低でも七つ・・・この世界と深く係わっている。

その門が開く条件はそれぞれ異なり世界にその場所に及ぼす影響も異なる。」

例えば人間が作れもしないような建造物が存在するよな・・・

あれもその門の影響だと言われている。

古から話されているのは異界の門から来たものは特殊な能力者だということだ。

そしてその彼らがこの地を訪れたときに様々な足跡を残した・・・

「

「文明やら、進化という形で？」

「そうだ。彼らの世界には我々に無いものを持っている。しかし同

時に恐怖もある。

この世界が取り込まれるのではないかというな。

門の開放状態が完全になったのは、前例がないようだ・・・

恐怖を感じた人間はすぐに何らかの方法で閉じようとしたからだ・

・

だが、今回そんなことを何とも思わない人間が現れた」

「それが、三条織斗？その人は・・・何者なんです？」

「奴は裏八鬼のメンバーの一人だ」

「うら・・・はちき？」

「日本には表八鬼という組織が昔から存在したんだ。

神徒協会なんてものが出来上がるずっと前から・・・

しかも、あいつらは表八鬼を眼の敵にしているようだが、俺だつて護門徒なんか信用していない。

そもそもあの門を最初に封印したのは表八鬼の開祖なんだからな」

どうやら神徒協会と表八鬼とは仲がよろしくないらしい。

しかし話を聞く限りでは納得できる。

昔から日本に存在した表八鬼は、後に立ち上げられた神徒協会に門の管理を横取りされたのだから怒るのは当然だ。

「門がこの国に存在したのは今から千五百年ほど前らしい。

そして八岐大蛇伝説に纏わる出来事が起こった。

山は八つに分断されそれぞれが名前を持つ坂となったのが、この八坂市・・・

そして表八鬼が作られたのもその坂を守ることから由来する。門の番人として使命を果たし、それぞれが子孫に己の宿命を託していった。

それが表八鬼・・・しかしそれとは違った活動をするのが裏八鬼なんだ」

表もあれば裏があるのが当然だ。

蓮は煙草を一本吸い終わると、足でもみ消した。

「裏八鬼はこの国の不穏分子を排除する組織だ。

いつの時代でも権力者は圧倒的な力を欲しがる、それがこの世を滅ぼしかねないものだとしてもな・・・

それを未然に防ぐためにも門の力を利用するものを影で排除する役目だったのが裏八鬼だ。

膿を出すような仕事だから暗殺活動がほとんどだ・・・そして彼らはみんな表八鬼の兄弟だった。

運命共同体って奴か？表と裏の兄弟で秘密を共有することが目的だったらしい・・・」

蓮はぎりつと歯を食いしばった。そしてまたもう一本の煙草に火を付けた。

「それで・・・三条織斗だが・・・奴は裏八鬼のメンバーであり、その類稀なる才能で数年前に仲間を死に追いやった・・・

俺の父親をな！」

「それって・・・」

「ああ、俺の父親も裏八鬼のメンバーで俺はその後継者ってところだ」

「じゃあ、表八鬼には叔父さんか叔母さんがいるってことですか？」

「ああ・・・そして三条織斗は表にもいる自分の弟も殺しやがった・
・俺の父親を使つてな！」

あいつの能力は呪術、洗脳の類だ。

俺の父親をじわじわと廃人同然にした後に実の兄弟を殺しに向かわせ共倒れさせやがった」

蓮は吸っていた煙草のフィルターを噛み千切った。

そしてぺっと吐き出した。

35話

「今思い出しても胸糞が悪くなる・・・父親は俺の事が分からなくなっていた。」

脳を完全にやられていたからな・・・そして死に際に何度も何度も、うわ言のように織斗の名を連呼していた」

蓮は火の付いていた煙草をもみ消した。

「すぐに表と裏の八鬼は集められ、会議を開いたそうだ。」

三条織斗が謀反を起こしたと。そしてすぐに捕獲せよとの指令が下されたそうだが・・・

追った奴らの行方は分からなくなっている」

「その三条織斗って人の目的がなぜその門だと思うんです？」

「父親の日記だ・・・死んだ後に見つけたものだったが、そこには狂っていく友人の姿として三条織斗の名が書いてあった。」

『彼は破滅を望んでいる・・・この世界が変わる姿、世界の終焉を見たいらしい。』

その欲望は計り知れず、日に日に大きくなっていくのが分かる・・・
彼は近いうちに門を完全に開くつもりだ。それなら私は彼を止めなければならぬ』とな・・・

あいつはいかれた破滅願望の持ち主なんだ」

それで蓮は今回の一件の出来事をすぐに予想できたのだということが分かった。

「門を開ける鍵が必要と判断した今、奴は盗ませたんだ・・・」

そこだ、そこが聞いたかった。誰が浅木真希を殺したんだ？

「奴は自分では行動しない。だから奴の手足となる存在が動いたんだ・・・」

「それで、誰なんです？」

俺は高鳴る気持ちを抑えられなかった。その名を聞いたら、どうなるか分からなかった。

しかし蓮はその名を話すことはなかった。

「誰とは分からないんだ・・・」

「え？」

拍子抜けした。そこが肝心なのに、俺の怒りはすつと引けた。

「しかし、特徴はある。三糸織斗に操られた人間は必ず右腕に契約の証を残しているんだ。

俺の父親も右腕に見慣れない呪文のようなあざが残っていたから・・・」

これはかなり有力な手がかりだ。幸い今は夏服シーズン。

この学校の奴と断定できている今、右腕を見ればいいのだ・・・

こんな暑い時期に長袖を着ていればかえって怪しい。

しかし・・・犯人を断定した所でどうすればいいんだ？相手は操られている・・・

それを責めるのか？俺が裁くのか？

裁くことはできないのではないか？

俺はまともな考えが出来なくなっていた。

「三条織斗に操られたら、もう後戻りはできない・・・お前がそいつを救うことはできない。」

なら、いつそのこと殺してやった方がいいさ・・・」

まるで俺の心の葛藤を見透かすかのように蓮は話した。

「お前も護門徒の後継者なら、特殊な能力を持っているはずだ。それを今使う時がきた。迷うことは無い・・・俺も同類だからな」

「それって・・・」

「俺も能力者だ・・・屋上の喧嘩見てたんだろ？なら分かりやすいはずだ。」

俺の身体能力は人を超えている。いや、人より速く動ける言っただ方がいいか。

それが俺の能力だからな。筋力は並みの人間と変わらない。

しかし動体視力と反応速度、瞬発力が普通じゃないんだ。

もしも俺がナイフを持ったとしたらどんなに力自慢の奴でも、刀の達人でも一瞬で殺す自信はある・・・」

ぞくり・・・

二度目の悪寒。蓮の眼は睨まれただけで竦んでしまいそうになる。

流石に暗殺専門の裏八鬼の後継者だ。人を殺める能力、素質が十分だ。

しかしなぜ、俺や蓮のような人間はこんな不思議な力があるんだ？

そこが疑問だった。

「なあ、海・・・もしもこの先、三条織斗に関する事で何か分かったら俺に教えてくれ。」

俺は・・・奴を殺さなければならぬ」

「それは・・・その・・・お父さんの敵ということですか？」

俺は恐る恐る聞いてみた。

「初めはそうだったのかも知れない。しかし奴の行動を見ているだけで個人的に殺したくなってきた・・・」

自分は表に出ないで人を操り、欲望を満たそうとしてやがる。最低のクズ野郎だ・・・

神徒協会は傍観者気取りで、まだ動いてないようだが、表、裏八鬼は奴を殺すこと前提で動いている・・・

あいつに逃げ道はない！」

蓮は軽々しく殺すという言葉を口にしたが、彼がその言葉を口に

しても違和感はなかった。

彼はきつとその三条織斗と出会うことがあったならためらいもなく殺すだろう。

そんな雰囲気伝わってきた。

「お前はまだ神徒協会と会っていないようだな」

「え？」

「お前の父親は護門徒だろ？ならその後継者であるお前も必然と係わるはずだ・・・」

だが、その様子だとまだ真っ白な状態で何も知らないようだ」

確かに俺もそんなことは朱里の口から教えてもらうまで知らなかった。

それに俺の父さんはそのことに一度も触れなかった。何故話してくれなかったのだろう。

今思えば謎だらけの父親だった。

「俺は・・・その・・・全く分からないんです！護門徒っていうのは・・・何なんですか？」

俺、父さんのことまるで分からなくて、三年前からいきなりいなくなるし・・・

俺がその後継者だとか言われても、ぴんとこないんです・・・」

「悪いが、神徒協会のやり方は俺も知らない。

しかし、頑なに自分の話をしなかつたことは、お前の父親はお前には護門徒になってほしくなかつたのかもな・・・

護門徒の息子がそのまま役職を受け継ぐとも限らないしな。

だが、お前の肉体はすでに特異な能力が宿されている。それをどうするかはお前次第だ。

父親の跡を継ぎたいのならそうすればいい。そうでもないならその能力は使わない方が身のためだ。

世間体って奴があるだろ？見られたら最後、誰も近寄らなくなるか利用されるかだ・・・神徒協会だつて黙って野放しにしない」

俺は今の自分がどうしたらいいのか正直分からなくなっていた。

しかしこれだけはやり遂げなければと思う気持ちがあった。

「今の自分がどうあるかは未だに漂っていて分からない・・・でも、浅木真希を殺した奴だけは許せない！」

それだけは・・・俺が護門徒とか関係なく犯人を見つける」

蓮に負けない気迫で俺は誓った。

すると蓮もふふつと笑顔を見せた。

「それでいい・・・今は無駄なことを考えるな。お前が護門徒の後継者であるうがなかるうがそんなこと関係ない。シンプルに考えたほうが良いこともある・・・」

俺に今すべきことは見つかった。しかし未だに強い覚悟が足りなかった。

まだ生ぬるい環境に浸かっているのか、俺は？

いい加減現実を見たらどうなんだ！

そう自分に言い聞かせていた。

しかしだからといって俺が今日から父親の跡を継ぐんだ。なんて割り切れるはずもない。

朱里も蓮もすでにこの事件の輪の中にいる。だが・・・俺は・・・

自己嫌悪に陥った。

いや、そんなことばかり考えても駄目だ。今からこの輪の中に自ら入るんだ。

自分の意思で・・・そうだ、俺は自分の運命から目を背けてはいけないんだ。

俺の心は次第に現実に向けて動き始めた。

人に流される過去とは決別して、今度は自分足で歩まなくてはならないと感じた。

まだ先は見えない。でもそれでいいんだ。

「さて・・・これからのことだが、お前は今回の犯人を突き止めるんだな。

なら、俺は三条織斗の痕跡を探す・・・関係者を探せば俺とお前・・・まだ出会うことになるだろう。

もしも三条織斗に関係する情報を手にしたらここに電話をくれ・・・」

そう言うとメモ用紙を渡された。

見ると、そこには蓮の携帯番号らしきものが書かれていた。

「分かりました」

俺はそのメモ用紙をポケットにしまいこんだ。

蓮がそのまま教室を出ようとした時、何かを思い出したように足を止めた。

「そうだ・・・海・・・お前は今まで人と殺し合いをしたことはないだろう？」

だから、これだけは言っておく・・・この先どんな相手が目の前に立ちふさがっても躊躇うな・・・

これは宿命だと思え！後道を作るわけじゃないが、今回の件で絡んでいる人間が死んだとしてもお前は法的に処罰はされない・・・なぜなら、この表、裏八鬼、そして神徒協会に係わる人間は全て

法で裁けないんだ・・・

それだけあの門は影響力がある。

しかし三条織斗はそんなことお構いなしに無関係の人間までも巻き込む・・・だから操られた人間は殺して救ってやってくれ」

まさか・・・

「蓮先輩・・・お父さんを？」

その質問に蓮は答えなかった。しかし俯いて悲しい表情を見せただけで俺は理解した。

「忠告ありがとうございます。俺は・・・俺なりにこの先を見ていきます。蓮先輩の望む結果になるかは分かりませんが精一杯やるつもりです」

「そうか・・・その方がお前らしいな」

蓮はそのまま静かに教室を後にした。

俺は今後のことを考えようと、一人暗い部屋に残っていた。

37話

夏休み十三日目

あの事件から三日が経った。

未だに進展は無かった。しかし今日は夏期講習の日で学校に登校する日だった。

今日こそは犯人の手がかりを手に入れようと心に誓った。

そして俺は自分の能力が日に日に強くなっているのも感じていた。

「さて……」

支度を済ませるといつものように学校を目指して家を出た。

犯人を見つけたら俺はどうする？

そのことばかりが頭の中にあった。

しかしごちゃごちゃ考えても始まらない、なるようになるかと思わなかった。

教室に入ると、クラスのみんなはだいぶ落ち着きを取り戻していた。

そんなものか……

人一人死んだとしても、群集の中ではそんなのは時間と共に薄れていく……

別にその場の人間が悪いと言う訳ではない。

ただ、そのクラスの中を見た瞬間に俺は悲しくなってしまったからだ。

だが……ここで腐っていても何も進まない。

俺は早速行動に移った。

クラスの全員の腕を見て回る。

右腕を確認したが誰も隠したりしている様子は無かった。

ということは、うちのクラスではないな。

そう判断して、他のクラスを見て回ることにした。

俺は同級生に犯人がいるのではないかと思っていた。

浅木真希を知る人物でなければ、居場所や行動パターン、そして顔見知りのはずがない。

そして何よりも真希は部活をしていなかった。だから先輩も後輩も付き合えないのだ。

俺は休み時間を利用して廊下を歩きながら何気なく他のクラスを覗き込んだ。

ちらつと見ただけでは怪しい人物など目に留まるはずも無い、それらしい人物はいなかったので一旦クラスに引き返すことにした。

それから、とにかく目に付く奴をチェックしつつ全体を見回した。

時間が経つのはあっという間で、講習は終わってしまった。おかしい……誰もそれらしい人物が見当たらない。

となると今日休んでいる奴が怪しいことになる。

夏期講習なんて全員が出るものではない。進学を目的としている奴しかでない。実際に京も進学をする気がないので、姿を現さなかった。

登校しなかった生徒は二十三人、全体の十分の一の数か……そいつらの素性を洗っておかなくてはな。

俺は各クラスで聞き込みをした。

来ていない人物の名前やら何をしているのかを……

そこで分かったのは、いない人間の半分は長期旅行に出ていることだった。

残りは家にいたりバイトをしたり様々だった。

俺に今からできることは、その残りの人物の元を訪れるしかなかった。

夏休みはまだまだある・・・数日もあれば見つかるだろう。

そう思って次の日から全員の家やらバイト先を見て回ることにした。

夏休み十六日目

夏期講習を受けなかった二十三人その内十三人は旅行に出掛けていたために事件当日市内にいなかった。

そして残りの十人の内九人は、この三日歩きまわって右腕を確認したが怪しい様子は無かった。

残る一人は京だった・・・しかし期待はできない。というか、あいつが犯人のはずはないと思っていた。

「振り出しか・・・」

そう思っていると、携帯が鳴った。

誰だ？

着信の名前を見ると、京だった。

何というタイミングの良さだ。俺はすぐに電話に出た。

「元気か？」

相変わらずの声のトーンに俺は安心した。

「ああ……」

「あれから時間も経った……お前も少しは落ち着いたか？」

真希の死から一週間が経とうとしていた。俺も心の整理はある程度ついていた。

「そうだな……悪かったな。お前とも連絡取らなくて……」

京と話すのも五日ぶりだった。

いくらか余裕のできた俺もたわいの無い話ぐらいはできた。

少しの間学校の様子などの話をする、京が本題を切り出した。

「なあ……夜、出られるか？お前とちょっと話したいんだ……」

どうしたんだ？

「電話じゃ駄目なのか？」

「その……直接話したいんだ……」

「何だ？悩み事か？」

「……まあそんなとこだ……」

「意外だな。お前の口から悩みだなんて出ると思わなかったよ」

俺は何も考えないで皮肉っぽく話していた。すると電話口から小さな声で何かが聞こえていた。

「う……体が……く……」

それはよく聞き取れなかった。

「どうした？」

電話口で何かあったのか？

「何でもない……公園で八時に待ってるからな」

それだけ言うと電話をぶつっと切った。

「全く……何から何まで急な奴だ」

俺は仕方の無い奴と思いながらも京が自分を頼ってくれるのは嫌ではなかった。

高校で唯一の友達だし、今まで一緒に過ごしていて楽しかった。

これからも長い付き合いになるであろう人物の一人には間違いなかったから、悪い気はしなかった。

この数日の気晴らしも兼ねて京と話すのも悪くない。そこで犯人に繋がる手がかりも得られるかもしれないしな。

それから約束の八時まで時間を潰すことにした。

38話

夜の公園は二度目だ。

尾上みゆと名乗る不思議な人物に会ってから数日しか経たない今、友人と会うことになるうとは思っても見なかった。

夜風はまだ生ぬるい。

俺は公園のベンチに座っていた。

「遅いな・・・京の奴・・・」

するとひたひたと近づいてくる足音が聞こえてきた。

後ろを振り向くとそこには京の姿があった。

「海・・・」

どこか元気がなさそうな様子でこっちを見た。

薄暗い公園の中では京の顔色までは分からなかったが、表情が暗いだけは分かった。

「まあ・・・座れよ」

俺はそう言って京を隣に座らせた。

「・・・」

普段は自分から切り出す京のくせに、それも無かった。

「何かあったのか？いつものお前らしくないぞ？」

痺れを切らして俺から聞いてしまった。

すると京は悩んでいる様子で、頭の中で整理できない様子だった。

「その・・・あの・・・」

電話の時の口調とは明らかに違う。

どうしたんだ？

俺の不安は募るばかりだった。

「もしも・・・もしも・・・医者に・・・治せないような病にかか
つたらどうする？」

「え？」

「か・・・体が・・・自分の意思で動かせなくなるような病だ・・・」

意味が分からない。

京は病気になるってしまったと言っても言うのか。

「お前・・・どこが悪くなったのか？」

「違う・・・違うんだ・・・俺は・・・」

京は苦しくなってきたみたいで、両肩を押さえてぶるぶる震えていた。

「病院には行ったのか？」

「い・・・行ってない・・・」

まずいな。京の様子を見ただけでも体の状態が悪いことは分かる。

「一緒に行くか？」

ひょっとしたら病名を知るのが怖くていけないのかもしれないと思っただ。

しかし京はそれを頑なに拒否した。

「いや・・・いいんだ・・・治る方法も聞いている・・・」

聞いている？

治る方法も、と言ったぞ、今。なら・・・誰かに会っているということだ。

周りの空気が一変する。

京の体の震えが止まると、今まで薄暗くて見えなかった右腕が少しずつはっきりと見えた。

そんな・・・馬鹿な・・・

見たこともないような模様のあざがそこにはくつきりと刻まれていた。

「これは・・・」

言葉を失った。

そしてひきつりながら笑っている京の顔があった。

「ははは・・・どういうことか・・・俺にも分からないんだよ・・・

四日前から人格が、ころころ変わりだしたり、意識が飛ぶんだ。

まるで誰かが頭の中で話しかけているようにいつも声がする・・・

「

まさか、京は三條織斗に操られたのか？

「四日前、何があった！話せ！」

俺は興奮して京に迫った。しかし京にはその言葉は届いていない。

一点を見つめてぶつぶつと独り言を呟くだけだった。

「殺せ・・・殺せ・・・殺せば・・・俺は治る・・・治るんだ・・・

「

おい！しっかりしろ！」

俺はぐいつと京の肩を引き寄せた。

ぞく・・・

まずい！

そして次の瞬間、体が何かを感じてかその場を大きく離れた。

それと同時に空気を裂くような鋭利な音が響き渡る。

「あ・・・」

俺の服が切られていた。

咄嗟に避けなければ肉を数センチ切られて臓器がはみ出していた
だろう。

見たくはなかったが、ゆっくりと切りつけた主の方を見た。

そこには鋭い眼で睨み付ける獣のような京の姿があった。

「ぐ・・・うつつ・・・」

右手にはナイフが握られていた。

見ただけで正気ではないことは確かだった。

「ぐああああ・・・」

京は叫びだすと、躊躇うことなく俺に向かって襲い掛かってきた。

俺はいきなりのもので、体がついていかなかった。

スパッ

「くっ……」

右腕を浅く切られた。

「止める！京！」

右腕を切られた痛みよりも、友人の豹変ぶりに驚いた。

京には俺の声は届かない。

39話

「殺す・・・殺す・・・殺す・・・お前を殺せば・・・」

一直線に向かってきた。

俺は京の持つナイフの軌道を読もうとするが、友人がナイフを持っている恐怖感に気持ちが圧倒され、まともな判断ができなかった。

「あ・・・あ・・・」

ただ後ろに下がることしかできず、慌てていたので足がもつれてしりもちをついた。

京は遠慮などする気はなかった。

俺との距離をどんどん詰めて迫ってきた。

「殺す・・・殺す・・・殺す・・・」

同じ言葉を連呼しながら走るわけでもなく、ずりずりと近寄ってきた。

「ひっ・・・」

俺の心は飲まれそうになっていた。

ナイフで切られたことによる動揺と友人の変わった姿に衝動を受

け、心臓は握り潰されそうになっていた。

このままでは、何も出来ないでなぶり殺される……

震える手足を必死に動かし、恐怖に打ち勝とうとがんばる。

足にはどうにか力が入った。

なら立ち上がらなくては……

京はナイフを振り上げて、もう俺の正面まで来ていた。

「た……立たなくちゃ……」

かくかくいう足をどうにか動かそうとがんばった。

しかし京の足が目の前に見えたかと思うと、狂った眼と合った瞬間にナイフを振り下ろされた。

ビュオ！

風を切る鋭い音が響き渡る。

「うわぁ……」

頭の中は真っ白で、無我夢中で転がりながらその攻撃をかわした。

幸い斬りつけられることはなかったが、冷静な判断が出来ない今、

追撃されたらまず助からない。

距離を何とかして取りたかったのだが、京はそれを許さなかった。かわされたと思った瞬間にすぐにナイフを持ち替えて寝転んでいる俺を追いかけた。

「がああああああ」

獣の雄たけびにも似たような声を上げ、すさまじい勢いで突進してきた。

俺は未だに自分の本来の動きを出せていない。

京はじたばたもがいている俺の目の前に立つと頭目掛けて一直線にナイフを振り下ろした。

「くそ！」

頭を突き刺されてはまずい。咄嗟に腕を出すしかなかった。

ずん！

「ぐあああああ」

激痛が右腕に走る。

今まで生きてきた中で味わったことの無い痛みだ。

そして見たくもなかったが、腕にナイフが刺さって動かなかった。
ぼたぼたと血が垂れて顔にかかった。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

体の至る所から汗が噴き出していた。

「こ・・・殺す・・・殺す・・・殺せば俺は治る・・・治るんだ・・・」

腕にナイフを突き刺した状態でも京の言葉が変わることはなかった。

しかし刺されたことで相手の動きは止まった。

その間に幾ばくかではあったが冷静になる時間を貰った。

痛みを現実と感じた俺は、生きるか死ぬかの瀬戸際だということ
を悟った。

京を救うという考えもあった。しかし今は相手を殺らなければ、
俺が殺られてしまう状況だ。

呼吸を整え、視界を広げる。

心拍数を徐々に抑えて、頭の中もフルに回転させていった。

京はこのままでは駄目だと判断し、刺さったナイフを無理やり引

き抜いた。

「ぐあ！」

そしてそのまま胸目掛けて突き刺そうとしたが、同時に俺は京の腹に蹴りを入れた。

京の体はバランスを大きく崩し倒れた。

今だ！

俺はすぐにその場から離れて距離を取った。

先ほどとは違い視野が広くなり本来のように体が動くようになった。

深い痛みが俺の感覚を取り戻したのだ。

「なぜ・・・なぜ逃げる？」

京は獲物の俺を追いかけるゾンビのようにしつこく後を追った。

「京・・・」

冷静さを取り戻しつつあった俺にとって京の動きははっきりと見えなかった。

40話

斜めから胸を切り裂くつもりだ・・・

ナイフの軌道が全ての動きから予測され俺の脳内に映像として流れ込む。

予測された動きの裏を取るのは容易い。

すぐに体の場所を変えて、京の脇に回りこみ腕を掴んだ。

「ああ？」

京は何が起こったのか瞬時に理解できなかった。

仮にも肉体労働のバイトを日々こなしていた俺にとって京の腕を力で押さえつけるのは難しいことではなかった。

一気に腕を捻りあげてナイフを落とさせた。

そして落ちたナイフをすぐに拾い上げた。

だが、ナイフに気を取られすぎたせい、俺は胸に鋭い蹴りの一撃を食らった。

「ぐぐぐぐ・・・」

肋骨が折れたかと思った。呼吸は一瞬止まり、くの字に体が折れ曲がった。

かろうじてナイフは落とさなかった。

京はナイフが取られたと判断した今、肉弾戦で挑んできた。

うづくまる俺を見て、素早く拳を振り下ろす。

「ぐ……う……」

俺はよろよろとしながらも最小限の動きでそれをどうにかかわした。

しかし京の拳は勢いが止まることなくそのままコンクリートを打ち抜いた。

「じぎん

鈍い音と共に拳が砕けたことが分かった。

骨が拳を突き破り粉々に砕けた音だ。

それでも京が攻撃を止めることは無かった。

痛みなど関係ない。まるでとりつかれたかのように必死に俺の姿を追い続けた。

「京……」

俺は悲しくて仕方がなかった。

彼を救う方法も見当たらない、情けをかけようものならこっちは殺される……

「どうしたらいいんだよ！」

俺は理不尽な選択を迫られていた。

やっぱり殺すしかないのか？

親友を……

「止める！京！」

京が俺の言葉を聞いて正気に戻ることはなかった。

砕けた拳をお構いなしとばかりに振り回し殴りつけようとした。

俺はその一つ一つを見極め、かわして京に迫った。

「正気に戻れよ！」

声が届かないかもしれないが、必死に声を掛け続けた。

しかし京は俺の動きをしつこく追い続けるだけだ。ただひたすら餌を目指して走る獣のように。

そして話しかけることで大きな隙もできてしまった。

しまった！

京はがっちりと両腕で俺の体を掴むと肩に噛み付いてきた。

「ぐああああああ」

肉を食いちぎるつもりだった。

このままでは肉だけでは済まない。骨まで砕かれてしまう。

きっと今の京はあごが砕けたとしても構わないで俺の事を食いちぎるだろう……

だとしたら……

俺は決断したくはなかった。

あんなに明るく俺の事を真剣に考えてくれた友をこの手で……この手で殺していいのか？

歯がずぶずぶと肉に食い込む音が聞こえてくる。

圧力は次第に増して激痛が徐々に体を支配してきた。

このままでは……駄目だ……

俺は涙を流した。

そうしていいのか分からなかった。

これが正しいのかも、もちろん分からない。

中途半端な自分に嫌気もさしていた。

しかし決断するしかなかった。

「うっ……ごめんよ……京……」

悲しく呟くと、左腕に握られたナイフをゆっくりと京の首筋に持っていた。

きらりと光る冷たい凶器。

俺も狂ったのだろうか？

「俺……俺……もう……こうするしかないんだ……ごめん……ごめん……ごめん……」

涙が止まらない。

押さえきれない感情がそのまま流れ出している。

果たしてこれは下しても良い決断なのか？そんなこと俺には分からないかった。

ただ……本能に従ってしまったことだけは確かだった。

そしてふっと一呼吸おいて京の首を優しくすつと貫いた。

ずん……

鈍く重い振動と、肉を刺した感触がはっきりと腕に伝わる。それは心にまでも響いてくる。

そしてそのまま一気にナイフを引き抜いた。

ぶしゅつづつづつづつづつ

頸動脈を貫いたので血液が噴水のように首から放出される。

「あ……か……か……」

肩を噛む力が次第に緩んでいくのが分かる。

それと同時に俺の涙もどんどんあふれていった。

俺は……俺は、殺したんだ……親友を……自分が助かるために！

腕にいつまでも残る切ない感触。

「ごめん……ごめん……」

泣きながら謝り続けた。それが京に届いているのかは分からないが。

冷たくなっていく友人を胸に俺は感情の制御ができなくなった。

こんなことになるなら・・・

そのことばかりが頭を過ぎっていた。

41話

だが、そんな悲しんでいる俺の前に一人の男は嘲笑して現れた。

「くくく……はははははは……」

その甲高い声で俺は現実に無理やり引き戻された。

誰だ？

俺は暗闇から声のする方を見た。

そして俺の血液は凍りつく。

何でこいつが？

声の主は真っ直ぐ俺に向かって歩いてきた。

「なんだ、やっぱり京は役に立たなかつたかー……」

俺の予想だと、もっと深手を負わせているはずなんだけどなー……」

「こいつ……夏期講習の時には怪しい所は見えなかつたはずだ……」

「まあ……ここまで戦意喪失させられれば上出来か？なあ、海……」

その男は死んでいる京を役立たずのように罵り、物ように扱った。

そして傷ついた俺を見て喜んでいた。

俺は、ゆっくりとその男の名を口にした。

「間切・・・悠斗・・・貴様、なぜここに」

そつと京を下に寝かせ、悠斗から視線を逸らすことはしなかった。

「まさか・・・三条織斗とは、お前のことなのか？京を操っていたのも・・・」

その質問に悠斗はからからと笑った。

「何言ってるの・・・俺があの人を知らないじゃない・・・あの方は最高だよ！

俺も望む理想郷の世界を築こうとしているんだからね。

頭の堅い表八鬼とやらも裏八鬼も神徒協会もみんな滅んでしまえばいいんだ・・・

あの人を邪魔になる全てのものは」

何てことだ。

「お前！三条織斗に会ったのか？」

「当然じゃない。じゃなきゃこんな会話できないでしょ。

ねえ・・・海。お正直むかつくんだよね。

能力者のくせに日頃は何にも出来ませんって顔してさ、それでちやっかり女の子の心まで掴んでいるんだから。

ねえ、それって計算？じゃなきゃ浅木真希も千草朱里もお前なんか魅かれないでしょ・・・」

相変わらずの嫌味だ。

「知るかよ……俺は親父に言われたように目立たなくしていただけだ。」

「そんなひねくれた考えじゃない！」

「は？本当にそう思ってるの？」

「本当だ！」

「それは嘘だよ」

「何だと？」

「だって……お前は自分の能力を何かしらの形で誇示したかったんだ。」

「だから、周囲にばれないつもりで、いろいろなことを試したただろ？」

「何でそれを知っている……」

「俺は言い返せなくなっていた。」

「まずいなー……だから知られちゃうんだよ。せつかくお父さんが口を酸っぱく言ってたのにさ」

「何故だ……どうして父親の事まで知っている？」

「さあね……教えない。それよりもいいのかな。この状況？圧倒

的に俺の方が有利だけど・・・」

俺は精神も肉体も限界を超えていた。

初めての殺人、その全てで何もかもが奪い取られていた。

「右腕は動かない・・・体力は大幅に消耗している・・・俺の拳だ
けでも簡単に殴り殺せそうな感じだよ・・・」

「ふん！・・・お前みたいな取り巻きがいないと何も出来ない貧弱
野郎の拳を何発受けても何ともないさ・・・」

強がりではあったが、俺は悠斗に対して引くわけにはいかなかった。
た。

「へー・・・言うじゃない」

悠斗が笑みを浮かべて近づいてくる。

何をする気だ？

ぐいっと俺の刺された右腕を鷲掴みにした。

「ぐあああああ」

俺は痛みに耐えられず叫んでしまった。

「ははは・・・痛い？痛いんだ・・・」

悠斗は俺が痛がる姿を見てとても喜んだ。

俺はたまらず悠斗に蹴りを入れて引き剥がそうとした。

しかし悠斗はそれを読んでいたのか、俺の蹴りをするりと受け流すと、そのまま足を引っ掛けて倒した。

「く・・・」

頭から落ちることはなかったが背中を思い切り地面に打ち付けてしまった。

振動で脳が機能しない数秒の間に悠斗は俺が立ち上がれないように腹部に腰を落とした。

その動きには無駄が無かった。

今まで武道の経験もないこの男にどうしてここまでの身体能力が備わったのか不明だが、

俺は不利な状況に追い込まれていた。

悠斗は馬乗りになって嬉しそうに俺を見下す。

「駄目だなあ・・・足癖も悪いんだから。お仕置きしなくちゃ・・・」

そして拳を固めるといきなり顔面を殴った。何度も何度も・・・

がん、がん、がん・・・

「ぐふっ・・・」

拳が頬にめり込んだ。

脳が揺れるぐらいの衝撃で意識が飛びそうになった。

その衝撃で奥歯が欠け、頬の内側もざっくりと切れて口から血が出た。

こいつに・・・こんな力があつたか？

明らかに以前の悠斗ではない。

「おい・・・お前、まさか・・・浅木の家族も・・・」

確信はなかった。しかしあの時残された状況を考えれば京のはずはない・・・

家族に招き入れられるほど仲がよくないからだ。

しかし悠斗は親同士が仕事の取引相手として浅木の家に関わりがある。

「・・・なーんだ。もうばれたの？つまらないなー本当はもっと時間を稼ぎたかつただけだよ」

けるつとした表情で悠斗は答えた。そこには虫でも殺したかのように罪悪感など存在しなかった。

「ばれないようにさ、いろいろ考えたんだ。この右腕の呪印もメークで隠したし・・・

騒がれないように使い慣れないナイフ使って一瞬で殺したし・・・

・
そうそう強盗に見せかけるようにあちこちの引き出し開けたり、通帳や財布取ったり・・・

結構苦労したんだけどな・・・」

首をかしげて考えていた。

「貴様・・・」

「そうかーあの時に落とした校章かー・・・」

探せなくなつてめんどくさいって、服を散らかしたのがまずかったのか・・・

なら見つけたんだろ？ 返り血のついた校章を・・・」

ぶちん！

「悠斗おおおおおおお」

俺は下半身に力を入れ腹筋に力を入れて体を強引に起こした。

怒りということもあったが、どこからか力が湧き出てきた。

体が跳ね上がって悠斗も後ろに飛び退いた。

俺もすぐにふらふらと立ち上がった。

「驚いたな・・・どこにそんな力があるの？」

あのさー・・・海に聞くけど、護門徒ってそんなに偉いの？」

悠斗はすぐには飛び掛ってこなかった。

「さあな・・・俺も自分の父親がそんなものだったなんてついこの間に知ったばかりだ。

じゃあ、俺からも質問だ・・・お前は操られてるのか？

それとも自ら望んでその状態になったのか？

京とは違って意思がはっきりしている・・・」

「ははは・・・いい質問だ。そうだなー何て言うんだろ、成るべく

してなつた？つていうの？

それとも運命かなー・・・俺は力が欲しかった。みんながひれ伏すくらいだね。

誰も俺に逆らえない力、従うことしかできないまでの力が・・・そんな時にあの人にあつたんだ。お前たちと過ごした海での出来事からすぐにね」

「三条織斗か・・・」

「そう。あの人こそ真の指導者だよ。

だってこの世の理について分かりやすく教えてくれて、さらに力までくれるって言うんだからさ。

まあ、その条件に浅木家から草薙の剣を盗んで、皆殺しにしてくれとは言われたけどね。

くくくくく・・・願っても無いことだと思つたね！」

「な・・・なんだと？」

「だってあいつ・・・生意気じゃない。

俺のこと見下してさー親父だって対した能力もないくせに人の良い振りして家の会社乗っ取るうとしてたんだ。

そんなの許せるわけないよなー・・・だから死んで当然なんだよ」！

「執拗までに真希だけめつたざしにしたのは何故だ？」

「だって逃げるんだもん・・・それにあいつうざいことに、海くんが助けてくれるって何度も何度も言うからさー・・・」

絶望つてやつを味合わせたくなっちゃった・・・いやーやり過ぎたかな？」

頭の中が怒りで蒸発しそうになっていた。

「ちくしょおおおおお」

未だにふらつく体で悠斗目掛けて拳を握り締めて殴りかかった。

しかし予想通りではあったが、あっさりとかわされた。俺はそのまま転んでしまった。

「おいおい・・・まだ話してる途中だぞ？」

そうだ、俺が力をもらった所からだな・・・それから俺は欲望の限り暴れて良いって言われたんだ。

後始末は何とでもできるからって言っつてさ・・・

何でも表、裏八鬼、神徒協会に係わる人間は殺しても犯罪にはならないんだとさ。

だから、お前も・・・千草朱里も殺しても問題はないのさ・・・」

そう言つと、悠斗は再び俺に近づき勢い良く腹に蹴りを入れた。

「ぐは」

俺は後ろに転がるように吹き飛んだ。

そして大の字に寝転んで起き上がれなくなっていた。

体はもう限界だった。

指一つ動かす気力がない・・・

怒りだけではどうにもならなかった。

43話

情けない・・・真希を無残に殺されて何一つできないなんて。

「そうだ・・・もう一つだけ。」

京はさ・・・俺の手足になって欲しくて無理やり俺が操り人形にしたんだ。

しかも・・・お前を殺さないと呪いが解けないようにしてやったよ。

織斗さんの二番煎じだけど筋は良いだろ？」

「そ・・・そんな・・・」

「どうだ！傑作だろう？親友を操られて、その手で殺して・・・その上お前は何も出来ないんだ。」

お前とも長い付き合いだったけど、本当にそりが合わなかったな。でも大丈夫だ。これで全てが終わる・・・

お前も護門徒なんかになっていなければもつと長生きできたかも知れないな・・・」

悠斗は落ちたナイフを拾い上げ、俺にその切っ先を向けてくる。

「あ・・・が・・・」

俺はどんなにあがいても体が動かなかった。

ただ意識がはっきりしている分、これから起こる惨劇に恐怖を感じた。

今の悠斗にとって俺は幼児に与えられた気に食わない玩具のようなものだ。

無邪気に俺を壊す気だ。

「さあ・・・どんな死に方がお望みなかな？」

一気にさくつと死ぬ？それとも浅木真希のようになぶり殺しがいい？

彼女あちこち刺されてから死ぬまで三十分は掛かったよ・・・見ていて辛そうだったよ。

でもさーお前は何分で死ぬのかな？」

ナイフが首筋に当てられた。

冷たい感触が神経を尖らせる。

もう駄目かと諦めかけていたその時、誰かの気配を感じた。

キンッ！

そして何か分からないが、金属音が朦朧とする意識の中に響いた。

暗闇を走り抜ける影、それは一直線に悠斗を目掛けてぶつかっていった。

ガキイイイイン

「う……あ……」

悠斗の持つナイフが跳ね飛ばされる。

その影の持つ武器の方が明らかに硬度も重量も上回っていた。

ナイフごときではその攻撃を抑えることはできない。

悠斗はたまらず俺から退いた。

「何だ……お前は！」

悠斗は俺の目の前に立つその人物に向かって叫んだ。

誰だ……俺はその人物の脚しか見えなかった。

しかしどこかで見覚えのある……

「お前……」

証明に照らし出され悠斗も気がついた。

「千草……朱里か！」

そうだ、朱里だ。

なぜか彼女が俺の目の前に立っていた。

しかも右手には日本刀を持っていた。

「そうか・・・守護人・・・海を護りにきたのか・・・くくくく・・・」

朱里は悠斗から目を離さない。じつと睨んで相手の動きを伺っていた。

「悠斗・・・貴様・・・」

朱里は怒っていた。

「三条織斗とやはり繋がっていたか。真希はあんたが・・・それに京までも・・・」

朱里は殺意に満ちた目で悠斗を威嚇していた。

「ほう・・・怖いねー・・・何もかもお見通しって感じだ。

守護人の家にまで織斗さんの話は回っているとすると、これはますます時間が無いな。

ところで・・・お前って海とできてるのか？守護人ってのは主人を死ぬまで護り通すんだろ・・・

だからいつも一緒にいるのか？」

悠斗はけたけたと笑って朱里をはやし立てた。

「下衆が・・・」

「え？」

「お前から見たらそうかもしれない・・・」

でも・・・私は・・・例え海に好かれていなくても生涯掛けて護り通す！それが私の使命だから！」

そう言うと朱里は刀を悠斗に目掛けて構えた。

「ほらほら・・・そう気張らないでさ。もっと肩の力抜こうよー」

悠斗は相変わらずとぼけた態度のままだった。

「悠斗・・・貴様、あの門を開けることがどういふことが分かっているのか？」

「新世界・・・だろ？」

「そんなもの、まやかした！お前も織斗も間違っている・・・」

「何が？自然の摂理に従っているだけでしょ。」

そもそもこの門が開いたことで、この世界に文明を与えた訳で俺たちもその恩恵を受けて暮らしている。

なら、門が完全に開くことが自然の流れだ・・・」

「あの門が開いたことで、この世界には恩恵以外の様々な影響を与えているのが分からないのか！」

「そんなの大事の前の小事でしょ。ある程度の負荷が掛かるのは覚悟しなくちゃ・・・」

お互いの話は平行線を辿っている。

これではまとまるはずもなく、朱里は悠斗に開戦宣言をした。

44話

「お前は危険すぎる・・・
織斗に賛同して、いろんな人たちを殺め、今、私の主人に手を出そうとしている。」

だから、私は・・・お前を全力で殺す！」

朱里は大地を蹴り上げ、悠斗ととの距離を詰める。

「おお！速いな」

悠斗は空手のままだったが、至って落ち着いていた。

そして一瞬で悠斗の目の前に現れた朱里は思い切り刀で悠斗を切りつけた。

ガギイイイイイイイン

有り得ない音がした。

悠斗は武器など持っていない。しかし金属音がしている。

「悠斗・・・やはりお前・・・人間を止めたか」

朱里は悠斗のその姿を見て驚いた。

悠斗の右腕はまるで刃のように硬質化していた。その体はもはや

肉ではなかった。

液体化した金属のように滑らかで、自由自在に変化させられた。

手は剣のようになっていたり、盾になったりと様々な形を見せた。

「これは……」

俺も目を疑った。人間の体がこんな風に変化するのを見たことがなかった。

「弱い体など、とつくに捨てた……新世界で生き抜くには誰にも負けない肉体が必要なんだ。」

「この世界で誰も俺を殺すことはできない！」

悠斗の高ぶる感情は次第に自我を抑えられなくなっていた。

自己の能力に酔いながら、俺たちをつるさい虫けらでも見るように早く潰したくてうずうずしていた。

「哀れだな。上辺だけの強さを追い求めて、簡単に最強になれたと思っている……」

「なら私は、お前の次元を超えた強さをこれから見せてやるよ」

絶対の自信を持っていた悠斗にとってその言葉はカチンときたらしい。表情が引きつった。

「へー……朱里は冗談も言えるんだ。次元を超えた強さ？」

なにそれ？俺より強い奴いるはずないじゃん。

あんまり調子に乗っていると、そのきれいな体穴だらけにしちゃ

「よし」

悠斗は腕から無数の棘を出して見せた。

出したというよりは、腕という物体を棘に変化させたと言った方が正しいだろう。

その一つ一つが鋭く、突き刺されれば致命傷は免れない。

そして朱里を本気で殺そうと思っているのが、雰囲気伝わってきた。

悠斗はにやにやしながら近づいてきた。

「さあ・・・俺を楽しませてくれよ！絶望に歪んだ顔でさ・・・」

次の瞬間、悠斗の右腕から無数の針が飛び出した。

まるで逃げ道などどこにも無い針の壁だ。

朱里はその様子を見るなり剣を構えた。

独特とも言える構えで、重心を低くして両手で握った剣先を針地獄に向けた。

突きを放つのだろう。それだけは分かった。

朱里は迫り来る死の予感など感じていなかったのかもしれない。

ふっと一息すると真っ向から針に向かって剣を突いた。

「はあ！」

パン！

針と剣が交差すると朱里の剣圧に押し負けてか針の壁には大きな穴がぽっかりと空き、

無数の針がばらばらと地面に散らばった。

「な……に……」

悠斗の表情が曇った。

予想を覆される結果がそこにあつたからだ。

朱里は当然のように攻撃態勢を整えると、足に力を入れて次の動作に移った。

その跳躍力は人のものではなかった。

速さは正に閃光のようで、瞬きをした時にはすでに悠斗の脇に移動していた。

悠斗はその姿すら捉えることができない。それは俺も同じだった。

朱里はそのまま低い姿勢から伸び上がって悠斗の右腕に向かって剣を振り上げた。

ザン！

聞き慣れない金属の切れる音が聞こえたかと思うと、悠斗が絶叫した。

「ぐあああああああ」

悠斗の右腕が肩の下から綺麗に切り落とされていた。

切られた右腕は血を撒き散らしながら勢い良く遙か上空に飛んでいた。

切断箇所からは血が大量に噴き出し、悠斗は腕を押さえながら苦痛に顔を歪めていた。

「くく・・・立場逆転のようね。私に鉄が斬れないとでも思った？」

朱里は悠斗との立場を完全に逆転させ、見下した。

45話

「こんなことが・・・嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だあああああ」

悠斗は今までに無いぐらいの衝撃を受けたようだ。

「お前なんか・・・いや、誰も俺を倒せるはずがないんだあ！」

そんな事実を認めたくなかったのか、今度は左手を巨大な刃に変化させ、半狂乱になりながら朱里に向かっていった。

「真つ二つにしてやるよ！」

朱里は至って冷静だった。

やれやれ・・・といった様子で、悠斗の行動を愚かなものだと感じていた。

剣を再び構たが、両手持ちではなかった。

まるで余裕でも見せるかのように、利き腕とは反対の左手だけで剣を握っていた。

悠斗の刃は幅一メートル、長さは十メートル近くあった。

そんな馬鹿でかい刃を朱里に向かって振り下ろした。

ガキン！

朱里の背後にあった公園の中央にあった照明の柱が斬られた。

ばちばちつと火花を散らして電灯が崩れ落ちた。

そこに朱里の姿はない。

朱里はすでに悠斗の背後を取っていた。

「お前の負けだ！」

朱里は持っている剣で背中から悠斗の体を一気に突き刺した。

「ぐがあああああ」

悠斗は二度目の絶叫を上げた。

剣が貫通して胸から飛び出した。

鋼の高度を誇る悠斗の体だったが、朱里の手にかかってしまえば、まるでこんやくでも刺すかのように簡単だった。

「でかい武器は反撃に時間が掛かり、大きな隙を作る・・・お前は力に頼りすぎだ」

背後から悠斗に向かって話しかけた。

「なぜだ・・・なぜだ・・・俺が俺が負けるはずは無いんだ。」

人間を超える力を手に入れたんだ・・・」

悠斗は今の状況を信じたくなかった。現実から目を背けた様子だった。

しかしそんな悠斗を朱里は容赦なく現実に戻していく。

「あなたは・・・勝てる者にしか力を誇示できない臆病者なんだよ。罪を償いながらその身を滅ぼせ！」

その目に情けなど一切無かった。

自分は負けるのか？

悠斗の感情はごちゃごちゃに混ざり合い、不安や葛藤でいっぱいだった。

未だに心も体も人の領域を大きくはみ出した。

自らの体に迫る危険を感じていたに違いない。

それは欲望を果たせぬままこの世を去ることを予期させ、焦りばかりを募らせた。

悠斗は死を初めて実感することで、醜くのた打ち回り、子どものように駄々をこねた。

「嫌だ、嫌だ・・・そんなのは絶対嫌だ。俺は・・・俺は・・・誰にも殺されない！」

殺されないんだあ！力が・・・力がもつと欲しい。誰もがひれ伏す力だあ」

そこまで言うつと悠斗の体がどろりと溶け、液体金属のように変化した。

「何だ・・・これ！」

その身を完全に液状にすると体の大きさを超える量の規模に広がっていった。

それは巨大なゼリーだ。

朱里も剣を抜いて後退し、俺の側に立っていた。

何か始まる・・・

息を呑んでその様子を見守っていると、急に全身をぶるぶると震わせた。

すると硬質化させた巨大な針が四方八方に無数に放たれた。

その針の太さはビルの柱に等しく、高度は鉄、速度は弾丸のようであるで嵐のように降り注いだ。

ドン！ドン！ドン！

公園の遊具に轟音と共に容赦なく突き刺さる鋼鉄の針。

滑り台の鉄板など簡単に貫き、立ち並んでいる太い木々もなぎ倒

していた。

朱里は動けない俺を盾のように護っていた。

次々と襲い掛かる針の嵐を細い腕で振り落とす。

その速さと威力は尋常ではなかった。人のものとは思えない技は全ての攻撃を完璧に防ぎきった。

その様子を見た、いや目が無いから感じたのか悠斗であった。ゼリ
ー状の生き物は朱里に恐怖を感じつつあった。

46話

朱里は嵐の隙間を潜り抜けて、ゼリーの中心に距離を詰めていた。

果たしてこんなゼリー状の肉体に弱点があるのだろうか？

大きな疑問がそこにはあった。しかし朱里にはそんな不安はなかった。

自らの剣を力を信じ、目の前の敵に向かっていくだけだった。

そしてその圧力は最高潮に達しつつあった。

悠斗は悪寒を感じていた。

今のままでは、まずいと判断したのだろう、どろどろの体を急遽本来の形に戻した。

しかし判断が数秒遅かった。できそこないの形になっていた悠斗の体は横一線に斬られていた。

「終わりだ・・・」

体がずれると時間差で二つの肉体が落ちる音がする。

「がああああああ」

悠斗は人間の姿で、上半身、下半身に切り分けられた。

しかし一滴の血も流れていない。

断面が滑らかで半透明になっていた。そうだ悠斗の体の中身は存在しないのだ。

「ぐづつづつづつ……何故だ！なぜだあああああ」

地べたを這い蹲りながら叫んだ。

それは自分の敗北の理由が見つからなかったからだろう。

「俺の……体は……最強なんだ。斬られてもすぐくつつくんだ……
なのに……何故だ、俺の体が離れてる……」

体を液体金属のように変化できるのなら修復も可能だろう。しかし朱里はその疑問の答えを出した。

「私の刀の前では、三条織斗の掛けた呪術の力は効かない……
これは邪を討ち、魔を退け、そして何よりも自らの意思を持つ生き物のような武器」

自らの意思を持つ？武器に意思が存在するのか？

「私が斬ったのは肉体ではない。お前の肉体そのものを蝕んでいた三条織斗の力だ。」

「つまり……お前の肉体はもはや自分のものでなくなっている……」

「じゃあ……じゃあ……俺はこのまま死ぬのか？そんなはずは

ない。

意識だつてはつきりしている。それに斬れた肉体だつてすぐに戻るんだ……

戻るはずなんだ。俺は死ぬはずがないんだああああ

未だに悠斗は納得していない。

「馬鹿！いい加減に悟れよ！お前はたくさんの命を奪ったんだ。大人しくその罪を受け入れろ！」

悠斗は死を覚悟はしていなかった。しかし訪れる恐怖は計り知れない。

頭の中は混乱して次第に意思を失っていた。

指先が振るえ動きが少しずつ鈍くなっていく。

「あ……あ……あ……」

見ているだけでも悠斗の肉体は今までの状態を保つことができなくなっていた。

ぼこぼこ異様な音と共に肉体の色が変化していく。

滅びるのは時間の問題だ。

「悠斗……最後に聞かせる。織斗はどこにいる？」

俺はそれだけでも聞いておきたかった。

「知らない・・・あの人は・・・俺が草薙の剣を渡したらそのままどこかに消えたんだ。」

俺を残して・・・あ・・・あ・・・もう。駄目だ・・・体があ・・・」

そこまで話すと悠斗の姿はぱちんと弾けてただの水になってしまった。

俺の足元には悠斗だったはずの水が流れ込む。

そこに対した感情は無かった。

浅木真希を無残に殺し、京の命を玩具のように扱った悠斗は当然の報いを受けたのだと思った。

いくら三条織斗に操られていたとしても俺は納得がいかないからだ。

あいつは自らの意思で混沌を望んだのだから。

「人の命って、こんなものなのか？」

俺は思わず呟いた。

「京の命も真希の命も・・・悠斗に殺されるためだけにあったのか？
しかも・・・その悠斗も今有り得ない形で死んだ・・・何なんだよ！これは！」

事実を受け止められない自分がそこにいた。朱里は悪くない。

しかし俺はそこにいる朱里にしか本音をぶつけることができなかつた。

朱里は悲しい顔を見せた。

そして俺の元へ静かに近づくとそっと抱きしめた。

「悲しみを抱くことが辛いことなのは当然よ。

しかし・・・あなたはそこから逃げてはいけないの・・・

お願い、決して現実から目を背けないで・・・」

現実から・・・目を・・・背ける？

その言葉でようやく目覚めたのかもかもしれない。

俺はこの惨劇を目の当たりにして、自分が逃げてはいけない状況だということを知った。いや、肌で、命で感じた。

友を亡くし、俺を想っていてくれる人を亡くし、敵を亡くし・・・

これが運命なのだ。

俺はこの輪に入らなくてはならないのだ。

「ごめん・・・俺・・・また逃げようとしていた。父親のせいにして・・・

自分は関係ないって。そんなの・・・死んだ奴らに悪い。

俺は自分のできることを最大限に努力しなくてはいけないんだよな・・・」

その言葉を聞いて朱里はほっとした。

「そうね・・・あなたの運命は数奇かもしれない。

しかしそこから逃げては何も始まらないわね・・・」

朱里に抱きしめられ肌で感じる体温が愛おしくも感じた。

「俺は・・・これからどうすれば・・・」

まず自分が何をすればいいのか知りたかった。

「私と一緒に、三条織斗のいそうな場所を探そ・・・」

「分かった・・・」

そう言うと朱里は俺の事を観察するように見た。

「その前に肋骨と右腕・・・それに肩か・・・海の怪我ひどいから、
これ塗って安静にしておいてね。」

明日には大体良くなっているはずだから」

朱里は薬の入った容器を俺に投げてよこした。

塗り薬か。

「じゃあ、明日の夜から活動ね」

そして俺たちは別れた。

47話

朱里にもらった薬は効いた。

俺はすぐに回復して今まで通りとはいかないが、傷は完全に塞がり、

骨の異常もすっかり治り普通に行動するぐらいはできるようになっていた。

「なんだ・・・この薬？」

俺は朱里にもらった薬を眺めて不思議そうに首をかしげた。

時刻は午前十時。

昨日の事は夢のようだったが、俺は数奇な自分の運命に従うことを決めた。

だから逃げない・・・

これから三条織斗という人物を中心に何が起こるかは分からない。

しかし覚悟は決めた。

俺には朱里・・・そして協力者側の人間だと思っ立木蓮がいる。

そうそう簡単に奴の野望を叶えさせてやろうなん思わない！

そんな考え事をしながら時間はただただ流れていった。

そして夜が訪れると、俺は待ち合わせ場所の八坂市で一番大きいといわれる神社に向かった。

ここでの思い出はいくつかあった。夏

祭りなどが行われると、少ない小遣いを握り締めて屋台を回ったことだ。

金魚すくいをしたり、射的をしたり、くじ引きをしたり、タコの入っていないタコ焼きを食べたりと・・・

朱里と一緒に行ったし、父親とも何度か行った記憶がある。

「懐かしいな・・・」

高校になってからは一度も来ていない。

神社では花火大会に合わせて屋台の準備が行われる。

その花火大会も明後日で、神社の中には既にいろんな機材が運び込まれていた。

俺は昔を思い出しながらその神社を見回していた。

「海？」

すると後ろから声がした。

朱里が後ろに立っていた。流石というべきか、俺の警護をするだ

けのことがあって、足音一つさせないで近づいていた。

「行こうか」

「ああ……」

俺たちはそれから夜の街へ繰り出した。

八坂市の繁華街は小さい。

会社の並ぶビルと飲食店がごちゃ混ぜになっている統一性の無い街が特徴的だった。

繁華街の人の数は不景気も影響してか年々少なくなっていた。

そのためテナントの入っていないビルも少なくとも無かった。

「ここに何が？」

俺は訳も分からないまま連れてこられた。

「最近……ここに三条織斗がねぐらにしていた場所があるらしいの……」

「こんな繁華街に？」

俺は不思議に思った。

人を二人殺している人間が普通なら人目を気にして目立たない場

所を選ぶはずだからだ。

「ここら辺はテナントの入っていない階のある雑居ビルが無数に立ち並んでいるわ・・・」

奴はそこを利用したのね」

「何故ここにいると知った？」

「表八鬼の情報を少し拝借したわ」

「いいのか？つていうか普通に聞いたらいいだろうが」

「駄目なの。あそこの組織は護門徒とその背後の神徒協会を嫌っている・・・」

だから私たち守護人にも何も教えないわ。

それに身内の犯罪者を裁くのは彼らの組織内で行うものだと思っている・・・」

そうだ・・・蓮も神徒協会が気に食わないって言っていた。

まあ、昔からこの日本を護っていた組織が護るべきものを横取りされた形なのだから当然だ。

「しかし・・・強引なことをするな。お前大丈夫なのか？」

俺は心配になって聞いてみた。

「大丈夫よ。私も表八鬼にちょっとした知り合いがいるから・・・」

「知り合い？」

「ええ・・・海もよく知っているはず」

「それって・・・立木蓮のことか？」

俺が真っ先に浮かんだのは彼のことだ。しかし朱里は首を振って違う人物の名前を挙げた。

「新城冬香よ・・・」

は？今何と・・・

俺は聞き間違えでもしたのだろうか。有り得ない名前を朱里が口にした気がする。

「あなたのクラスの担任でしょ！」

しばらく考える、考える、考える、考える。

思考停止。

「……ええ？それって……あ、あ、あ、あ、あの先生が？」

俺は頭の中が錯乱状態だった。上手く整理ができなくなっていて言葉も回らなくなっていた。

「彼女は……立木蓮、私、そしてあなたがこの学校にいるのを知ってこの学校に来たの。」

偶然じゃないわ……三条織斗が二人の人間を殺したのが二年前それと同時にこの学校に来た。

私たちがあの学校に入るのと同時にね。

それから私たちをずっと監視していた」

「お前は……あの冬香が表八鬼の一員だっていつ知ったんだ？」

「つい最近。」

たまたまあの人が着替えしているところを見たら、表八鬼のメンバーの証である刻印を見つけたの……

まず普通の人は気付かないような小さなあざのようなものなの」

「それで……お前は何て？」

「え？ストレートに話したよ。表八鬼のメンバーなんですかって」

本気かよ……それって普通聞けない。

「それからお互いの情報交換をしようってことになって、今に至るって訳。」

彼女は神徒協会が気に食わないだけで、護門徒や私の家が憎いで訳ではないらしい」

似たような話だ。

「蓮も同じこと言ってた。そもそも神徒協会って何だ？俺ら護門徒ってのはどうやって生まれたんだ？」

その質問に朱里は困っていた。

「その・・・私も詳しくは分からないの」

「そうなのか？」

「うん。私たち守護人は護門徒が現れ作られた組織だった。しかし神徒協会が直接係わってくるのがなかったの・・・作られてから一度もね。私たちはただその教えに従うしかなかった」

「それっておかしいな・・・仕切る側が姿を見せないと係わる組織が根強く残るはずがない・・・」

俺はそんな組織の体制に疑問を感じた。

しかし俺もその神徒協会とやらに会った記憶はない。

「まあ・・・今は、その情報を頼りにあの男を探さないと・・・」

話題を元に戻すと、俺たちは織斗が使っていたというねぐらの場所までたどり着いた。

「ここは・・・」

とある雑居ビルの三階、今は無人でドアには鍵もついていない有様だ。

構造を見る限り二十年以上は経っている建物だ。

「買い手がいつまでも見つからない無人のビルよ。」

「この管理者も毎日来るわけではないから、隠れるのには丁度いいかもね」

朱里は部屋を見回しながらそう言った。

「ここに奴がいたのは最近なのか？」

「三ヶ月前かな・・・」

それにここは表八鬼の人たちもとことん調べたらしいけど・・・何か残っていないかと思ってるね。それに海は人と違ったこと探すの得意だしね」

朱里は以前のような俺の推理力を期待したいようだが、それは無理のような気がした。

「そうは言っても・・・」

「こんな何も無いような部屋で第三者が探した後には有効な手がかりなんか見つかるのか？」

部屋の中には以前に入っていた会社の机が二台、

ぼろぼろのソファアが一つ、そして散乱した紙類が下に散らばっ

ていた。

トイレや水道もあつたが、水は当然流れない。

こんな状況では手がかりもあつたものじゃなかった。

少しだけ肌に感じる違和感のようなものはあつたが、気にすることではないと思つた。

「これだけじゃ、何も分かんないよ。」

あのさ、俺が思うに織斗の目的が門を開けることなら門がある場所まで待つていた方がいいんじゃないか？

確か大蛇山の山頂に出るんだろ？」

「そうしたいのは山々なんだけど・・・」

門が開く場所や時間は特定できないの。

それに発動条件も草薙の剣でどのように開かれるのか分からない。

・・・

「それって・・・表八鬼も分からないことなのか？」

「そう」

「なら・・・どうやって今まで門が開いたんだよ？」

門が開くには理由があるはずだ。そしてその仕組みも必ず存在する。

俺はそこが知りたかつた。しかし朱里は齒切れの悪い答えをした。

「たぶん・・・あちら側から開いていたんだと思う・・・
今までにこっちから門を開いたことはないのよ。」

聞いた話だと草薙の剣は、元々あちら側の人間がこっちの世界に
持ち込んだ物だし、

あの剣を扱えるのも限られているんだって」

「それじゃあ、手がかりがほとんどないじゃないか・・・」

俺は落胆してため息をついた。

「でも織斗はねぐらを転々としているって聞いていたの・・・
だからそこを一つ一つ探せばきっと何かが見つかるはずよ」

「それはいくつある？」

「全部で・・・五つぐらいだったかな？」

「同族殺しからそんだけ移動したのか・・・
しかし遠くに逃げないような所を見ると、門をよほど開きたいら
しいな・・・」

なあ、冬香には直接話しを聞けないのか？」

俺はもつと詳しく話せる人間から直接情報を得たかった。

それが例え担任であろうともだ。だが、朱里は少し困った顔を
していた。

「それは・・・どうかな・・・」

表八鬼のメンバーの中でもあの人は浮いた存在だからまだ私と話
をしてくれると思うの・・・

でも、護門徒である海のことや私のことを快く思っていない人も
いるから、直接話すのは……」

「冬香にも悪いか……そうだな」

「ごめんね。手がかりらしいものがなくて」

「そんな、お前が謝ることないよ……」

朱里が素直に謝るから俺も戸惑ってしまった。そして俺はふと思
い出したことがあった。

「そういえば……蓮は俺にはいろいろ教えてくれたけど、あれは
有りなのか？」

朱里はそれを聞くなり、あの人らしいといった様子で教えてくれ
た。

「あの人はまだ表八鬼のメンバーではないの。」

父親がそうだったらしいけど、正式には補欠のような存在よ。

とはいっても、実力は他のメンバーに引けを足らないらしいけど
ね。

でも海に話をしたってことは……あんたのことが気に入ったの
かな……」

「そうか？」

「だってあの人が人と交わることを極端に嫌っている人だもん……」

「

確かに蓮という人間は独特の雰囲気纏っている。

それは生き方が違うということからもあったが、人間的なもので明らかに違っていた。

そんな蓮に気に入られたとしても俺はどう受け止めて良いのかわからなかった。

嫌いというわけではない。しかしまだ彼という人間が分からない、

「それはそうと・・・これからは、残りのねぐらを全て調べるのか？」

「ええ・・・そうなるわね」

何日掛かるんだ・・・

「その間に門が開かなければいいがな」

見えない不安もあった。

謎が多すぎる三條織斗は不気味でならなかった。

人の心を操り、力を与えられる人物ということは分かっているが、俺自身その姿を未だに見ていない。

朱里ですら見たことはないらしい。

なら、俺はその人物と対峙することになったら一体どうなるのだろうか？

それから俺たちは先の見えない三条織斗の手がかりを追いかけていた。

49話

夏休み二十三日目

あれから一週間この街を探し回った。

そこで織斗が潜んでいたといわれる五つのアジトを調べることができた。

実際は表、裏八鬼の後手を回っている状態だったが、彼らとは敵ではないので別に構わなかった。

三条織斗は数ヶ月の間隔で隠れ家を移動していた。

まるで尻尾を捕まれる前に行動しているかのようだった。

そして俺らと同じく、彼らも有力な手がかりを得るわけでもなく、足止めを食っていた。

朱里を通じて冬香からは表、裏八鬼の情報を少しずつもらっていた。

冬香は俺自身が護門徒だということを自覚し、三条織斗を探していることに対して話すことはなかったらしい。

だから朱里には、二人でがんばりなさい。としか言わなかったらしい。

まあ、言ってしまうえば俺らは蚊帳の外存在だ。しかし門を護る

使命の俺としては逃げるわけにもいかない。

「なあ・・・織斗を俺らが先に見つけたらどうすればいいのかな？」

俺は一つの疑問にぶち当たっていた。

俺は非力だ。他の人間に比べて使える能力といえばこの洞察力しかない。

それも不思議な力には関係ない。

だが、それだけでは俺よりも速く動け、ものすごい威力の攻撃を繰り出す者には無意味に等しい。

そんな状態で織斗とやりあうことになったら真っ先に殺されてしまう。

「大丈夫・・・戦闘になれば私があなたを守るから」

朱里は嘘偽りのない言葉でそう言った。

俺は門を護り、彼女は俺を守る・・・そんな関係だ。

「織斗の能力は何だ？人を操れるとしか聞いてないが・・・」

「あいつの能力は・・・呪術よ！」

基本的には人を呪い殺したりできるものなんだけど、奴の場合は違う。

呪印なるものを体に侵食させそこから他人の体を支配する・・・自分の思い通りに」

「つまり操り人形のようなものか」

「そう・・・悠斗も悠斗に間接的に術をかけられた京もそうだったでしょ？」

嫌なことを思い出した。

「最低な野郎だ・・・」

「そう！だから早くあいつを捕まえないといけないの。昔はこんな呪術も裏の人間としては重宝された・・・しかしその能力を表で頻繁に使われでもしたら。」

この八坂市の人間のほとんどが駒にされてしまっわ

「それはまずいな・・・」

事態は一刻を争うことを再認識した。

「しかし未だに手がかりが無い・・・これでは動けない」

「そうね・・・」

「はあー・・・」

俺たちは町外れの公園のベンチに腰を下ろして休んだ。

「気分転換に何か飲むか？」

俺は側にあつた自動販売機を見つけると歩いていった。

「じゃあ、あたしスポドリで・・・」

「あいよー!」

そして二人分の飲み物を買々と朱里の元へ戻って腰を下ろした。

「なあ・・・朱里は自分の境遇ってやつに不満を感じたことはなかったのか?」

「それって護門徒を守るってこと?」

「ああ」

「そうね・・・感じなかったって言ったら嘘になるかもね。」

何で自分は他の人と違うんだろう?って考えたこともあったな。

普通に暮らして、結婚して、子供生んで、穏やかに死にたいとかね・・・

でも、私たち家族が今までそうだった普通の人たちが暮らすための手助けをしてるんだって思ったときに、

そんな願いは捨てた。

自己犠牲って言葉は好きじゃないけど、自分の力で何万の人が幸せになれるならね・・・」

朱里はにっこりと笑っていた。

「海は・・・私の言葉で知ったんだもんね。逃げたくなるのも当然だよ」

「・・・」

「でも、私ね、海を守るっていうことだけで救われているわ。同じ運命を共にしてらって感じですか……」

「それは……」

俺は言葉に困り、何も答えられなかった。

「でも……前に進むしかないよね。お互いに」

「そうだな」

いずれ訪れるであろう危機に備えて俺たちは自分たちの境遇を確かめ合った。

「俺が思うに・・・織斗は意味があつて、隠れ家を変えているんじゃないかな？」

俺は話を切り替えて織斗の一連の行動について話し始めた。

「門を開くには草薙の剣という鍵がある。しかしその使い方を誰も知らない。」

恐らく三条織斗も初めは知らなかったんだと思う。

だからその事実を知ったからこそ、行動に移したんだと思う・・・

「ということは、門の開け方を草薙の剣を奪う少し前に知ったということ？」

「だと思つ・・・知らない状態で動くのはただの無謀な計画に過ぎない・・・」

そしてこの数ヶ月に等間隔で五回もの痕跡を残して移動だ。これには意味があるんじゃないか？」

「そうね・・・」

朱里は思い出したかのように、八坂市の地図を取り出した。

「私・・・地図に書いてたんだ。これ見て何かわかる？」

八坂市の地図には八坂市中心に大蛇山、そしてそれを取り囲むように街ができていた。

移動した五箇所のところに赤い印がされていたが、何かの形に見えた。

「これ・・・線で繋ぐと・・・」

俺は地図を眺めて自然とある形が思い浮かんだ。そして朱里に渡されたペンで線を書く。

「正五角形？」

見た形はそうだった。

「そうだな・・・でも・・・何か変だ。大蛇山を中心に書かれているように思えるが、ずれている・・・」

たぶん、これは正六角形になるんだ！」

「そうすれば・・・大蛇山が中心になるわ。

門を開く鍵は大蛇山も含まれているから、その可能性は高い・・・じゃあ、次か、今現在いるかも知れない織斗の隠れ家はこの、六番目の位置になる・・・」

その通りだ。俺は頷いて朱里を見た。

「今までの隠れ家もそうだったけど、きつとここにも何かをしに現れるはずだ」

手がかりを得た俺たちはそのまま六番目の隠れ家だと思われる場所へ移動した。

閑静な住宅街のこの地域は人気をまるで感じさせなかった。

時刻は夜の十二時を回っていた。

夏の暑さも落ち着き涼しい風が大蛇山から流れ込んでいた。

「場所からすると、この廃墟の屋敷だと思うけど……」

俺は地図を片手に織斗が潜んでいそうな場所を探した。

そして人目がつくのを避けるのならこの廃墟の屋敷しかなかった。

「そうね……分かりやすいくらい怪しい空気が流れてる……」

朱里は何かを感じていたらしい。体が小刻みに震えていた。

「入る……か？」

「そうね」

俺たちの間に緊張が走っていた。

この廃墟の屋敷は数十年前に財産を失った企業家が手放したものだ
だった。

そしてその企業家はここで自らの命を絶っていた。

そのせいもあってか買手も見つからぬまま時を過ごした。そして今だに誰も立ち入らなかつた。

そんな目に見えない恐怖を感じながら俺はその屋敷のドアを開けた。

きききききききききき

古びた木のドアがそれらしい音を出す。

まずいなー 織斗はいないかもしれないが別のものがいそつだ。

俺の心臓は高鳴るばかりだつた。

「朱里・・・大丈夫？」

気遣つて声を掛けてみた。しかし朱里も怖がつていた。

「だだだだ・・・大丈夫・・・」

声が上がつていて変な感じだ。取り乱しているのがばればれだ。

「その剣、幽霊も切れるのか？」

「そんな訳ないでしょ！」

そんなに大声出して否定しなくても・・・

とりあえず俺を先頭に中へと入っていく。

真っ暗だ。何も見えない。

俺はポケットからペンライトを取り出して辺りを照らした。

「用意がいいのね・・・」

そして俺たちはきしむ床を歩きながら先に進んだ。その音を聞くだけで鳥肌が立っていた。

闇は心まで飲み込むかのように深く、黒かった。

「何か感じるか？」

俺の心臓はばくばくと有り得ない速さで鼓動していた。

朱里も同様に緊張していた。

「まだ・・・何も・・・」

広い一階のリビングをゆっくりと一周してみるが何も見つからなかった。

はずれだったのだろうか？

「うーん・・・」

俺は頭を掻きつつ一瞬気を抜きかけてしまった。しかしその時頭上から声がした。

「よじこぞ・・・客人・・・」

51話

俺たちはびくりと体が反応すると声のする方向を見た。

そこには何も見えない。

闇だけだ。

急いでライトで声のする方を照らした。

しかしそこには誰もいなかった。

この屋敷は日本家屋とは異なるほどの広さで、洋館そのものだった。

建築様式は博物館や美術館といった感じで、二階へ繋がる階段は吹き抜けになっていたので、

全てがむき出しだった。

二階の踊り場から一階の様子が見渡せる、そんな感じだ。

だから天井の高さも相当のもので、三階に相当する高さがあった。

そして広々としたリビング、兼、玄関には小さな音でも響き渡っていた。

「ここを探し当てるとは・・・よほど頭の切れる奴らしい・・・」

声のする場所が二階から一階に変わった。

移動しているのか？

俺の思考回路はまともに働かなくなってきた。

「ほう……護門徒の……月夜灯の悴か」

今度は近くなったり遠くなったりと、声があちこち移動している。

しかしこれは紛れもなく渦中の人物の三条織斗だ。

姿こそ見えないものの放っている雰囲気は独特だ。

俺ですら異様な空気の流れを体で感じ取っていた。

「何故、親父を知っている！」

俺はライトであちこち照らしながら部屋中に聞こえるように叫んだ。

「くくく……有名人だからな。私たち裏八鬼にも……表八鬼にもな。

そして彼は強力な術者でもあった……私も彼に憧れたものだ……
絶大な力というものを自らの体で思い知らされた」

思い知らされただと？こいつ……親父とやりあったのか？

俺は様々なことを考えた。

「そうそう……私のプレゼントは気に入ってくれたか？」

プレゼントだと……

「貴様……悠斗と京のことを言っているのか？」

ぎりつと奥歯をかみ締めた。

「ま……未熟だがなかなかの駒だったよ。君の命を奪えなかったのは残念だがね。」

しかし灯氏の御子息ならこの位の難題はクリアしてもらわないとね」

「お前！遊んでんのか？人の命をもてあそんで！」

俺は柄にもなく声を荒げた。例えそれが強力な術を持つ殺人者だとしてもだ。

「君は私の起こしている出来事の結末を見たいとは思わないのか？」

「門を開けるってことか？」

「ああ……かつて誰も成しえなかったことだ。しかし全ての条件が今揃っている……」

なら、開けるしかないだろう？」

織斗は自らの欲望を露にした。しかし俺は当然同意などできなかつた。

「あんたの欲望を満たすためにどれだけの血が流れたと思ってるの？」

そんな犠牲の上に成り立つ理想なんか・・・くそ食らえよ！」

朱里も反論した。

「理想に犠牲はつき物・・・それは人間の歴史の中で作られている。愚かなり・・・人は小さな枠組みに捕らわれているから無駄な争いが起こる。」

なら・・・新世界を自ら切り開くことが人の未来に繋がるのだ」

「欺瞞だ！貴様は神にでもなるうって言うのか？」

「そうかもしれない・・・あの門の向こう側の世界をこの世界と繋ぐことができるのなら・・・」

「そもそも・・・あの門の向こうには何があるんだよ！」

そこが知りたかった。織斗がそこまでこだわるあの門の向こうには何があるのだろうか。

「分からない・・・だから私は知りたいんだ。」

この世界に多大な影響を与え、干渉してくるあの世界にな・・・そしてこっちは行けないという概念をぶち壊したいんだよ」

織斗は自己満足のために門を開こうとしていた。

興味のため、力を得るため、支配のため・・・そんなふざけた話があるだろうか。

「話は平行線のままだな・・・まあいいか。私の思いは変わらない・・・」

なら、君たちはそれを阻止することに専念すればいい。

力あるものが生き残るのは世界を変えようとする者たちの道理だ。君たちの力が私を上回っているのなら真摯にそれを受け止めよう」

織斗のその言葉で俺たちの前に何かが姿を現した。

「これは・・・」

闇の中から現れたのは見覚えのある人たちだった。

一人・・・二人・・・三人・・・そろそろと出てくる。

俺のクラスメイトたちが・・・

「どういうことだ？」

織斗に向かって叫んだ。

「私の能力は知っているだろう？見たとおりのことだよ。悠斗はなかなかの働きをしてくれた・・・」

まさか京のときのように悠斗に間接的に操られているのか？

その数は全部で三十人。

「さあ・・・肉の壁の出来上がりだ。彼らをなぎ倒して私を倒せるかな？」

織斗の姿は未だに見えなかったが、この様子を楽しんで笑っているだけは分かった。

「朱里……」

「流石に……これは……ね」

俺たちは窮地に立たされていた。

空ろな目をしたクラスメイトたちはいきなり襲い掛かってくるわけでもなく、ゆっくりと近づいた。

その姿は生きる屍そのもので不気味さを漂わせていた。

そして皆同じようにこう言った。

「殺せ……殺せ……殺せ……」

まるでゾンビだ。

生気を失った者たちは俺たちを獲物のような目で見ている。

「どうすれば……」

死のカウントダウンが迫ってくる。

「そつだ……朱里の剣で術だけを斬れないか？」

俺は苦肉の策を思いつき聞いてみた。

しかし結果は最悪だった。

「ごめん……一人、二人なら可能かもしれないけど、

あの人数で一度に襲い掛かられたら、誤って致命傷を与えてしま
うわ……」

それだけ術を斬るって言うのは難しいのか。

どうしたらいい？

俺たちに残された時間は、ほとんど失われていた。そんな矢先に、

ガッシャーン

突然窓ガラスが割れた。

「何だ？」

絶体絶命の危機に黒い影が渦中のど真ん中に飛び込んできた。

それは疾風のように動き、俺たちの前に立ち塞がる人の壁を崩し
ていった。

どせ……どせ……どせ……

その影は最低限の攻撃で操られたクラスメイトたちを次々に気絶
させていく。

その動きは人間のものではない……

そして見覚えのある動きだ。

来てくれたのか。

52話

「蓮……」

俺は安堵の表情で蓮の背中を眺めていた。

「え？何で……蓮が？」

朱里は不思議そうに俺に聞いた。

「俺が連絡したんだ。彼とは約束していたから……織斗の情報を掴んだら提供するってね」

「だからか……この屋敷に入る前に電話してたのは」

「そういうこと」

俺たちが話している間に全てのクラスメイトが気を失って倒れていた。

「待たせたな……」

蓮は息一つ切らしていない。まるで準備運動でもしているかのようだった。

目の前の本当の敵と戦うために……

「ほう……」

織斗は戦いの流れが変わったこと少し動揺したのだろうか？

声だけではまるで分からない。

「相変わらず・・・自ら手を下さないとはな。

お前・・・殺し合いが怖いのか？裏八鬼の天才さんよ・・・」

「ふふ・・・立木耶甲の息子か・・・そういえば彼も体術のスペシヤリストだったな」

「あなたは退屈になったのか？この世界が。

ふざけた野心で俺からたくさんものを奪いやがって・・・」

「革命家と言つてほしいがな・・・」

蓮は下半身に力を込めていた。どこにいるかわからない織斗に飛び掛る気か？

「お前はただの人殺しだ・・・」

「裏八鬼は暗殺専門なんだがな・・・それを同士討ちしたぐらいで逆恨みされても困る」

「うるせえ！お前の理屈なんか聞いてないんだよ！俺が・・・お前を裁く！」

そう言つと蓮は大地を思い切り蹴り、気配のしない見晴らしの良いい二階の闇の中に飛び込んだ。

蓮の跳躍力は軽く十メートル、この時点で人の域を超えていた。

弾丸のような速さで突っ込み、

ガギン！

金属音が響き渡った。

「く……く……」

ぶつかった反動で蓮の体が大きくずれた。

それにしてもあの衝撃音はおかしい。金属を殴ったような音だ。

月明かりがゆっくりと穴の空いた天井から差し込んできた。

そして青色の光が三条織斗の姿を照らし出した。

「くくくく……」

黒いマントに包まれた長身で細身の男は不適な笑みを浮かべていた。

その男、年は四十代白髪交じりの長髪で、細目が不気味だった。

「いやいや……なかなかやるな……」

織斗は余裕の表情で蓮を見ていた。しかしその理由もすぐに分かった。

そこには織斗ともう一人の人間がいた。

その人物が先ほどの攻撃を防いだのだ。

金属音がしたのもその人物が持っている武器にあった。

「彼女がいなかったら私の頭は粉々になっていたかもな……」

織斗の後ろからその人物がゆっくりと姿を現した。

どこかで見たことのある姿……

「え？」

そいつは大きな剣を握り締めて立っていた。

俺はそいつに会ったことがある。

二度もだ。

「尾上……みゆ……」

その言葉を聞いて朱里は俺に聞いた。

「知り合いなの？」

「ああ……少し……」

尾上みゆは俺と会ったときのような隙は微塵もみせず、殺気だけをそこらに垂れ流していた。

まる立ち塞がるものを皆殺しにするかのようじ。

「く……」

緊迫した空気がそこから一帯を支配し飲まれそうだった。

「紹介しよう……私の右腕の尾上みゆだ。そう言えばその坊やは会っているな」

織斗は知っていた。

「彼女は……この世界の人間ではない。あの門の向こう側の人間なんだよ……」

「何だと？」

織斗は淡々と話した。しかしその間に蓮は次の攻撃に移っていた。

蓮の速さは人のものではない。一瞬で距離をゼロにすると織斗の真上にいた。

「しつこいな……君も……」

織斗は微動だにしないでそのままの状態だった。

その代わりに尾上みゆは動いていた。

下半身にぐつと力を溜めると、長い剣をくるりと回転させ、頭上にいる連に向かって一気に突きを放った。

ジュパッ

剣先が蓮の服を切り裂く。その音は下にいる俺にも聞こえた。

何て鋭い突きなんだ・・・

しかし蓮はみゆの攻撃を体を半回転させることでかわすと、態勢を崩すことなく一直線に蹴りを食らわした。

ガギン！

みゆは剣をかえして、柄でその攻撃を受けきった。

「か！」

みゆが大きく叫ぶと、蓮は壁に叩きつけられるほどの衝撃を受けた。

「くっ・・・」

蓮は抵抗することもできずに壁にめり込んでいた。

53話

「恐ろしい反応速度だな・・・」

織斗は蓮を見てそう言った。

「しかし・・・残念だな。」

彼女の方が能力は上だ。それでも君は立木家の能力を確実に上回っているんだ、誇りに思うがいい」

「織斗！なぜだ・・・その女はどうしてこの世界に来ている？」

俺ははつきりと織斗の名前を呼んで聞いた。

「あの門が何度か開くのは聞いたかな？彼女は今から三年前にここに現れたのだ」

三年前だと？・・・もしかしてあの隕石が落ちたとかいう騒ぎのことか。

「私は彼女の存在を待ち望んでいたんだ。彼女がいなくてはあの門は開くことができないから・・・」

そして、私は自らの術を使って彼女を手に入れることができた・・・
まあ、その代償もあったが・・・ね・・・」

織斗がマントの中から右腕を出したが、肩から先が無かった。

「それは・・・」

「かなりの実力者でね・・・従わせるまでに右腕を持っていかれたよ。」

しかし彼女を手に入れられると思えば安い買い物のようなものだ」
大したことはないように振舞う織斗そのものは普通ではなかった。

「全ての条件が揃った今、後は門を開くだけとなった訳だが、君たちとしてもいろいろ心残りだろう・・・」

そこでだ、最後の機会を与えよう」

え？今、何を？

俺は自分の耳を疑った。

「これは・・・私と君たちの戦争だ。」

一方的に私が優位に立って全ての理を変えるのは、つまらない・・・

なら、私を止める機会を与えようではないか・・・」

「どうして？」

「それは・・・自己満足だけかもしれない・・・しかし良い条件だと思わないか？」

それはそうだ。しかし織斗という人間の意図が全く読めなかった。

「明日の夜に大蛇山の山頂に門が開く。その前に我々を殺すことだ・・・」

そうしなければ、月夜海君、君のクラスメイトの友達は助からな

い

その言葉の意味は分かった。

「お前を殺さなくては、あの呪印は消えないって事か？」

「そうなるね。だから君は逃げる事ができないってことだ・・・表、裏八鬼も俺を止めにくるかもしれないけど、それも構わない。いいかい・・・私がここまで自信を持っているのは理由がある」

「てめえ・・・ふざけんじゃねえ！」

蓮が後ろから大声で叫んでいた。

暗くてどういう状態なのかは把握できなかったが、声を荒げるだけの元気があるなら大丈夫なのだろう。

「自分ばかり知った振りして、ゲームのように俺たちを動かしてやるって」

「ははははは・・・いいじゃないか。それが不条理な世の中というものだ・・・」

絶対に君たちは勝てないからな」

織斗は自らのスタイルというものを崩さなかった。

それは俺も不思議に思っていた。

どうしてそこまで言い切れる？

「なぜなら・・・君たちの実力は人という枠組みに捕らわれているからさ・・・」

「人の枠組みだと？」

「そう・・・第三の人類と言われる尾上みゆ。

彼女を見ればその枠組みはひどくもろいものだということが分かるのさ・・・」

蓮、君も拳を交えて感じたはずだ。彼女の實力を」

そこまで言う尾上みゆの實力は何なんだ。

俺は分からなくなっていた。

「まあ・・・ここは尾上みゆの記憶を覗いた私にしか分からないが・・・
君たちの未来は我が手に委ねられることだけははっきりしているんだ・・・」

尾上みゆは何も言わなかった。

俺と初めて会ったときにはある程度の会話もした。雰囲気も穏やかなものだった。

しかしその様子は今どこにもない。

彼女の言った『捕らわれの身だから』その言葉の意味が分かった気がする。

彼女もまた操られているんだ。

「そこに彼女の意思はあるのか？」

「くくくく……そんなものは無いさ。彼女は私の手足となって動く存在だ。」

そしてあの門を開く鍵でもあるのさ……彼女の握っている草薙の剣と共にね」

そうか……あの剣は草薙の剣だったのか。

そう言えば、公園で俺と会ったときも長い包みに入った何かを持っていた。

「さあ……人類の最後の戦いを始めようではないか……」

織斗はそれだけ言い残すと、闇の中に尾上みゆと共に姿を消した。

「くそ！」

俺は壁を思い切り叩いた。

状況を整理することができずに苛立ち、当り散らした。

「とりあえずは……完敗だな……」

蓮がすぐ側に立っていた。

見ると体の至るところから血を流していた。下手すれば骨の何本かは折れているはずだ。

「蓮……」

「そんな顔するな。海、この先は極めて単純な行為なんだからな……」

「え？」

「奴をぶつ潰せば全てが終わるってことだ」

そんな簡単に言われても……織斗とみゆの力は相当のものだ。俺からすれば先が見えない不安に体を縛られている。

「いいか……奴は自らの力を過信しすぎている……そこに付け入る隙はいくらでもある」

「しかし……どうしたら？」

「不本意ではあるが……表八鬼最高実力者の冬香に出てもらうしかないな……」

「え？」

「彼女なら、あの訳の分からない女にも勝てるだろうさ……」

そうなのか？冬香の実力はそこまですごいのか？

「それに相手が剣を使うと言うのなら、なあ、朱里だったか……お前が加われば勝てないことも無いだろ？」

お前の握っている武器は、神剣と言われた錬玉の剣だ……草薙

の剣と対を成す。

後は冬香と二人で協力すれば勝てないことも無い」

「そこまで冬香の実力は・・・すごいのか？」

「ああ・・・」

そこまですごい女だったのか・・・そうは見えないぞ。

「俺はどうすればいい？」

「俺たちは・・・二人で織斗を倒す。

もしも尾上みゆが操られているのだとすれば、先に織斗を殺してしまえば、その呪縛も解けるだろうさ・・・

まあ手っ取り早く片付くのはその方法だが、卑怯なあいつのことだ。

また人の壁をつくるかもしれないな」

「くっ・・・」

俺はクラスメイトの事が頭から離れない。

「最短で織斗を叩く！これがベストだ」

それから蓮は今後の方針や戦い方を決めると、集合時間を告げてそのままその場を立ち去った。

俺たちも待ち合わせの時間まで、各自で自由行動をとることにした。

最後になるであろう戦いに向けて。

「残り数時間の自由か・・・」

俺はここで自分の人生が終わってしまうかもしれないとも思っていた。

54話

「冬香・・・行くのか？」

一人の男が冬香の背中を見つめて話しかけた。

「ええ・・・事は、もはや取り返しのつかないところまで進んでいる。」

織斗を止めなければ私たちの未来は無い」

「確かにそうだが・・・あの男を止めるには全員の協力が必要だ。だから・・・もう少し待てないか？頭目が帰ってくるまで」

「織斗の性格は知っていますでしょう？」

あいつは無計画な異常者じゃない・・・

やると言った必ずやる！そのためにも遅れを取ることは許されない・・・

あなたがたが全員揃うのを待っていたら全てが終わる」

冬香は事態が織斗の思い描く終焉に向かっていているのを感じていた。

だから面倒くさい上司からの判断など待っていられなかった。

朱里が提供してくれた情報だけで十分だった。

「織斗の力がはっきりと分からない状況で戦うことも無謀だと思っ
が？」

「何もしないで手遅れになるよりはいい。それとも私の力では止められないと?」

ぎろりと男を睨むと、その男は背筋が凍った。

「い……や……」

「頭目には伝えて下さい。表八鬼四番鬼、新城冬香は破門覚悟で行動しますと……」

険しい表情のまま冬香は振り返ることなく大きな門を潜り抜けた。

「冬香……」

男はただ黙ってその姿を見送ることしかできなかった。

「さて……」

冬香は朱里に指定された場所に来るように言われていた。

そしてその場所を目指して歩き始めた。

俺は何も考えることなくただ一人部屋にいた。

「あと数時間で……この世界も変わってしまうかもしれないんだな……」

そんなことを口にしてぼんやりとしていた。

俺が役に立つことなどあるのだろうか？

黙っているとそのことばかりが浮かんでしまつので考えないようにしていた。

しかし護門徒という役職を受け継ぐ以上は何かの役に立ちたかつた。

それからしばらくして俺は父親の事を考えた。

どんなことでもいい、父親は俺に何かをしてくれたのではないか？

何かを残してくれたのではないか？

そんな淡い願いを抱きながら押入れを物色した。

出てきたアルバムは枚数の少ない写真が大雑把に貼られていた。

「ふ……父さんらしい……」

俺はその写真を見て思わず笑った。

写真に写っているのは昔の自分とそこに笑っている父親の姿がいくつもあった。

きつと亡くなった母さんが撮ってくれたんだろう。だからこんな笑顔なんだ。

こんなに俺も笑っているんだ・・・

俺はそれだけで自分が幸せな家庭に育ったということを確認できた。

アルバム以外に出てきたものは何もなかった。しかし俺はそれだけで満足だった。

言葉には表せないが、不思議な力で守られているような感じがしていた。

「行くか・・・」

俺は玄関までくると自分の部屋を見てしばらく立ち止まった。

ここもお別れかもな・・・

住み慣れた環境が愛おしく思った。

だが・・・俺は死ぬ気はない。また、ここに帰ってくる。

そして約束の場所へ出発した。

55話

大蛇山には薄く霧が掛かっていた。

それはまるで山全体が紫煙に覆われているようで、不気味さが増していた。

この山には古くからたくさんの血が流れていて、人のたくさんの情念が漂っていた。

靈感の強いものならその強い人の残留思念にあてられ、気分が悪くなったり人格が変わったりしてしまう始末である。

俺は元々強い靈感など持ち合わせていなかったので、気分が悪くなることもなかった。

しかしこの山に流れるどす黒い、人の憎悪だけは肌を感じ取っていた。

約束の時刻は午後十時だった。

蓮に言われて、山頂付近で待つように言われたが俺の逸る気持ちを抑えることができなかった。

指定された時刻より三十分も早く来ていた。

やはり誰もいない。

だが、このまま黙って待っているのも落ち着かない。

俺は辺りを探索して地形を把握することや退路のことも考えた。

大蛇山は杉の木が何百本と生えていた。

上を見上げてても空が僅かに見えるぐらい木々で覆い隠されていた。

これでは真っ暗だ。

山頂は見晴らしが良いとはいえ、それ以外は闇に等しい。

それから俺は、自分の歩幅を考えながら距離を測ったり、足場を確認した。

そうしていると蓮は俺の前に姿を現した。

「早く来たようだな？」

「落ちつかなくて・・・」

「まあいい・・・早速だが俺らは織斗の裏をかくぞ」

「裏？」

「ああ、あいつは自分の力を過信しすぎだ。

俺たちに、わざわざいる場所を教えるなんて奇襲攻撃を仕掛けられても文句は言えまい」

なるほど、それも一理ある。

真っ向で勝負に向かっても尾上みゆの力は相当なもの・・・

しかし織斗だけを倒すことができればそこで俺たちの目的も達成されるって訳だ。

「それで、どこに織斗がいるか分かってるんですか？」

「山頂の少しはずれだ・・・動く気配が微かにある」

微かにつて・・・どこまでこの人の五感は研ぎ澄まされているんだ？

俺は味方なのに不気味に思った。

「状況を見てお前が作戦を組み立てろ。

お前の洞察力なら最悪の事態は避けられるかもしれないから・・・」

「最悪つてどんな？」

「俺が殺されることだ・・・」

蓮はきっぱりそう言った。

「全ての状況を見極め、判断できてこそ本当の強者なんだ。俺にはそれが欠けている。

だからその部分を補ってくれ。お前の能力はそれだけ凄いものだ。いいか、もつと自信を持って！」

やばい・・・俺の心を見透かされている。蓮の言うとおり俺は迷

っていた。

俺の能力なんか役に立つのか？と……しかし彼は俺を信じている。

今はその期待に精一杯応えるよう努力するだけだ。

「分かった……俺に……任せて」

「くくく……その意気だ」

そして俺たちは織斗がいるであろう山頂東付近へゆっくりと近づいた。

朱里と冬香はまだこの大蛇山には来ていなかった。

彼女たちを待っている時間はない。

蓮は微かに漂う気配を追いかけ遠回りをしながら距離を詰めた。

「あと百メートルといった所か……海、覚悟はできているな？」

確認をしてきたが、俺も臆する気持ちを抑え決意を固めた。

「ああ……大丈夫……」

そして五十、四十、三十、二十……距離は狭まっていた。

五感の鈍い俺でも近づくとたびに心臓の鼓動が自然と高鳴っていた。

「心配するな・・・一秒でもいい・・・」

相手に隙ができてきているなら、俺の能力とこの武器で全てが終わる」
そう言っって懐からナイフを取り出した。

以前、蓮は言っていた。俺が凶器を手にしたなら敵はいないと・

その言葉が実現される時がきたのだ。

距離は十五メートルに迫っていた。もう肉眼でその姿は確認できた。

俺たちは杉林の中に身を潜め、織斗と尾上みゆは俺たちに背中を向けて別の方を見ていた。

「俺の攻撃範囲まで後五メートルといったところか・・・」

ひそひそと話しかけてきた。それは蓮の歩幅で七歩進めば、けりがつくということだ。

「俺に気がつき振り返ったとしても、その時俺のナイフは奴の首を切り裂いている」

一歩一歩さらに距離を縮めた。

いづく・・・

俺にはそこに安心感など存在しなかった。

どちらかというところがあるのではという警戒心があった。

「ふー……」

しかし蓮は呼吸を整え自分の間合いに入ったことを判断すると、迷わなかった。

閃光のように走り出すとその姿は目で追うことができないほどだった。

瞬きした後には、織斗の背中をもう捕らえていた。

がら空きの背中を確認した蓮は、そのままその勢いを利用してナイフを首筋目掛けて、弧を描くように振り下ろした。

しかし期待を裏切る光景がそこにあった。

「貴様……」

蓮は引きつった表情を見せた。

ナイフの先は肉を貫くことはなかった。硬い金属がそれを受け止めていたからだ。

その金属は草薙の剣、尾上みゆが持つ武器だった。

「碎ける！」

尾上みゆはそう叫んで、ぐいつと剣先に力を込めた。

すると、ぱんっという乾いた音と共に蓮の持つ武器はあっけなく
砕け散った。

「何!」

驚く間もなく次の攻撃が蓮には迫っていた。

みゆは剣先を蓮の心臓に標準を合わせ、鋭い突きを放った。

「うお!」

反射的に体をひねり直撃を避けたものの肉は少し切られた。

これが常人ならば確実にあの世に行っていた。

しかし蓮の常人の域を超える瞬発力がそれを救った。

みゆの攻撃はこれだけで終わらない。

突いた剣の軌道をすぐに変えると、今度は縦の攻撃で蓮に襲い掛
かった。

避けてもすぐに次の攻撃に繋がられる、攻撃のセンスはかなりの
ものだった。

「まず……」

蓮は剣先の軌道が変わるのを見切っていた。

コンマ数秒遅ければ真つ二つ、だがそれを見極め利き腕に蹴りを入れた。

がくん

みゆのバランスを崩し攻撃は大きくずれる。

それを見た蓮は今だ、とばかりに大きく距離を取った。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

呼吸は荒くなり、体からは血が流れていた。

それを見て俺は判断した。

56話

非常にまずい・・・蓮の実力は相当のものだと思っていたが、みゆはそれを確実に上回っている。

あれだけの短い攻撃で蓮がかなり動揺を受けているのが見て分かるのが何よりだ。

「やれやれ・・・奇襲とは考えたね。地形を生かし気配まで殺しているとはね・・・」

しかも最短距離で確実な方法をとっている。もしも私一人なら完全に殺されていたな・・・」

織斗が振り返り俺たちに話しかけた。

「しかし悲しいかな・・・彼女の方が純粹に強い。

これではこのまま駒も揃わない内に全てが終わってしまう・・・」

「くっ・・・」

悔しいが言い返せない状況ではある。

俺の能力では逃げるので精一杯、しかしみゆの身体能力を考えればすぐに追いつかれ殺される。

「おいおい・・・このぐらいで勝った気になるなよ」

蓮は強気とも思える発言をした。

「織斗・・・俺だって全ての力を見せている訳じゃないんだ・・・」

「ほう？それがはったりじゃなければいいがな・・・」

蓮の戦う気持ちは折れることはなかった。しかし俺は一步引き気味の状態だった。

それをすぐに織斗は見透かした。

「それはそうと・・・その護門徒君はこれから何の役に立つんだい？」

私が調べたところでは特殊な能力も見受けられない、ただ人よりも洞察力が優れているだけらしいがそれでどうなる？

頭の中での戦いならいくらでもできるさ」

痛いところを突いてくる。それは俺も分かっていたことだ。

頭と肉体は別物だ。頭がいくら回転しても体がそれに追いつけなければ意味が無い。

はっきり言って俺の能力など実戦では役に立たない。

しかし蓮は別の答えを出した。

「そう思うか？俺はこいつを見て怖いと思ったがな・・・」

「何？」

「こいつの能力は・・・こんなものじゃないと思ったんだよ。

いいか、こいつはあの護門徒の血を引くものなんだ、甘く見てい

ると足元をすくわれるぞ」

「蓮……」

「あいつの言葉に惑わされるな。あいつは人の心を折るところから始める……」

飲まれたら負けなんだよ」

そうか、そうなんだよ。ここで俺が諦める訳にはいかないんだ。

自らの気持ちを奮い立たせ、逃げる考えは止めた。

「そうか……まあ、それはそれでいいことだ。せいぜいがんばるがいいさ……」

しかし我々の仕込みもほぼ終了した。ここにいるのが君たちだけで残念だが、早速始めようか」

「ちっ……」

まずい……門を開けられてしまつ。そうなったらその先どうなるか予想もつかない。

朱里たちはまだ来ないのか？いつまでもこのままではまずすぎる。

俺は自分たちの置かれている状況を考えた。

「教える……今まで誰もこちらから開くことができなかったものをどうやって開けるんだ？」

蓮は怯むことなく織斗に向かっていった。

そんな蓮の態度に感心したのか、織斗はいきなり襲い掛かるようなことはしなかった。

「ほう・・・確かに知りたところだ。いいだろう、教えてやろう」

良かった。これで少しは時間も稼げる。

それにこのことは俺も知りたかった。

それから織斗は得意気に話しを始めた。

「あちら側の人間は六人の人柱を門を開けるために用意したらしい・・・決められた形にな」

「人柱だと？」

「生物の持つエネルギーとその配置による法則性で門を開くきっかけになるようだ。」

そしてそれを開くために用いられる特殊な金属が鍵として使われた・・・

言わなくても分かるだろう？この草薙の剣がその鍵だ。

これは本来向こうからこちらの世界に流れてきたもの。

向こうには別の剣が鍵となつてあつたらしいがこれは代用品だつたらしい・・・

まあ、それでも門を開けることには変わりない。私はそこに目を付けた。

尾上みゆという門を開く知識と鍵が存在した今、こちら側からも開けられるとな！」

「人柱はどうなるんだ？まさか・・・こっちの人間を六人、人柱にしたのか？」

俺もそこが引つかかった。生物のエネルギーが門を開く条件なら確実にそうなる。

「いや・・・こちらの人間は誰も人柱にしていない・・・」

「なら、何が人柱になったんだ？」

「あっちの生物だよ・・・人とも分からんがな」

「それはどういうことだ？なぜあちらの人間がこっちの世界にいるんだ」

「今から十七年前、そして三年前に門は少しだが開いた。

その時にあるものが向こうの世界からこの世界に落ちてきた」

「あいつのような生物のことか？」

蓮はみゆを指差した。

「まあ、半分正解だ。残りの半分は壊疽者というものだ」

どこかで聞いたことのある言葉。

そうだ、公園で初めて尾上みゆが口にしたあの言葉だ。

救えない奴ら・・・そして初対面のみゆが躊躇なく殺した生物。

「奴らはあちら側の生物らしいが、どうやらできそこないのようだ。体も心も・・・全てだ・・・そしてそれを追いかけてその女はここに来た。」

何の目的があったのかは知らんがな・・・」

「それでその生物を人柱にしたということか・・・しかも丁寧に六芒星の形とはな」

「ダビデの星だ・・・日本には馴染みが無いものだが、

ユダヤ教の象徴の星でもあるこの形は、この世界の時や空間を捻じ曲げるのに絶大な効力を発揮する。」

いわゆる力を増幅させる、魔法陣のようなものだ・・・

後はこの草薙の剣を所定の箇所突き刺せば全てが完成だ」

そこまで言うと、尾上みゆは剣を振り上げた。

「これで、終わりだ！」

織斗が満面の笑みでその様子を見て叫んだ。

しかし、みゆの剣は地面に突き刺さらなかった。それよりも自分を守ることに使われた。

ガキイイイイン

何かがみゆに向かって飛んできた。

それは鋭い武器のようなものだった。そしてそれをみゆは直感で

悟り剣で振り払った。

「誰だ？」

飛んできた凶器の先を見るとそこには知った顔が。

あの誰もが恐れる女教師と朱里だ。

57話

「お前か・・・冬香・・・」

織斗の表情は強張った。

「久しぶり・・・」

その姿はいつもの冬香ではなかった。

全身から湧き出る力が目に見えるかのように、近寄りがたいオーラを出していた。

俺は声を掛けられなかった。

「海・・・あなたも全てを知っているのなら、覚悟を決めなさい。見ているこつちがもどかしい・・・」

さっきの様子を見ていたのか。

それならそれで悪趣味だ。なぜ早く来ない。

「織斗、あなたやりすぎよ。狂った奴の同僚殺しだけなら目を瞑ろうかとも思ったけどさ、」

欲が深すぎる・・・世界の終わりを望んでどうする？」

「相変わらず傍観者気取りか・・・お前らしいな。」

冬香・・・お前は勘違いしている。私は世界の終わりなど見る気はない。

寧ろ、始まりを見たいのだ……」

「同じことだろう？ 始まりと終わりは対を成すもの……言い訳をしたところで、何も変わらない」

「お前の力なら私を倒せるかも知れない。

しかし今はこの尾上みゆがいる……

例えば表八鬼の殺戮の天使と言われたお前でもこいつには勝つことはできない」

「たいした自信だ……殺し合いの上で私にそんなに軽々しい言葉を吐いたのはお前が初めてだ」

冬香は怯む様子などまるで見せない。よほど腕に自信があるのだろう。

しかし今まで俺たちの教師だった頃のあのふざけた感じがどこにも見当たらない。

わずかな隙も見せず、膨らむ殺気は恐ろしいものだった。

そこまで徹底して俺たちを騙していたのか。

「なら試してみるか？」

にやりと織斗が笑った。

するとみゆは、凄い速さで飛び出した。

「ちっ……」

冬香は舌打ちをしながら大きく後退した。それと同時に

ドゴン！

みゆの剣が空振りをしてそのまま地面にめり込む。

「朱里！あなたも行きなさい！」

冬香は後ろにいた朱里に指示を出した。すると朱里は剣を抜いてみゆに向かっていった。

大地を大きく蹴り上げ、弾丸のような速さで剣と剣がぶつかり合った。

お互いの剣の威力がほぼ互角だったのか、ぴたりと動きがそこで止まった。

「衝撃をお互いに吸収したか・・・」

蓮が冷静にその状況を分析していた。

そしてみゆの目に感情など存在しなかった。

死んだ魚のように空ろな目をして、朱里を見ていた。

「目を覚ましなさい！あなたは織斗に操られているだけなの！」

朱里は剣を交錯させながら説得した。だが、みゆにそんな言葉は耳に入らなかつた。

生きる人形として織斗に命じられたことを行っただけだった。

「飛べ！」

みゆが剣に力を込めると、大きな衝撃波が突風のように朱里に襲い掛かった。

「うわ！」

朱里は紙くずのように飛ばされると、遙か後ろの大木に一直線で叩きつけられた。

「死ね！」

みゆは朱里を飛ばすのと同時に後を追いかけていた。

その動きは獣そのもので人間の能力を遙かに上回っていた。

そしてそのまま木に叩きつけられ身動きができなくなった朱里に追撃を仕掛けた。

だが、今度は冬香がそれを見逃さなかつた。

瞬時に鋭い蹴りをみゆのわき腹に思い切り叩き込んだ。

「ぐはあー！」

今度はみゆが脇の木に叩きつけられていた。

見ているこっちは息ができないほどの攻防に唾然としていた。

「流石だ・・・冬香・・・君はみゆの身体能力に引けを取らないよ
うだ。それに迷いもない」

「それ、褒めてるの？」

「ああ・・・だからこそ敵なのが残念だ」

みゆは既に立ち上がった。ダメージがあるのかはその表情からは読み取れない。

朱里もみゆの気迫に押されていた。

「さて・・・次行こうか・・・」

冬香は視線をみゆに戻した。すると、みゆは木々の陰に姿を隠した。

暗闇の上に見えづらい、そんな状況を利用したのか？

ぎゅっ・・・ぎゅっ・・・ぎゅっ・・・

みゆの葉っぱの上をする足音だけが聞こえていた。

朱里は意識を集中させていた。どこから敵が襲ってくるのか分か

らない、そんな見えない恐怖に飲まれてもおかしくなかった。

ザクツ・・・

大きく踏み込む音と共に背後からみゆは姿を現した。

「え？」

気付くのが僅かに遅れた。振り返るとそこにはもう剣先が迫っていた。

朱里の前には竹と同じ位の太さの木があったが、そんなのお構い無しにそれごと朱里の体を切りつけた。

スパツ・・・

「きゃあ」

胸の肉が横一直線に数センチ切られる。

朱里の前に木が無かったら内臓は飛び出していただろう。

58話

それでも出血は激しかった。

ここで態勢を崩したらそれこそ命を落とす。

そう判断したのか、朱里が斬られた傷を意識することはなかった。目をしっかりと見開いてみゆの姿を追っていた。

ガキイイイイン、ギン、ギン、ギン

何度と聞こえる金属音。

みゆの剣を振るう速さは空気を斬る音すらしていた。

それを受け止めている朱里も細かい動きで対応していた。

線と線が幾度となくぶつかり、そして火花を散らす。

俺たちは見ているだけだった。

互角と思えた攻防もやがて均衡を崩した。

朱里は傷を負っていた。重傷でないにしろ大怪我であることは事実だ。

そこから徐々に体力を奪われていた。

呼吸は荒くなり、傷口からの出血が激しくなる。

このままでは押し切られてしまう。そう思った瞬間、冬香は動いていた。

みゆに何か飛んできた。それは初めにぶつけたものと同じだった。

金属？いや・・・氷柱のような感じに見える。

速すぎる凶器が何かは判断できなかった。

みゆは両手が塞がっていた。だからそれらをかわすために朱里から咄嗟に距離を取った。

しかし襲い掛かる凶器はそれだけでは終わらない。

今度はみゆの右腕がなぜか炎に包まれていた。

「うっ？」

何が起きたのか分からなかったが、みゆは落ち着きながらふんと力を入れて右腕の炎を風圧でかき消した。

「その能力は・・・」

みゆが冬香を見て初めて口を開いた。

「さあ、何でしょう？」

みゆは見たことのない技に戸惑っていた。

今まで自分が経験したことのないものがそこにあるといった様子だった。

しかし織斗は、それが何かを冷静に分析し、冬香の能力を導き出していた。

「初めて見させてもらったよ、大気の温度調節が出来る能力をな・
」

「あら、ばれた？」

まあ・・・理論は単純なだけどさ、こうやって水を投げて一瞬で凍らせたりすれば立派な武器になるのよ」

そう言つと手に持っていたペットボトルから水を出して手に乗せると凄い速さで木に向かって投げつけた。

それと同時に飛んでいる水が一瞬で凍り、鋭利な氷柱状になっていた。

何十という氷柱が木に命中すると木は穴だらけになって、めきめきと崩れていった。

どんな勢いで水を投げてるんだ？これだけでも軽く人間の域を超えてるぞ。

笑いながらそんなことをやってのける冬香を見て身震いがした。

「新城家は、代々技を人前で見せることはしなかった・・・だからその能力の全貌は明かされることはなかったが、今、ここでそれを見てはつきりした。

新城家の能力の本質は空間に干渉するものだ。私の呪術に比べたら雲泥の差だな・・・

お前が天才と言われた理由も分かる。

空間に干渉することは自分の思い通りの場所を捕らえることの難しさと、それと同時に技を練り上げる集中力が必要だ・・・

だが、お前は意のままにそれを操っている」

織斗はそう話して、冬香のことを褒めた。

「そこまで言われると、礼の一つでも言いたくなるわね。でも・・・人前に見せないから知られないっていうことはどういうことか分かっているわね？」

「ああ・・・見たものは全て死んだというのだから？」

そう言うことが。

「なら、私は一気に決める！」

冬香が朱里の前に立ち、みゆと向かい合った。

「可愛そうな操り人形さん・・・

元の世界に返してあげたいけど、織斗に操られて私を殺すのなら容赦はしないわ」

「うるさい・・・お前は邪魔だ。消えろ！」

みゆは叫んで冬香に向かっていった。

速い。

今までの比にならないぐらいの速さだ。朱里と戦うことで体のギアがトップに入ったのか？

冬香はみゆの体の至る所に空間干渉を施し温度を上昇させることで、火だるまにしようと考えた。

しかし速度が追いつかない。

みゆの動きに技が間に合わず、みゆが走り去った後に空しく火花が散っている。

「この・・・化け物が！」

冬香は予想を超えるみゆの速さに嫌な汗をかいていた。

みゆは的確に冬香の首を狙って剣を振り抜いた。

びゅんっ

斬られる、誰もがそう思ったが、冬香は紙一重でしゃがんでかわっていた。

そして髪の毛を数ミリ切られる程度で済ませていた。

この女の反応速度も人並みじゃない。

そしてそのまま水を含んだ草を凍らしたものを手に握り締めみゆの右足を貫いた。

「く……」

みゆにも一瞬だが痛みによって隙が出来た。

その隙を見逃さず、冬香は体を転がしながら離れた。

「やれやれ……こりゃあ一人じゃきついわね……」

冬香は素直にみゆの実力を認めた。だからこそ、再び朱里に要求した。

59話

「朱里！援護頼む！」

それは決して情けないことではない。

朱里がそれを一番良く分かっていた。だからこそ、即答だった。

「分かりました」

二人は協力してこの場を乗り切ることを決めた。

みゆは足に刺さった草を引き抜くと、すぐ目標に向かって行った。

「数メートルある距離でもみゆにしてみれば一瞬なのである。だから悩んでいる時間などない。」

朱里は剣を構え、再び襲い掛かるみゆの攻撃をどうにか受け止めた。

「さつきよりも、重い……」

みゆの攻撃の変化に驚いていた。

そしてその間に冬香はみゆから確実に剣を奪うために、みゆの剣を持つ手に合わせ、

その空間の温度を急上昇させた。

千度を越す温度まで上げることの出来るこの能力だからこそ、服

の繊維を焼くことができるのだが、それはほんの一瞬しか出来なかった。

しかし一瞬でも皮膚が焼かれれば、体が反応して剣を落とすに違いないそう思っていた。

だが・・・みゆはそんな生易しい生物ではなかった。

手の皮膚を焼かれながらも、動きを止めなかった。

「何！」

そのまま朱里を弾き飛ばし、冬香に迫っていった。

「まずい・・・」

冬香は咄嗟にペットボトルを破壊して手持ちの水を全て巻き上げると、瞬間冷却で即席の氷の壁を作った。

しかしそれも間に合わない。水から氷になりかけた瞬間の薄い氷を縦に斬られ、壁は一瞬で崩壊した。

ズバッ・・・

「ぐあああー！」

冬香は氷ごと肩から斜めに斬られていた。

鮮血が真上に飛び散る。

「終わりだ！」

みゆは勝利を確信して、とどめの一撃を放った。

剣の軌道は心臓に向かって一直線だった。

突き刺す気だ。俺はその場を動くことすらできない。

ただその様子を見ているしか出来なかった。だが、隣にいたはずの蓮の姿が無かった。

それもそのはずである、みゆのすぐ脇にいたからだ。

「そこまでだ！」

鋭い蹴りをみゆの肩目掛けてぶつけた。

みゆは大きく体勢を崩してとどめの一撃を繰り出すことはできなかった。

そのまま踏ん張りながら大きく後ろに仰け反った。

「おい・・・大丈夫か？」

蓮は冬香の安否を気遣った。

そして冬香も意識を失うことなくその場に踏みとどまっていた。

だが、致命傷には変わりなかった。

斬られた傷からは血が止まることなく流れていた。

気遣う蓮とは対照的に冬香は有り得ない発言をした。

「血の気が多いから、抜いてもらって逆に丁度いいわ・・・」

手を傷口にかざすと、ぱきぱきっという音と共に傷口からの血が止まっていた。

「お前・・・凍らせたのか？」

蓮の言つとおりだった。冬香は傷口を凍らせて出血を防いだ。

「蓮・・・とりあえず礼だけは言っておく。だがな、邪魔をするな！これは私の戦いだ」

鋭い眼差しで睨まれた。

「う・・・」

蓮は冬香の気迫に圧倒されていた。

「さあ・・・続きを始めようか」

その言葉に触発されるようにみゆは、再び襲い掛かった。

三度目の突撃、その速さは過去二回のものよりさらに速くなっていた。

彼女は回を重ねるごとに強くなっているのだろうか？

空を切る剣の音はどんどん大きくなっていた。

そして空ぶりの衝撃で木の葉が吹き飛ばされていた。

こんな攻撃をまともにもらったら、体が二つに離れてしまう。

先ほどから同じような展開で押されっぱなしだが、策があるのだろうか。

冬香はみゆの攻撃範囲を僅かにはずしながら後退して、草の深い木々の中にみゆを徐々に誘い込んでいた。

「私に有利な戦況にしないと・・・」

そう言つと、冬香は手始めにみゆの足元にある水を多く含んだ草を一面凍らせた。

草は凍りながらみゆの足に絡まっていた。

「う・・・」

両足が徐々に封じられる。

しかしそれをすぐに察したみゆは大きく飛び上がった。

「これで、あなたの素早い動きを封じた。次は・・・」

冬香は空中を舞うみゆを見て標準を定めていた。

空中で素早く動くことや軌道を変えることは不可能、そこをついての攻撃だった。

冬香は全神経を集中させ、かつと目を見開くと、みゆの全身を覆うようにその場の大気の温度を急上昇させた。

一瞬で服の繊維が燃え上がり一気に火が体中を駆け巡った。

「よし！」

冬香はそれを見た瞬間に勝利を確信した。

「か・・・は・・・」

呼吸もままならず、みゆはもがき苦しみながらどうにか着地した。

炎が消えることは無かった、そのままなら黒コゲになるのも時間の問題だった。

しかしみゆは燃え盛る火を恐れることなく、燃えた体のまま迷わず冬香に襲い掛かった。

「まじ？」

冬香はそこまで考えていなかった。まともな生物がこの灼熱地獄で生きていけるはずが無い。

その全ての理論を覆し、みゆは炎の固まりになって突っ込んだ。

「があああああ」

雄たけびを上げて迷うことなく剣を冬香に向かって振り下ろす。

接近戦では冬香の能力はほとんど意味を成さない。今度は立場が逆転した。

ゆっくりと剣が自らの頭に振り下ろされる軌道が見えていく。

だが、それよりも先に別の線が割って入る。

ガキイイイイン

間に合ったのか・・・

冬香の前には朱里の姿があった。

朱里は自らの剣を横から大きく振り切ってみゆの剣を弾き飛ばしていた。

縦の攻撃と横の攻撃では、横からの攻撃の方が力が勝る。

そのことが目の前で証明されるかのようにみゆの剣は遙か後方にくるくると飛んでいった。

「あ・・・ああ・・・」

自らの武器を奪われたことを知ったその瞬間、一つの望みが絶たれたかのように力尽きてその場に倒れた。

それを見た冬香は、今度はみゆの周りの温度を急激に下げて炎を消した。

「どうして?」

朱里は心からそう思い、冬香に尋ねた。

「私たちが殺そうとしていた者ですよ。なぜ助けるんです?」

「さあね・・・こいつも操られてるだけだし。織斗が死ねば全て問題も解決するんですよ。」

「なら、生かしておいたほうがいいでしょ、この先のためにも・・・」

「

「門の向こう側を知るためにですか?」

「そうは言っていない・・・何にしても私たちの世界にもこういう存在は必要になってくるの」

「しかし・・・このまま大人しくしているとは思えないんですが」

「まあね。今は気を失っているみたいだけど、目が覚めたらまた私たちが襲ってくるわ。」

でもあの剣さえ封じてしまえば武器はない。彼女は剣がないと実力を発揮できないみたいだしね・・・

それにしても、向こう側の金属と言うだけあってかなり同調して使いこなしているわね」

「感心している場合じゃないですよ。早くあの剣を探して封じないと大変なんですから」

「だから、朱里、あなたがやってよ！私はここで、こいつが身動き取れないようにしておくからさ……」

「はい……」

朱里は冬香に言われたとおりに急いで飛んだ剣を捜しに行った。

そして残った冬香はみゆの体の状態を見回した。

ほぼ黒コゲの状態で生きているのか死んでいるのか分からない状態だったが、急に変化が表れた。

「何これ……」

みゆの体の至る所にあつた重度の火傷がみるみるうちに治っていく。

まるで新しい皮膚が下から出来ているかのように。

衣類は焼き焦げているものの、数分で元の体に戻っていた。

「こいつはやばすぎるわね……」

目に見えない能力に怯えながら、冬香はすぐにみゆが起きても身動きが取れないように氷の牢屋を即席で作っていた。

「これでよし・・・と・・・後は朱里が剣を捜し、織斗を全員で倒すことが出来れば、全て問題ないわね・・・
と・・・っとと」

冬香は今になって戦いの疲労が出たのか、足が思うように動かずその場に座り込んだ。

「予想以上にこの能力を使いすぎたわね。出血も多いみたいだし、動くのはもう無理か。」

「なら、後は若い連中に任せますか・・・」

俺たちは織斗と数分間にらみ合っていた。

「みゆと冬香、朱里が林の中に入り込んで戦っていると同時に俺らも戦っていたのだ。」

相手は呪術を使う能力者。

脳に直接負荷を与える攻撃を少しずつ与えてきた。

幻聴、幻覚、幻影そんなものが幾度となく連と俺の脳に侵食していく。

「まともに目を合わせるな！」

そんな言葉が蓮の口から聞こえてくるが、俺の思考回路は既に機能していなかった。

頭はぐらぐらしていて地に足がついていない。まるで酔っているかのようだ。

まさか・・・もう織斗の術に掛かって？

「私の能力は相手の持つ心の緩みを利用して支配する・・・殺し合いなど縁のない人間にはちよつとした恐怖感や快楽で心の緩みを見せる。

だから戦闘経験の少ない者なら私の言葉だけで十分・・・蓮・・・残念だが、君の相棒は既に私の支配の域に入っている」

織斗の話していることは当たっていた。

俺は確かに幻覚やら幻聴を見ていたのだろう。

夢を見るかのように目の前の光景は全く別の世界そのものだった。

61話

ここはどこなんだ？見渡す限り黒の世界だ。

まるで闇の中に迷い込んだ感じだ。

誰かがそこにいる・・・見たことのある奴らだ・・・

え？何で？

死んだはずの真希と京がそこにいる・・・

悲しい目で、俺をじっと見ている。

まるで俺の事を軽蔑しているかのように、人をみるような目ではない。

何かを口にしたいのにそれをぐっと堪えているようにも見えない。

止めてくれ！

見るな・・・見るな・・・そんな目で俺を見ないでくれ。

二人は人形のように何も話さない。視線をはずすことなくただ俺の事をじっと見つめていた。

無言でも俺には彼らの心の叫びが聞こえてくるようだ。

『お前のせいで殺された』

俺は声を出そうにも出ることはなかった。

二人に話したいことがあるのに。

だから止めてくれ、そんな目で俺を見るのは・・・

俺の心は罪の意識で満たされていった。

そしてそれを見計らったかのように、二人の姿が変化していく。

それは俺の心の弱い部分を飲み込む闇そのものだ。

大きな黒い影が二つ混ざり合っていると俺を包み込んでいく。

『お前のせいだ・・・』

『あなたのせいよ・・・』

『お前が殺した・・・』

『あなたが殺した・・・』

頭の中に二人の声が自然と流れ込んでくる。

両腕を見ると血でべったりと染まっていた。

『お前がいなければ・・・』

『あなたが係わらなければ・・・』

俺は闇に飲み込まれながらも思い切り叫んだ。

確実に脳は暴走を見せ始めた。

思いつめることを皮切りにどんどんマイナスの方向へ突き進んだ。

俺が悪い？俺が悪いのか？やっぱりそうなのか？

死んで償うべきなのか？どうなんだ？どうなんだ？誰か・・・
誰か・・・教えてくれよ！

思考はまともにできず、二人の罪を償うことだけしか考えなくなってきた。

俺の脳は自殺という形に一気に急降下していた。

そしてそんな自己崩壊を起こしそうな直前、

バキイイイイイン

体の痛みと共に視界がクリアになっていく。

今までの闇は光に照らされかき消されたかのように存在を消した。

どういつことだ？

先ほどまでの二人の声はもうしない。俺は夢を見ていたのか？

そこには俺を見つめる蓮の姿があった。

その拳は強く握られ赤くなっていた。

「痛っ……」

俺の頬は赤く腫れ口から血が流れていた。

俺はそこで気がついた。蓮が俺の事を殴って現実に引き戻したのだと。

そうだ俺は織斗の術に掛かっていたのだ。

「目が覚めたか？」

蓮は俺の様子を確かめるかのように話しかけた。

「あ……うん……」

俺はまだ術から抜け切れていない感じだったのか、少しぼーっとしていた。

「いやー……まさかそんな方法で私の術から抜けるとはね……」

織斗が感心したかのように俺たちをからかった。

「人間の脳はね、簡単に壊せてしまうんだ。

いくら肉体が強靭だったとしても脳はもろいものさ……
自分の見られたくない部分、思い出したくないこと……

それを永遠と見せられることで簡単に自己崩壊を起こす。ましてや若い者ならそうだ。感受性つて奴が強いからな・・・君のクラスメイト同様に支配するのは簡単なんだ。大人のように割り切れるほど心が成長してないからね・・・大人に見えて大人ではないんだよ君たちは！」

織斗はぺらぺらと偉そうに講釈を話し始めた。

しかし分からないこともなかった。

事実俺たちは若すぎる・・・それ故に新たな出来事を新鮮に感じるのもっともだ。

そしてそれに人生を左右されることもあるだろう。それだけ感受性が豊かなのだ。

だが、それを逆に利用する織斗の考え方は賛同できない。

やはり蓮も怒りを露にしていた。

62話

「てめえ……それで俺の親父も支配したのか？」

「それは違うな……彼は強い精神力の持ち主だ。容易な方法でこちらが手を出せば返り討ちに合う……」

だから心から信用させることから始めたさ……
数年間も同じ釜で飯を食べれば仲間としての信用は絶大だ。

そしてなによりも彼は酒が好きだった。

ほろ酔いになれば判断力も普段より多少は鈍る、私はそこをついた」

「卑怯な野郎だ……何故だ！俺の父親が何をしたっていうんだ」

蓮は心の底から怒っていた。

父親を無残な姿にされたことを許せないという気持ちがいびりびりと伝わってくる。

一方で織斗は冷静そのもの、自分のペースを崩さないいつものパターンだった。

「何も……彼は私の新しい術の実験に相応しいと思ってね。」

おかげですばらしい術を手に行うことができたよ。

そうだ、参考までに教えところ……新術は半径数メートル内で私と目が合ったり、声を聞くだけで相手を虜にしてしまう。

だから、私と戦う時はくれぐれも気をつけたまえ。目と耳を塞いで戦うしかないからな」

そんな術を隠し持っていたのか。

なら、俺たちに勝ち目があるのか？

「もう一つだけサービスで教えよう。この術は一日一度が限界なんだ。」

だから私は滅多なことでは使わないよ。特に蓮・・・まだまだ未熟な君なんかにはね」

「貴様・・・」

馬鹿にしているのかといった感じだった。

「そつだ・・・さっきの話の続きで、君の父親が術の対象になったわけだけど、本当は誰でも良かったんだよ。」

いやー悪かったね。たまたまなんだ・・・」

ぎり・・・

蓮の怒りは頂点に達していた。

まずい・・・このままでは織斗のペースだ。

「蓮・・・落ち着いて、奴は怒らせようとしているんだ」

俺は必死に蓮をなだめた。しかし蓮も俺と同じように心が未熟な十代だ。

分かった振りはしているが気持ちは収まっていない。しかし織斗は軽口をどンドン叩いていった。

「君の父親は強かったんだけどね。昔気質というか、くそ真面目と
いうか・・・私の計画の邪魔だったんだ。」

ただ簡単に殺しても良かったんだがね・・・それじゃあつまらな
いだろ？」

「何だと？」

「君のような息子もいたんだ・・・やっぱり家族に見てもらわなく
てはさー・・・」

それ以上蓮を挑発するな！

蓮は殺してやるといった目で織斗を睨み続けていた。

このままでは織斗の思う壺だ。

そして織斗は最後の言葉を口にした。

「もがき苦しんで無様に死にゆく姿をね」

ぶつん！

蓮は切れた。

当然だ。ここまで言われて切れないほど割り切ることはできない。

そこまで大人じゃないんだ。

目にも留まらない速さとはこのことで、視界から消えた蓮の姿は一瞬で織斗の背中を捕らえていた。

手には新たなナイフがきらりと光っている。

だが、俺には嫌な予感しかしなかった。

織斗がここまで挑発する理由・・・そこには訳があるのだと。

そしてその答えが出ることになった。

「怒りが大きな隙を生むということを学ばなかったようだな」

やはり蓮の行動を予測していた。

蓮の攻撃がいくら速いといっても分かりやすい攻撃ではすぐに読まれてしまう。

織斗は振り返ると蓮に向かって手を伸ばした。

蓮は驚いてナイフを突き刺そうとしたが、間に合わなかった。

それよりも先に織斗の掌が頭に軽く触れた。

どくん・・・

「あ……」

その瞬間、蓮の意識がすうつと飛んだ。そしてそのままがくと膝を地面に付いて座り込んだ。

「何を！」

俺は未だにぐらぐらする頭で、織斗に詰め寄った。

「なに……君の相手を彼にしてもらっただけだよ」

「え？どういことだ！」

「そのままの意味だよ」

俺は恐る恐る蓮を見る。

蓮は眠っているかのように目を瞑ったまま黙っていた。

びっくり……

手が動くゆっくりと目を開いた。

「まさか……」

そして立ち上がった。蓮の表情では何も分からない。

だが、膨れ上がる殺気に嘘は無い。

少し離れた場所においても肌で感じる事ができる。

そうだ、俺を完全に敵とみなして戦闘態勢が出来上がってしまった。
ている。

俺はごくりと唾を飲み込んだ。

蓮はじりじりと俺の動きを目で追っていた。そしていつでも飛び掛れるように距離を測っている。

蓮の俺を見る目はまるで尾上みゆの目そのものだった。

「蓮……止めてくれ……」

説得を試みようとも思ったが、それは無駄だとすぐに悟った。

何度も同じことを俺はしてきたのだから……

「やるしかないのか……」

死んだ魚のような空ろの目をした友人は、無言のままナイフを構えた。

ちょうどその時、ばさばさっと木々の隙間から剣が飛び出してきた。

「何だ？」

その場にいた全員が咄嗟にそれを見た。

まさかあの剣は、尾上みゆが持っていたものだ。

63話

俺はどのように判断したが、織斗も同じ考えだったらしい。

「みゆの奴・・・やられたのか。冬香の奴めなかなかやるな・・・」

そう口にするると、その剣の元へ走り出した。

「門を開くのはどうやら私の手で行うしかないようだ」

みゆの持っていた草薙の剣を手にとると、門を開く場所へと急いだ。

まずい、それだけはさせてはいけない。俺はすぐに織斗の後を追ったが黒い影がそれを阻む。

やっぱりか・・・

蓮はナイフを俺に向けて突き刺してきた。

「くそ！」

蓮の動きをどうにか先読みしてその軌道を逸らしたが、頬の皮膚は斬れていた。

以前も話したが、蓮の身体能力は俺の洞察力など簡単に上回ってしまう。

例えば俺が彼の動きを全て読みきったとしても、その動きに体がつ

いていけないのが現状だ。

だから俺は必死で蓮の攻撃をかわす。

しかしその攻撃を半減させることでやっとだ。俺の体は確実に斬り刻まれていた。

飛び散る血液と肉片。俺は集中することでその痛みを感じないですんだ。

だが、致命的な一撃を食らったなら、そこで終わるだろう。

積み上げていたものが崩れてしまう。

今の蓮を止めるには気絶させることが理想的だが、そんなことができるほど俺は戦闘経験が豊富ではない。

織斗を止めなければそこで全てが終わる。

だが蓮は攻撃の手を休めない。

俺の頸動脈、心臓、腎臓、肝臓、肺を確実に狙ってくる。

どこも刺されたら俺の動きはそこで止まる。

「はっ・・・はっ・・・」

蓮の動きは全ての切れが格段に良くなってくる。

一方俺は出血に伴い動きが鈍くなってくる。

だが、蓮の動きは良く見えた。体が鈍くなっても脳が活性化されたような感じだ。

次のナイフの軌道、移動場所それが自然と頭の中に見えていた。

そのおかげで、どうにか最小限の動きで蓮の攻撃をかわしていた。

俺はそれと同時に妙な違和感を感じていた。

それはまるで先読みしているかのように蓮の動きが良く見えてきたことにだ。

おかしい・・・こんなことは今まで無かったはずだが・・・追いつめられて体が変化したのか？

その証拠に蓮のナイフは次第に俺の皮膚すら斬ることができなくなってきた。

俺は攻撃を重ねることに目覚めたかもしれない能力の感触を確かめていた。

二歩先に蓮が踏み込む・・・

それを見越して俺は先に横にずれて動きを崩した。

どうやら読みに間違いが無いらしい。その通りに蓮は動いていた。

これは・・・もしかしたら・・・

俺にはその瞬間様々なことが思い出された。

勉強がすらすらと説けたこと。

友人とバスケットの試合をしたときの相手の隙間を縫うかのような指示出し。

そこにあるかが分かっていたかのような真希の家の中での現場検証。

蓮のような身体能力者の攻撃を無理なくかわすこと。

断片的に頭に自然と入っていた映像・・・

今まで俺は勘違いをしていたのか？

自分の能力に蓋をしていたのか？

「はあ・・・はあ・・・」

それでも俺の呼吸は荒かった。

緊張感と所々の出血が自然と体力を奪っていたことは事実だからだ。

「殺す・・・」

蓮は京と同じ台詞を俺に向かって吐いた。

「くそ・・・」

こうなってしまっはもはや手遅れなのか。

自分の能力をやつと知ることができたのに。

これでは蓮を殺すしかない・・・

蓮の止まることのない攻撃をかるうじてかわしながら思い悩んで
いると、

朱里がすつと俺の前に姿を現した。

ガキイイイイイン

蓮のナイフを大きな剣で受け止めた。

「朱里・・・」

「ここは任せて、さあ、織斗を止めに行つて頂戴！」

流石、頼りになる俺の守護者だ。

「頼む！織斗を止めるまで堪えてくれ」

俺は朱里にその場を預け、織斗の元へ走つた。

その気持ちはもう以前の自分ではなかった。

仲間を信じ、自分の使命を果たすということではいっぱいだった。

64話

「ははははは……これで完成だ！」

織斗は高笑いをしながら自らの願いが成就する瞬間を楽しんだ。

草薙の剣が地面に突き刺さると、剣からまばゆい光が山頂に降り注いだ。

光りは天を貫き、そこから空間に亀裂が入った。

「これは……」

一歩遅く俺はその場にたどり着いた。

そこからは黙ってその様子を見るしかなかった。

大空に広がった亀裂はびきびきと音を立てて少しずつ開こうとしていた。

「ジュジュジュジュジュジュジュ」

地響きのような音が空中に響き渡った。

そして遂に門が開いた。

「これが……門か！」

「その通り！だが、今回は途中で閉まることはない。完全に開くのだ・・・この草薙の剣を抜かない限り！」

「そんなことさせるかよ！」

俺は織斗を目の前でも怯むことはしなかった。ここで全てを終わらせる。

「そんなぼろぼろの状態はどうする？未熟な護門徒風情が私を倒せるのか？」

さつきも術に掛かりかけたろうが・・・それに今度は生半可なものではないぞ」

「蓮のお父さんに掛けたっていう新術か？」

「そうだ・・・目を合わせても駄目、声を聞いても駄目、この術をどう防ぐ？」

耳を塞いで目を瞑っていい・・・だが、私はその間にお前の心臓をこのナイフで貫くが？」

「ははは・・・確かにあんたの技は最強だよ。」

ここぞというときに使った理由も分かる。尾上みゆにも同じ技を掛けたんだろ？」

「そうだ。彼女の場合は反応速度を見誤って右腕を持っていかれたが、君程度の動きならそんなこともない、

一瞬で終わらせるよ」

びきびきびきびき・・・

門がどんどん開いてくる。

それと同時に得体の知れない影のような生物がどんどんこの世界に流れ込んでくる。

「残り数分・・・そこでこの世界が変わるんだ。

少し開いただけで多大な影響を与え続けたこの門が完全に開いたらそれこそこの世界はどうなるのだろうか・・・」

「そんなことは俺がさせない」

俺はポケットからバンダナを取り出した。そして目と耳をすっぴりと覆うように巻きつけた。

「ははは・・・それが私の術を防ぐための策かい？

面白すぎる・・・それでは私の攻撃をどう防ぐというのだ」

織斗はナイフを構えるとゆっくりと俺に近づいてきた。

その背後では未だに門の開く大きな音がしていた。

俺の視界には何も映らなかった。もちろん耳も塞がっていたので何も聞こえない。

唯一使えるのは鼻、口だけだ。

織斗が気配を消して近づいてくるのは予想できた。

「君には私の声は聞こえない・・・しかし知らない間に死ねる方が苦しまなくていい」

織斗は俺の真後ろに立っていた。

俺は微動だにしなかった。ただ黙って立っているだけだ。

そしていずれ来るであろう死の時間を前に俺は関係なく話した。

「織斗・・・お前は俺の能力を何だと思ったんだ？」

「？」

「俺がただの洞察力の優れた非力な奴だと思ってるんだろ？」

織斗は何も答えなかった。そして当然俺の耳にも何も入ってこない。

「それはお前も俺も思い違いだ・・・俺は気付いたんだよ自分の本当の能力に・・・」

独り言のように俺は話し続けた。

「何をだ？君はここで私に心臓を一突きされて終わりだ。そんなこと今知ったところで意味が無いことだ・・・」

織斗が俺との距離をさらに縮めてきた。

そして手に持ったナイフを意を決したかのように俺の心臓目掛け

て突き刺してきた。

取った。そう織斗は思っただろう。

しかし俺はその動きを読んでくるりとそのナイフを滑らすかのようにかわした。

「何だと！」

織斗は驚いた。目も耳も塞いだ状態で気配を完全に殺した自分の攻撃をかわせるなど思いもしなかったのだから。

「くくく……俺には違うものが見えているんだよ」

俺は自信満々で答えたがそのことで、織斗が不安を募らせた。

「まさか……臭いで？いや、そんなはずがない」

織斗は動揺していた。

何度も偶然だと自分に言い聞かせた。

こっちは気配を消している。

それに視覚、聴覚、を封じられた状態で戦える人間など存在しないのだから。

「次の一撃で決めてやるよ」

俺は言葉で織斗を追い詰めていった。

それにこちらも蓮との戦いで体力を大幅に消耗していたから、そんなに長引かせられなかった。

俺の言葉の効果は絶大だった。織斗は目に見えない恐怖に怯えだしていた。

いい気味だ、今まで追い詰められたことがないのだから。

「ふざけるな！そんなことがあつてたまるか、ただの偶然だ！次で決めるだど？いいだろう、私が決めてやるよ！」

織斗は感情をむき出しにすると、今までのようにゆっくりと近づくことなどしなかった。

自分の出せる限りの力と速さを搾り出し、最高の攻撃を俺にぶつけてきた。

「死ねえ！」

腐っても裏八鬼の端くれの織斗の動きは速かった。

ナイフは最短距離で俺の胸を目指した。

しかしそれと同時に俺の脳裏には織斗の動きが映像として流れていた。

それはまるで見えているかのようにはっきりと。

そして織斗は気付いていなかった。

俺が見ている映像は未来の織斗の姿だということに。

「俺が・・・俺が見ていたのは・・・」

俺は織斗の動きを先読みして体を最小限で移動させた。

それに対して織斗は体勢を大きく崩す。

そもそも今まで人を操り表立って戦うことのない織斗にとって、
肉体での接近戦はほぼ皆無だった。

右腕も無い状態ではさらにバランスが悪かった。

それらの欠点が今そこにでた。

蓮、朱里、冬香、みゆならこの程度で体を大きく崩したりしない。

俺は懐からナイフを取り出し織斗がしてきたことと同じことをし
た。

「それは・・・未来の姿だ！」

一気に織斗の胸にナイフを突き刺した。

ずん！

「ぐあああああああ」

ナイフは深々と胸に突き刺さり、刃のところがほとんど見えなかった。

織斗は絶叫を上げながらその場に倒れた。

心臓を貫いたかは分からなかった。だが、致命傷だということは分かった。

俺はバンダナを外し織斗の姿を自分の目で見た。

そして自分の能力を再認識した。

未来の姿を確実に捉えていたということ。

「はははは・・・見事だよ・・・」

織斗は吐血しながら俺を見て笑った。

「完敗だ・・・それは認めよう」

「なら、門も閉じようか・・・」

俺は急いで門を閉じなければと思い、草薙の剣の元へ歩き、剣の柄を握った。

そんな一瞬織斗から目を離したときだった。

「残念だが・・・ぐう・・・はっ・・・私もこのままでは・・・終

わらない
「

先ほどまでいたはずの織斗がそこにいない。

65話

どこだ！

俺が焦って振り返るとそこに血まみれの赤い悪魔が立っていた。

「ぜは……ぜは……これで……終わりだと思うな……」

瀕死に近い状態で俺に話しかけた。

「私は……世界を……変えるのだ！」

キイイイイイイイ

耳鳴りが突然して俺の視界がぐにゃぐにゃになった。

「これは……」

三半規管がまともな働きをしていなかった。

俺は立っているのか寝ているのか分からない状態だった。

「油断したな……君は……とことん爪が甘い……」

勝利を確信して……私の前でそのバンダナを外すなんて……

はぁ……はぁ……」

「な……何を……」

「言っただろ……私の声……そして目を合わせるだけで……術に掛かると……」

そうか……あの新術を俺に。

俺の剣を握る手は次第に力が抜けていた。

「そのまま……数秒待っていてくれ……それで……私の願いが叶うのだ」

門は残りわずかで全て開ききってしまう。

それと同時に門の奥から何やら怪しい姿も見え始めた。

黒い大きな腕がぬうつと門から抜け出し、その顔も奥に見えていた。

でかい……あの生き物は何だ？

山のような大きさの生物が門が開くのを今か今かと待っていた。

あんなのまでこの世界に出てきたら、どうなるんだ。

迫る時間が恐怖に変わりつつあった。

門は空間の広がりを含んで以上大きく広がっていった。

それに平行して、門の距離が俺たちと近づいた。

残り数分である門は完全に開かれ、向こうの世界の生物が流れ込んでくるだろう。

しかし俺にどうすることもできなかった。

意識はそこにかろうじて留まるものの体は指一本動かすことができなくなっていた。

ちくしょう……俺が、勝手に勝利を確信してしまったばかりに。

「さあ……もう一息だ……」

織斗が待ちわびていた。

俺はその姿をただ見ているしかできない。

バキイイイイイイイ

空間がきしむ音が大きくなり、まるで弾けそうだった。

それと同時に空気の流れも大きく変わり、まるで門の中に吸い込まれそうになった。

もう一押し……そう織斗が上を見上げていた時、

「そんなにこの世界が変わるのを見たいならお前一人で行きな！」

織斗の背後から声がした。

「何だと！」

蓮が織斗を蹴り上げて上空に思い切り吹き飛ばした。

門の側に行けば行くほど、吸い込む力は強くなっていた。だからかもしれない。

織斗の体はまるで木の葉のように空中を舞っていた。

「ぐ……はあああああ」

織斗は鮮血を撒き散らしながら、急接近する門を背にして焦った。

「ま……まさか……」

「そのまさかだよ！」

織斗の顔面は蒼白だった。

蓮は今までの怨みを晴らすかのように、空中で織斗の胸に拳を思い切り叩き込んだ。

そしてそのまま織斗は、門の中へと吸い込まれるように入っていた。

「うあああああああ」

織斗の音がどんどん小さくなり、光の中に消えていった。

「後は任せて！」

俺の所には朱里が来ていて、俺の代わりに草薙の剣を勢いよく引き抜いた。

すると、ずずんという低い音と共に門が開くのをぴたつと止めた。

流れが完全に変わったのだ。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

門はどンドン閉まっていった。

はみ出していた大きな黒い手は無理やり門を開こうとあがいていたが、それも無駄に終わった。

門が閉まるのと同時にその力が失われていくのか腕が小さくなり、大人しく引っ込めるしかなかった。

数分で門は閉まり、何事も無かったかのように空間は元通りになっていた。

俺の意識はまるで抜けた魂が戻ったかのように急にはっきりとした。

「は……あ……」

それを見て朱里は安心したのか、にっこりと微笑むと、良かった

と話しかけた。

「どうして？」

俺は驚いた顔のまま二人に尋ねた。

先ほどまで蓮は操られていたはずだ。

それが何で急に元に戻ったんだ？

「お前のおかげだ。お前が織斗に深手を与えたからその衝撃で俺の術が解けたんだ。」

それに俺が食らった術が奴の死と連動していなかったことにも救われた。

だから俺は朱里と協力してそのまま織斗の元に駆けつけたって訳だ」

「そうか・・・それで・・・俺の術も解けたってことは・・・」

「おそらく、奴は死んだな・・・」

蓮はせいせいしたといった様子だった。

「じゃあ、尾上みゆも・・・」

「術の効力は失われたはずだ・・・冬香が足止めをしているはずだから、全て解決だ」

「そうか・・・良かった・・・」

俺は全てが解決して安心したのかそのまま気を失ってしまった。

「え？おい！」

蓮は俺が致命傷でも負っているのではないかと心配して叫びながら駆けつけた。

朱里は倒れる俺を支えて地面に叩きつけられるのを防いでくれた。

そしてそつと俺に呟いた。

「お疲れ様・・・」

何よりの言葉だった。俺は意識がなかったが心地よい感覚に包まれているようだった。

蓮も俺の事を心配そうに見守っていた。

66話

あれから数日が経ち、俺の傷も完全に治癒していた。

それと同時に周りの環境も目まぐるしく動いていた。

父親がやっていた護門徒の所属機関である神徒協会の使者が急に乗り込んできている話を聞かれた。

事件の全貌やら今後の役目やらを順番に話した。

それから俺が護門徒に相応しいかどうかは、この後会議を開きそれから追って通告するらしい。

俺は正直今は何も考えなくなかった。だからか使者の話も半分以上素通りしている状態だった。

月日が無駄に流れ夏休みも終わりに近づいた頃、全員がそれぞれの道を歩むことが分かった。

織斗から開放された尾上みゆは、この世界に徘徊する向こうの世界の壊疽者を探して回るらしい。

武器は無かったが、それも途中で見つけると何も問題がないかのようにここから立ち去った。

蓮と冬香は学校を辞めて、表、裏八鬼の組織の建て直しを行い全国各地に向かった。

俺と朱里は変わらずそのまま学校に残った。

神徒協会からの通達はまだまだ先の話らしいので、それまでは学生をやらせてもらおうと思っていた。

朱里も俺を護るという意味で一緒にいてくれた。

「俺たちこの先どうなるんだろうな？」

そんな質問を朱里に投げかけた。

「それは分からないわ・・・」

確かにそうだ。

これからこの先の事はまだ良く分からなかった。

でも、俺は自分の生まれた意味というものに従うことを決意した。

それに父さんは未だに行方不明だがきつとどこかで生きていると信じている。

そして父さんが俺を巻き込みたくなかったその訳を聞くためにも俺は父さんを探したかった。

少しずつではあったが今まで見えなかった今後の目的や生きていく意味というものが分かってきた。

そうして人は成長していくんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3483e/>

紫煙の門

2010年10月11日04時07分発行